

フレンドシップ事業報告書(その2)

21世紀の実践に向けて

信州大学教育学部附属教育実践総合センター

平成12年度

フレンドシップ事業報告書(その2)

第2回フレンドシップ事業 全国学生シンポジウム報告書

21世紀の実践に向けて
～フレンドシップ事業の課題と発展～

信州大学教育学部附属教育実践総合センター

Friend Ship Enterprise

体験が私たち



Friend Ship Enterprise



ま え が き

信州大学教育学部長 藤沢謙一郎

この度、信州大学教育学部で開催された、「第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム—21世紀の実践に向けて、フレンドシップ事業の課題と発展—」の報告集が刊行されることになりました。刊行を心からお祝い申し上げます

この記録は、フレンドシップ事業を展開している全国の教員養成系大学・学部から、横浜国立大学、上越教育大学、鳴門教育大学、熊本大学、信州大学の5大学の学生が集まり、その体験を発表し互いに学ぶことで、21世紀へのより豊かな実践を目指すべく行われた貴重な討論のまとめです。シンポジウム開催と報告集刊行に取り組まれた実行委員会の学生諸君と指導にあられた本学附属教育実践総合センターの教職員に感謝申し上げるとともに、この企画に賛同されご出席くださいました参加5大学の学生及び先生方に厚くお礼を申し上げます。

21世紀の教育改革を進めるために、中央教育審議会、教育課程審議会、教育職員養成審議会、大学審議会、生涯学習審議会等々からの答申が矢継ぎ早に出されました。このうち教育職員養成審議会答申は、教師の指導力が国民から強く問われている状況において、新たに求められる資質能力を持った教員の養成が急務であると指摘しています。そして、今後教員に求められる具体的資質能力として、①地球的視野に立って行動するための資質能力、②変化の激しい時代を生きる社会人に求められる資質能力、③教員の職務から必然的に求められる資質能力、をあげています。いずれも大切な資質能力ですが、開かれた学校づくりを推進する立場からも、上記②に含まれる人間関係に係わる能力としての「社会性」「対人関係能力」「コミュニケーション能力」は、重要視されてよいものだと思います。

世間で言われる学校の3K、即ち「硬直性」「画一性」「形骸化」を打破するためにも、何よりも社会人として必要とされる能力を備えることが不可欠となります。そして、こうした能力は、机上の理論からではなく体験的・実践的な場をより多く積み重ねるところから培われるものです。学生はこのフレンドシップ事業により、子どもとの直接の触れ合い体験を通して多くのものを学びますが、一方で企画段階から準備に係わる中での様々な他者との折衝体験が社会性を養う貴重な場となっています。電話での応対、イベントに参加する子どもに掛ける保険のこと、道路使用に関する警察との折衝等々は、生きた実習の場としてかけがえのないものなのです。発足当時、一部には何か戸惑いもあったかに見えたこの事業も、今ではすっかり定着し、教育学部には欠かせないものになっているように私には思われます。

21世紀は教育の世紀と言われます。困難な状況は、強い人間を創り出します。教職への熱意に溢れる学生がお互いの体験を交流し、熱い想いを語ることがやがて教育界に新しい息吹を吹き込んでくれると信じています。

終わりにになりましたが、本シンポジウムに多大のご支援とご協力を賜りました関係者に厚く感謝申し上げます。

挨拶

信州大学教育学部長補佐 教授 渡邊時夫

このフレンドシップ事業は、学生が自主的・主体的に、そして自分の体全体を使って勉強してきたことを活かして、子どもたち全体と接触し、子どもたちの世界に入り、子どもたちの世界を健全な社会に導きたい、こういった発想で始まったものです。皆さんの担うところは、日本全体の願いでもあると思います。そして昨年、おかげさまで第1回フレンドシップ事業全国学生シンポジウムが開かれまして、その結果が冊子になって発行されました。私も全体を読ませていただきました。参加した諸君の感想を読んでみますと、子どもたちが自分たちを求めているのがよくわかった、という声が多くありました。つまりそれは人と人との交流です。更に、子どもたちと接触することによって自分も学ぶことができた、という学生諸君の声もありました。これは非常に大きな成果だと思います。

このような学生たちの声から、学生と子どもがふれあう活動だけではなく、より多くの人たち、つまり地域の人や学校の先生、あるいは父母の皆さんと手をつなぎ、一緒になって活動を進め、より大きな活動へ発展させようと、張り切っている学生諸君の姿が良く分かりました。皆さんの地道な努力と実践と堅実な実行力からみても必ず成功するだろうと確信しています。そして自分たちの大学の中の模索だけではなく、周囲の、地域や全国の学生のみなさんと手をつなぎ、各大学、各環境で実践しているものを出し合って、お互いのいい所を学んでいくと素晴らしい活動に発展するだろうと思います。

ところで、このフレンドシップ事業というのは今年で5年目、まだまだ若い活動であります。実質的に参加しているのは全国でもごく一部の学生と、ごく一部の大人たちに過ぎません。しかし、今のところ信州大学教育学部の実践の一つ、YOU 遊サタデーという活動も、最初はほんの一握りの学生が始めたものですが、一生懸命活動をし続け、それが何年か月日経って、現在ではこうして全国に知られるというところまで育ったわけです。このように小さなことが少しずつ広がって国全体の教育の雰囲気や環境を変えていく大きな力になるのだと思います。私たちの学部では、7年間続いた信大 YOU 遊サタデーを今期をもって発展的に解消することになりました。そして新たに平成12年12月に、一歩進んだ活動を始めようと、学生たちが準備にとりかかりました。

今回のシンポジウムでは、今までの経験から自分の持っているアイデアを出し合い、おいにぶつけあってほしいものです。そしてこのフレンドシップ事業が今後さらに発展していきますことを心から願っております。

フレンドシップ事業による「総合的な学習の時間」の指導力の形成

信州大学教育学部教授

附属教育実践総合センター長

土井 進

第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウムにご参加くださいました皆様、ようこそ、信州大学にお出でくださいました。心から歓迎申し上げます。ここ数日、信州の厳しい寒さが本格的になってきました。どうぞ風邪を召されぬよう十分気をつけて下さい。

さて、第三の千年の幕開けとなった2000年もあとわずかとなりました。21世紀に向けての教育改革が、学校、家庭、地域社会のそれぞれの場において、本格的に展開された1年であったと思います。

21世紀の教育改革を担うことのできる実践的指導力を備えた教員を養成することが、今、大学に強く求められています。ある校長先生は「他人に迷惑をかける子を論せない。ほめもせず叱りもせず、学級を燃え立たせる迫力もない。児童の掌握力の乏しさを痛感している」と述べています。今、教師になろうとする人に求められることは、子どもの中に飛び込んで、一緒に活動しながら、一人ひとりの子どもの内面の育ちを見据え、共に育っていくことのできる実践的指導力を錬磨することであると私は考えています。このような力量は、子どもたちとふれあう実践のなかでこそ豊かに育まれるものといえましょう。

文部省は必修部分を越える教育実習として、平成9年度から「フレンドシップ事業」をスタートさせました。これは、教員の養成段階において、学生が種々の体験活動を通して、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設けようとするもので、この趣旨を内容とする授業科目を開設し、都道府県・指定都市教育委員会等と連携・協力して実施することになっています。今年度は48の全教員養成大学・学部において実施されていると伺っています。

昨年の第1回フレンドシップ事業全国学生シンポジウムにおける13大学の学生の皆さんの生き生きとした発表をお聞きして、私はフレンドシップ事業が各大学の教員養成カリキュラムの改善に大きな力となっていることを感じ取りました。フレンドシップ事業を企画・運営しようとする時、教官・事務官の連携協力と学生が主体となることのできる教育実践活動の設定、そして、地域社会の人々の協力が不可欠です。これらはいずれも「総合的な学習の時間」を構想する時、授業者が考慮しなければならない事柄でもあります。この意味において、フレンドシップ事業に企画・運営段階から参画している学生は、自ずと「総合演習」を履修したことに通ずると考えられます。今後、各大学におけるフレンドシップ事業が「総合演習」として発展し、「総合的な学習の時間」を担うことのできる教員の輩出に貢献できるようになりたいものと念願しています。

平成12年度に4年目を迎えたフレンドシップ事業は、まだ濡れた藁の中に入れられた微々たる炭火に過ぎないかも知れません。しかし、そこから必ずや「教員養成カリキュラムの改善」という火が点き、やがて「21世紀の教員養成システムの確立」という炎となって燃え上ることを信じて、それぞれの大学において地道に「師弟同行・師弟共育」の精神で、学生と教官がスクラムを組んで前進してまいりましょう。

第2回フレンドシップ事業 全国学生シンポジウム

『21世紀の実践に向けて -フレンドシップ事業の課題と発展-』

平成12年12月9日(土) 信州大学教育学部 (長野市) 図書館2階

10:00~11:30 実践報告発表リハーサル (図書館2階にて)

11:30~11:50 記念植樹 (しなのき会館)

12:00~12:40 昼食

13:00	13:10	14:10	14:20	16:05	16:15	17:45	18:00
開 会 式	記念講演	休 憩	実 践 報 告	休 憩	パ ネ ル デ ィ ス カ ッ シ ョ ン	閉 会 式	

13:00~13:10 開会式 (司会:小池悠介[信州大学 国語専攻3年])
 1. 実行委員長挨拶 那須 良寛[信州大学 教育実践科学専攻4年]
 2. 学部長挨拶 藤沢謙一郎[信州大学教育学部長]

13:10~14:10 記念講演
 「フレンドシップ事業と総合的な学習」
 帝京短期大学教授・東京学芸大学名誉教授 佐島群巳氏

14:10~14:20 休憩

14:20~16:05 実践報告 (司会:小池悠介)

14:20~14:35 横浜国立大学 山本恭兵 (学校教育課程1年) 藤原 剛 (英語領域3年)

14:35~14:50 上越教育大学 伴 峰昌 (理科専攻2年) 細井康秀 (理科専攻2年)

14:50~15:00 信州大学 花村尚美 (理数科学専攻1年) 杉山雅幸 (野外活動専攻4年)

15:00~15:20 鳴門教育大学 藤田賀史 (国語専攻4年) 大門正憲 (理科専攻3年)

15:20~15:35 熊本大学 藤田勝一 (数学専攻3年) 北崎圭太 (教育学科1年)

15:35~15:50 信州大学 中村祐介 (理科専攻4年)

15:50~16:05 全体の質疑・応答

16:05~16:15 休憩

16:05~17:45 パネルディスカッション
(コーディネーター：山田理恵[信州大学教育実践科学専攻4年])

ディスカッションテーマ

「フレンドシップ事業での自然体験や社会体験から私たちが学んだこと」

17:45~18:00 閉会式 (司会：小池悠介)
1. 講評 近森憲助[鳴門教育大学教育学部助教授]
2. 担当教官挨拶 土井 進[信州大学教育学部教授]
3. 閉会のことば 那須良寛

シンポジウム終了後の日程

9日(土)

18:00~18:20 会場片付け 他大学参加者はしなのき会館で待機

18:30~20:00 夕食会(生協食堂にて)

20:30~ 茶話会(しなのき会館にて)

10日(日)

08:30~ 朝食

以降 長野市内を観光
見送り



記念講演
「フレンドシップ事業と総合的な学習」

東京学芸大学名誉教授

帝京短期大学教授

佐島 群巳

※大変長いので要約してあります。

あと25日か24日過ぎますと20世紀も終わり、新たな21世紀を迎えることになり
ますこの時期にこのフレンドシップ事業全国学生シンポジウムに私が総合的な学習につ
いてお話をするようにとお話がありました。私の申し上げたいことは大きく三つあります。
一つめは、今の社会がどういう動きをしているのか。二つめは学校教育に求められている
ものは何か、三つめは今教師にどういう資質・能力が求められているか。

1. 今、子供たちが精神的な貧困状態と身体的にひ弱な状況にあることが教育界の大きな
問題です。ひとつ例をあげると、これから少子高齢化社会を迎えるにあたり、人に対する
思いやり・優しさ、積極的な社会奉仕ができない子供たちが21世紀を迎えることができ
るのでしょうか。このように、子供たちを待ち構えているのは21世紀という激しい勢い
で動く不透明・不安定な社会です。そこで、皆さんが教壇に立ち活躍していくのです。フ
レンドシップに参加する皆さんの顔を見て、活躍を知って、非常に心強く思います。

さて、そのような時代に我々に課される課題には次のようなものがあります。

総合的な学習を考えていただきますと、生きる力としての、「自ら考え、自ら判断し、自ら
問題を解決していく力」を育成することを目的としています。この課題は次の点にありま
す。まず、高齢化社会、国際化、情報化などの避けては通れない切実な問題。子供だから
関係ないというのではなく、むしろ無関心であることと取り返しのつかないことになってしま
う。そして次に、児童・生徒の興味・関心にかかわる課題を設定することでありま
す。興味が学習へと展開していくのであって、その興味の追求の中に新しいテーマが重なるはず
なのです。ですからつまらない授業にはしてはいけません。

そして、次に、現在の情報革命という時代。情報革命はわずか20年の間に起きたので
すが、政治にも、教育にも、IT、ITという言葉が入ってきています。私はこの言葉に
は信頼できない部分があるように感じます。なぜならばこのITの「影の部分」によって、
人間は精神的貧困状態になって、社会性を失ったバーチャル人間、つまり、仮想現実の人
間が生まれてしまうからです。したがって私はITのようなものではなく、顔と顔、心と
心とが結びつくライフラインを作っていくことが大切なのであります。仲間と一緒に、地
域の人に、子供に、同僚に学び、いかなる目標の中にも主体的に自主的に生きるための力
を身に付けるのだというフレンドシップ事業は大変意義のあることだと思います。

これまでの個性重視の教育というのはエゴの生き方ではなかったかということです。そ
こで、もっと他者と関わるようなことが非常に重要になってくる。これは生命倫理や環境
倫理などの中に含まれているわけですから、これからは従来通りなら、もっと個性は社会

化されなくちゃいけない。これが今、我々の間で認識を大きく変えなければいけない視点だ、というふうに私は思うわけであります。

ここで示したいことがあります。私たちは従来型の「物質文明社会」から、どういう社会を作ったらよいかと問われているように思います。その問いに対して大きく二つの答えがあるように思います。まず一つ目は、「共生の社会」を作ること。それは年齢を越えて、あるいは体の自由、健丈児もあるいは少しハンディキャップをもっている人も一体となって、あるいは色が黒くても白くても茶色くても一緒になってできるような、生活でるような、生きていけるような共生社会なんです。それともうひとつは、「循環型社会」：を作ることです。循環型社会とは、環境に負荷を与えない社会、自然と上手に付き合い、自然環境を壊さない社会をいいます。

おそらく21世紀はこの二つが生きる力の根源になる、と私は考えております。私はこれを全部ひっくるめた意味で「環境の世紀・環境の時代」と呼びます。これは自然環境、人間環境、社会環境、そして文化環境、これらがまとまったものを指しています。この環境時代は、自分がそういうすべての環境と関わりながら生きていく時代。関わる力をつけるのがこれから21世紀に求められる力ではないかというふうに思います。自然とふれあいながら、人とふれあいながら、そして文化創造の関わりの中で自分がどういうふうにするかっていったらいいかということを学んでいるわけですね。特にこの自然と関わるのがとても大事なんです。自然と触れることによってすばらしい自分の奥にあるものすごく感動する心を培うことができます。これはレイチェル・カーソンの『Sense of wonder』という書物の中に書いてあります。そこでは「知ることは感じることの半分も重要ではないということを強く信じます」と言っています。知ることは感じることの半分も重要じゃない。それはなぜかという、尊い原体験によって得られた感応力が新しい知恵を生み、これから生きる力になっているからです。

2. そこでいよいよ総合的な学習の時間に触れていきたいと思います。これは文部省は目標も内容も方向を示しません。誰が作るかというと、それは学校の先生ではなく、子どもが作るんです。でもいきなり子どもがやるのは無理ですから、それをうまくサポートして、やる気を起こすような「動機付け」をするのが先生なんです。子どもと先生、それから地域の人、それから教育委員会が中心にならなきゃいけない。学校の枠組みを大きく変えるのはこの総合的な学習なんです。総合的な学習の時間の意味をもう一度言いますと、「子どもが生きる力を育てるための学習の場を開いていくのが総合的な学習の時間」と考えていただいていいわけです。そしてもう一つ、社会的要請の課題としての環境問題・少子高齢化問題・情報化・国際化等、これらの大きな動きの中で生きる人間を育てるためには、教科の時間では扱うことのできないような社会的な研究を要する課題、こういうものをテーマに学習すべきであるといえるわけであります。

そこで今度は総合的な学習が成立するための条件をいくつか提示したいと思います。「切実性」と「興味・関心」がまずは大切です。切実性、興味・関心、そして「地域に根ざす学び方・調べ方」これが習得されるといつのまにか自然に能力が身についています。つまり学ぶことを学んでいるんです。これからの教育はそういう教育に転換しなきゃいけない。

地域や学校の特色を生かした課題をテーマにして総合的な学習を進めること、地域に根ざ

していくことが総合学習の中核でなくちゃいけないと思っております。地域はなぜ重要であるかという、みなさんも地域の自然や地域の人と触れ合って子どもと触れ合って、そしていろんな発見を、感動をそして知的な理解を深めたに違いない。そこに価値があるんです。この地域というものに総合学習の原点があるんです。地域は「子供の原風景」を作り、「知の総合化」をする。知の総合化とは、知識を実践に結びつけることです。総合学習ではそういう実践する知性を育てなくちゃいけない。

3. 今度の教育課程の転換は、学び方の転換と生きる力を育てるってということなんです。総合学習は先生が変わらなきゃ。教材研究やったことない先生、研究会に参加したことない先生、総合学習に関わるような学び方を学ばない先生なんかでは、とても総合学習はできませんよ。今求められている教師、教師に求められるものとは何なのか。

まず、グローバルな視点を持った教師。人類益を考える力を持たなくてははいけない。その為には人間関係が非常に豊かで且つ適応する能力を持たなくてははいけないんですね。社会的・現実的な課題に対して、地域の人といっしょになってボランティアや社会活動などをしていけるってことが大切なんです。このようなボランティアや社会活動、NGO だとか自然保護の活動を「第四の領域」としての教育力と言いますが、そういう人と交わることは非常に価値があると思います。そして、従来通り普遍的、変わらない資質が大切です。これは、子供理解・愛情・一体感・教科・生徒指導の知識を身に付けるということなんです。そういったものが、使命感・教育愛・学校や教育に対する誇りになっていくんです。それだけじゃなくて、教科に関する専門的知識・興味も身に付けてなくちゃいけない。自分の専門だけに対するものではなく、他の教科・生徒指導・道德教育・ホームルーム等、あらゆる教科に対しての関心と一定の見識を持たなくては行けない。

上記の、使命感・教育愛・教科に関する専門性と興味関心・子ども理解、これらをすべて身に付けなくてははいけない。そして、これらが一つの授業の中に統合される、まさにこれを「実践的指導力」というんです。この実践的指導力があるということが、知の総合化ということになるんです。

これからの21世紀を担う皆さんがこのような活動を自主的に創って行っているのは非常に頼もしく、これからの時代をよろしく願いますと申し上げて私の話を終わります。



わくわくサタデー

山本 恭兵

横浜国立大学教育人間科学部 学校教育課程 教科教育コース1年

<学生の自主性>

1. 活動の目的

本学での正式授業名は「フレンドシップ活動A」。年2回に神奈川県の川崎市・横浜市の小学校の児童を対象に行う「わくわくサタデー」への準備・当日の運営を通した、「児童理解」・「学校教育理解」への導きとするとともに、3年次より行われる「教育実習」への準備段階としての位置づけがある。

2. 発足の経緯

文部省のフレンドシップ事業への取り組みを受け、先進的事例の信州大学の「YOU遊サタデー」を参考として、平成9年の学部改組事業の一つとして「フレンドシップ活動A」が授業として開講。

3. 活動方針と目標

教育実習や専門的段階に到達していない、新入生や2年生を主な受講対象とし、授業枠を設けない、「学生主体」型の授業とすることで、学生が「自ら考え」「実践していく」ことの中で、教育におけることだけでなく、気付くものすべてを大切にしていこうとしている授業である。

4. 内容と特色

年に2回行われる、小学校児童への様々な工夫を凝らした学生による講座を展開する「わくわくサタデー」への準備活動がフレンドシップ活動Aの主なものとなってくる。

受講前のオリエンテーションでの担当教官の授業への体系的な説明の後、ほぼ学

生が主体となって授業運営をしていく。

授業自体は3であげたように授業枠がないので、毎週木曜日の昼休みを使って大教室で準備活動（全体会）を展開していく。

受講学生の殆どは講座を当日運営する為に準備をして児童と触れあうことを目的とするが、当日の全体の運営や準備段階での様々なサポート（小学校への連絡・大学教官とのパイプ役など）を行う運営学生もおり、彼らが当日までの全体会での進行や話し合いの場を設定したりする。

当日活動の「わくわくサタデー」における最大の特色は殆どの協力校のご好意で学校施設の大半が学生に対して使用を認めている点とその学校の児童たちが参加を快くしてくれる点である。教育実習がまだ先の学生にとって、「児童と学校で触れ合う」ことや「学校の施設を活用できる」ことはかなりのメリットであると思われる。

また、当日に行われる講座については別紙資料を参考していただきたい。

5. 成果

多くの受講学生があげる点は「児童とのふれあいができた」「児童理解の一助となった」という点であり、また「仲間との協力の難しさ、大切さ」を知ったということもあげている。この授業だけが全てではないが、何らかの成果を個人個人が感じ取って受講を終えていく。

6. 今後の課題

授業枠がしっかりと取られていないのは利点もあるが、デメリットもある。問題は受講生側が「いつこの授業が終わるのか？」

「2回のわくわくサタデーを終了したら終わりではないのか？」など、幕の引き際がしっかりしていない為に、学生のフィードバックがないままに終わってしまうケースもある。

また、真剣にわくわくサタデーへの準備に取り組む者、適度に行う者との意識的格差が問題視されることもある。

受け入れてくださる小学校側からは「専門的知識も大学生としての態度もまだ身につけていない新入生や2年生に児童を預けるのは心配である」という面もあり、課題は尽きない。



2000年度

横浜国立大学フレンドシップ活動A

『横浜国大わくわくサタデー』

活動報告

第一回わくわくサタデーにおいて、
大怪我が発生。

⇒保健面の徹底が求められる。

* 大学の保健管理センターのスタッフとの
連携

* 学生の意識付け

→安全面を考慮した、講座展開

→児童への責任意識

運営側からの連絡が班員全体
に行き渡らなかった

⇒運営側の連絡が全体に行き渡ったかどうかの
確認方法の見直し

⇒班員の受動的な態度の改め・意識付けの
改革が必要

班長の負担が大きかった

⇒班員全員で連携できるグループの雰囲気
作り

⇒班長の仕事の見直し

第2回の準備段階でやることが
何度も変わった

←年間を通したプランの作成が必要との声も
あったが……

→実際には4月の時点で配布済みのスタッフ
フマニユアルに年間の予定表は付随して
いた

⇒学生側の能動的に情報をつかもう！！と
する態度の育成

小学校側（受け入れ側）の願い
と学生の実態のギャップ

←小学校側はある程度専門性・常識の身に
つけた学生に児童を預けたいと思っている

⇒新入生・2年生が受講対象であることの小
学校側への理解、学生側の常識面での小
学校側の求めているものへの理解

学生側の意識の差が目立った

- * 児童と触れ合うのが目的、学生同士の話し合い、共同作業なんてなんになる？
- * もっと、自分の自由に行動したい。全体会やいろいろな小学校への提出資料の重要性ってあるの？
- ⇒ 小学校側と接して比較的意識の高い運営が事前に学生の意識付けをすべき？
- ⇒ 班員内の意識の高い者からの底上げに期待するべきか？

保護者・地域の方々の関わり方

- ⇒ 今までは学生と小学校のみに限定して考えていたが、第2回などを考えると保護者や地域の方々の参加協力を求めることを検討する必要がある。
- * ただ……
- ⇒ 学生の大半の目的は児童との講座活動のなかで学びたい、と思っている

講座の工夫不足？

- ← 意欲的に児童へ様々な知識授与を展開している小学校の場合
- * ありきたり(スライム作り, など)な講座では児童は満足しないし, 自分たち(教師側)がすで行ったことを展開するのはどうか？
- ⇒ 学生側にさらなる「若い者ならでは」の講座案・アイデアが求められちゃう
- ← 学生側の「ありきたりでもやってみたい!!」という願いがかなわない
- * ジレンマ
- * 「誰のための授業なのか??」

『体験学習と学びのひろばの実践』

発表者 細井康秀・伴 峰昌

上越教育大学理科専攻2年

(細井:s112161@cc.juen.ac.jp, 伴:s112145@)

〈キーワード〉 体験学習 学生主体 地域への貢献

1. 活動の目的

教師を目指す者にとって、実践的指導力は不可欠であると考え、次の4点を目標として取り組んでいる。①様々な体験活動を通じて実践的指導力を身に付ける。②子ども達との触れ合い活動を通じて子ども理解を深める。③企画、準備、運営する力を身に付ける。④社会性を身につける。

2. 発足の経緯

平成10年度フレンドシップ事業が本学に導入され体験学習と「学びのひろば」がスタートした。体験学習は選択履修科目で、サバイバルキャンプや小学校体育祭参加、森の手入れ、畑での栽培活動等の体験実習と、市町村の社会教育活動への参加体験で構成された。「学びのひろば」は、これらの体験の上にキャンパスに地域の児童を招き、学生が企画、準備、運営して、ふれあい活動を展開するものであった。平成12年度の大学改革に伴い、教職を目指す学生達の実践的学びの場を保証していかなばならないということから、1年次に体験学習を必修として、2年次にボランティア体験を選択で位置付けた。そして、これらの経験の上に、「学びのひろば」は学生主体の活動として位置づけられた。本年度は1泊2日の「学びのひろば イン 妙高」、秋の「学びのひろば オン キャンパス」と拡大し、現在に至っている。

3. 内容と特色

〈内容〉

【1年次 体験学習】 9コース選択必修
学校園栽培体験・生活・総合何でも体験・粘土で考える・化石宝石採集体験・自然体験・スポーツ大会主催体験・コンサートを開こう・

科学の広場・ついで、つくって、とかして、つける(資料1)

30コマ60時間、年間不定期の実習扱いであり、「生活・総合何でも体験」を例に取れば、「夏野菜栽培」「身近な植物と草花遊び」「附属小体育祭参画」「生活科授業参観」「大間城森の手入れ」「川で雑魚すくい」「山で炭焼き体験」「集団レク指導」「サバイバル体験」のメニューで構成されている。

【ボランティア体験】 1単位選択 2年次以上

ガイダンスには150名程度参加するが、真に意欲に燃える学生のみという条件から87名に絞り込まれた。3年目になり市町村との連携も深まり、上越市、新井市、妙高高原町、国立妙高少年自然の家、上越小学校 JRC 合宿等に、延べ870名が参加してきた。子供向け行事の補助であるが、時には学生に行事の企画運営が任される(資料2)。

【学びのひろば】

学生事務局24名が中心となって企画し、準備を進めてきた。参加学生一人一人の自覚と学びを大切にしたいということから、参加学生にも諸活動の企画、運営を委ね、幾回もの打ち合わせとリハーサルを積み重ねて本番を迎えた。

〈イン 妙高〉 国立妙高少年自然の家

8月28日、29日 学生84名 参加児童132名

1日目:①コース活動

- ・ブナ林探検隊
- ・サバイバルキャンプ隊
- ・ネイチャークラフト隊
- ・プロジェクトアドベンチャー隊

②キャンドルセレモニー

③フレンドリータイム(班別ふれあい活動)

2日目：チャレンジ！ギネス大会！！

＜オン キャンパス＞ 大学キャンパス

10月8日（日曜日） 学生 120名 児童 264名

①全体レク&キャンパスターリング

②ふれあい活動（本年度は17活動）

《特色》

本学のフレンドシップの特色は、教職を目指す者として、幅広い経験と社会性を培うということで、1・2年次に体験学習とボランティア体験を位置づけ、学生中心の「学びのひろば」が位置付いていることである。体験学習には24名の教官が関わっていることも特徴であろう。

ボランティア体験は春にガイダンス、市町村関係者による説明会、そして、ボランティア講習会を経て市町村に出ていく。

「学びのひろば」は地域に定着し、毎回募集定員の2倍近くの応募があり、抽選をしなければならないまでになっている。案内状の配付もすべて学校ルートで配付できる体制が確立している。

4. 成果

体験学習は、入学して間もないこともあって「これが大学の授業か」と驚く学生も多いが、自己の経験の乏しさを自覚し、実践的体験の重要性を自覚してきている。ボランティア体験は、市町村の社会教育活動を支える存在にまでなってきた。学生の中には夏休みの大半をボランティアで費やした学生も見られた。「学びのひろば」は、本年度より完全に学生主体に移行した。社会教育活動等での経験を生かした細部計画書やスタッフマニュアルの作成、体験学習を生かしたふれあい活動の企画など、科目で得られた経験が、十分生かされている。学びのひろばに関する具体的な成果を列挙する。

①学生中心で、2大行事を企画から運営までのすべてを成し遂げられた。

②現地での再三の下見や事前学習が、学生自身にとって貴重な学習の場となった。例えば、PAをおこなうに当たって、12名の学生が指導資格

を取得する地道な努力をしたなど。

③宿泊体験であったことから、病気をもつ子ども、多動性の子ども、人と交わりたがらない子どもなどにどう対処すべきかを学生間で話し合いながら展開できたこと。

④救急医療体制や就寝指導、事故とその対応など、細部まで企画立案の大切さを実感した。

5. 今後の課題

学びのひろばを中心として、フレンドシップへの期待は、大学、地域からも高まってきているが、次のような課題もある。

①教職への道が狭き門となりつつあるために心の焦りのためか3、4年次学生の参加数が減少しつつあること。また、学生事務局が動けば動くほど、一般学生との距離が隔たり、積極的に参加する学生と「煩わしいことはしたくない」とする学生の二極化が生じてきている。

②日常的ふれあい活動を展開したくとも、春・秋の教育実習、幼稚園実習、教員採用試験、テスト期間等から、位置づける適切な時期がない。

③今回も「子ども達のかん高い声がうるさくて迷惑した」等の教官の意見もあり、容易に全学的理解を得るまでに至っていない。

④学生事務局の学生にとって素晴らしい経験の場となっているが、一般学生はイベントへの参加的な気持ちが強く、「共に体験を通して学ぶ」という立場から事務局と一般参加学生との協力体制はどうあるべきかを検討していかなければならない。

⑤シンポジウムでは教育問題の学生討論会を位置づけたが、「煩わしい」という反応が強く、学生の参加は容易に得られない現実がある。

上教大の体験学習の紹介

<目的>

21 世紀の教育は、教科指導もさることながら、生活科・総合的学習、心豊かな学級経営など、教師自身の学びの幅と人間性が問われている。その意味から、入学して間もない 1 年次に、実践的態度と個性の伸長の大切さを自覚させる実践的で体験的な学びを位置付け、その後の学生生活の質的改善の芽を育てる。

<科目の位置付け>

1 年次必修、実習扱い 30 コマ 60 時間

<選択コースとその内容>

【体験学習 A】「学校園栽培活動体験」

概要：夏野菜から秋野菜に関して、床づくりから種まき、管理の一切を体験する。生活科、特別活動の基礎体験と共に、人と生産活動の関わりを理解させる。

【体験学習 B】「生活科・総合なんでも体験」

概要：栽培、身近かな草花と草遊び、附属小学校体育祭参加、環境教育調査体験、自然教室等の各種体験を通して、学校教育における生活科、総合的な学習、特別活動の理解や基礎的技能の習得を図る。

【体験学習 C】「自然体験」ー動植物への触れ合いを中心にー

概要：森の動植物、水田や河川の生き物の観察、採集、飼育、触れ合いを通して、自然と人との関わりを学ぶ。

【体験学習 D】「科学の広場」

概要：身近な生活や遊びの中から科学題材をとりだして体験的に学習させる。各自教材・教具を製作し、それを用いた実験実習を行うことにより、児童を対象とした「学びのひろば」を指導できる基礎的力を育成する。

【体験学習 E】「スポーツ大会主催体験」

概要：スポーツ行事の企画・運営の体験を通して、人間理解を深める。対象者の選定、運動欲求調査、種目や会場の選定、大会案内の配布と募集、事前準備、安全対策、リハーサル、当日運営、表彰、片づけ、感想収集等。

【体験学習 F】「粘土で考える」

概要：従来のように単に器を創るためのものでなく、身体的な活動の重要な素材として人間・教育に関わることを体験し理解させることを目的とする。

【体験学習 G】「ついて・つくって・とかして・つける」

概要：各種の米で餅つきを体験し、各種もち、様々な郷土雑煮づくりを行う。また、容器として使用する発砲スチロール容器を回収し、それを溶解して接着剤としてのリサイクル体験を行う。

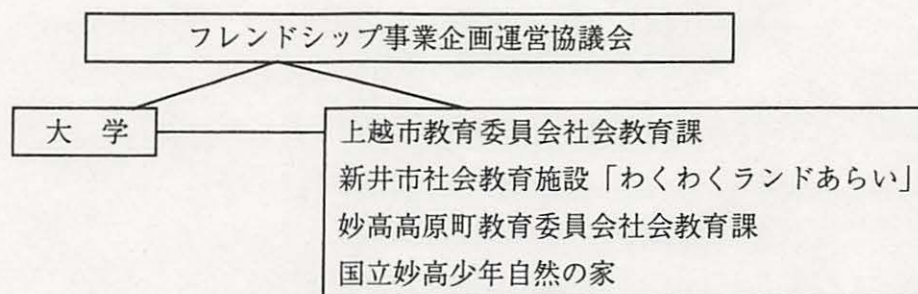
【体験学習 H】「化石・宝石採集体験」

概要：新生代、古生代の化石採集、海岸での貝採集、ヒスイ採集、化石模型作成等、大地をテーマに化石や宝石から長大な地質時代を想像する活動体験。

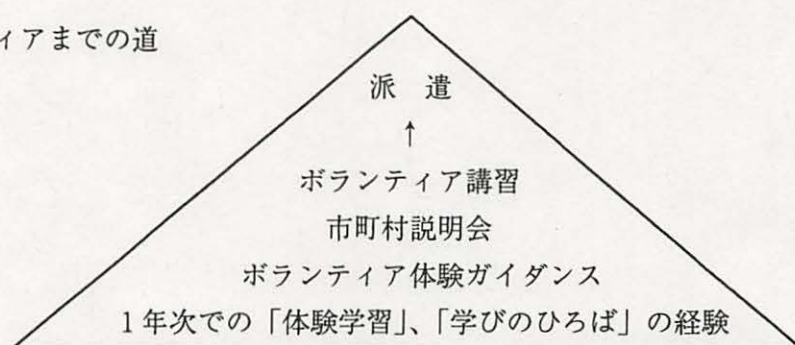
【体験学習 I】「コンサートを聞こう」

概要：受講者全員がコンサートを企画し実行する。そのコンサートに向け、音・音楽と自分との関わりを様々な体験を通してとらえ直す作業が、この授業の骨子となる。

ボランティア体験の実際



1. ボランティアまでの道



2. ボランティア活動受け入れ機関とその内容

上越市：自然体験サークル（年5回）、わくぱくラリー（1回）、長期体験村（4泊5日）

新井市：わくわくランドあらい主催事業

アドベンチャークラブ（自然探検）（年10回）

チャレンジクラブ（各種ゲーム）（年10回）

エプロンクラブ（世界の調理）（年30回）

エジソンクラブ（発明工作）（年10回）

パソコンクラブ（年20回）、エンジェルクラブ（低学年行事）（年10回）

フィッシングクラブ（年8回）、オリオンクラブ（天文）（年4回）

夏休み科学の祭典 2回、館運営ボランティア

妙高高原町：飛び出せ元気っ子（年10回）

国立妙高少年自然の家：キッズアドベンチャー（13泊14日）

はつらつ体験塾（3泊4日）

学校関係：

上越市小学校 JRC 合宿 2泊3日

上越栄養士会 わくわくクッキング 1泊2日

妙高高原町 三校合同合宿 2泊3日

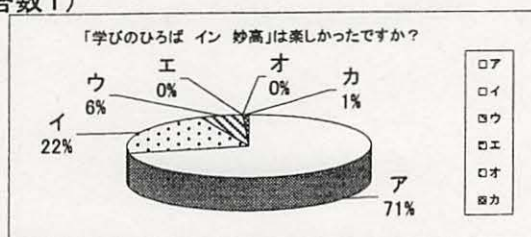
東本町小学校 文化祭

「学びのひろば」参加児童へのアンケート結果

<学びのひろば イン 妙高>

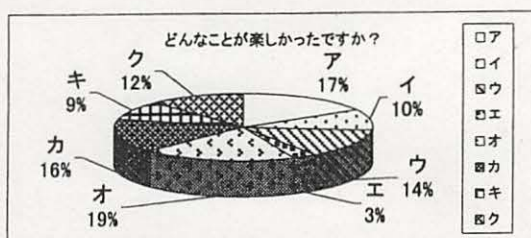
1. 「学びのひろば イン 妙高」は楽しかったですか？(回答数1)

ア とても楽しかった	88
イ 楽しかった	27
ウ ふつう	7
エ あまり楽しくなかった	0
オ 楽しくなかった	0
カ 無回答	1



2. どんなことが楽しかったですか？(複数回答)

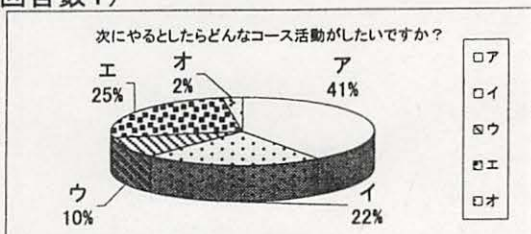
ア コース活動	76
イ キャンドルセレモニー	44
ウ フレンドリータイム	63
エ 写真撮影	13
オ チャレンジ！ギネス大会！！	87
カ 新しい友達ができた	73
キ お兄さんとなかよしになった	40
ク お姉さんとなかよしになった	54



3. 次にやるとしたらどんなコース活動がしたいですか？(回答数1)

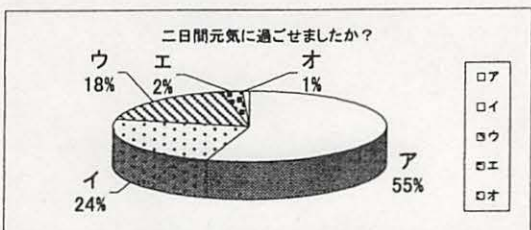
ア プロジェクトアドベンチャー隊	49
イ ネイチャークラフト隊	27
ウ ブナ林探検隊	12
エ サバイバルキャンプ隊	31
オ その他	3

〔 工作、日本のゲーム、
TVゲーム、川の水質調査 〕



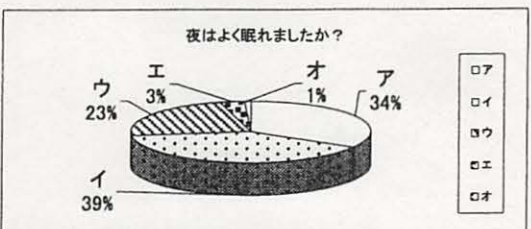
4. 二日間元気に過ごせましたか？(回答数1)

ア とても元気だった	67
イ 元気だった	29
ウ ふつう	22
エ あまり元気ではなかった	3
オ 元気ではなかった	1



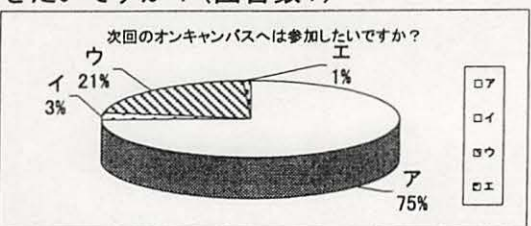
5. 夜はよく眠れましたか？(回答数1)

ア よく眠れた	41
イ 眠れた	48
ウ あまり眠れなかった	28
エ 眠れなかった	4
オ 無回答	1



6. 10月8日にある「学びのひろば オン キャンパス」には行きたいですか？(回答数1)

ア 行きたい	91
イ 行きたくない	4
ウ どちらでもない	26
エ 無回答	1



『地元教育機関の教育活動への参加による心のふれあい』

発表者 花村尚美

信州大学教育学部理数科学専攻1年

E-mail アドレス e001337@la.shinshu-u.ac.jp

〈キーワード〉学生の体験、実践的指導力、人間的資質、子ども

1. 活動の目的

「教育参加」は、教育に関心を抱いて教育学部に入学した1年次生が、学校や社会教育施設で行われる教育活動に参加することを通して、子ども理解、教師理解、学校理解を深め、教職への関心・意欲を高めることを目的としている。

2. 発足の経緯

今日のさまざまな教育問題は、教師の資質や実践的指導力の欠如と深く関わっていることが指摘されている。そのため教員養成学部においては、学生の実践的指導力の基礎を培うカリキュラム改革が求められるようになった。

「教育参加」は、平成8年度から附属教育実践研究指導センター（現、附属教育実践総合センター）が実施機関となり、開設された。平成9年度から「教員養成学部フレンドシップ事業」の助成を受け、現在では地域の14教育機関（資料1参照）の協力で、多様な活動への参加が実現し、充実した授業科目になっている。

3. 活動方針

今、求められる実践的指導力とは、単に教壇に立って授業する力だけではなく、これからの学校教育を創造的に担っていくことのできる意欲と力であると考えられる。「教育参加」は、このような実践的指導力をもった教師を輩出できるようなカリキュラムでありたいと思う。そこで1年次生では実践的指導力の基盤になる、子どもの心に共感することのできる人間的資質を培うことを重視した。この人間的資質を培うには、実際子どもと関わったり、教師の姿を間近で見たりして、

実践の場を経験すること、すなわち丁稚奉公することか最適の方法であると考えた。

4. 内容と特色

受講者は、教育学部に所属する1年次生全員で、参加する活動は学生がそれぞれ選択する。活動内容は、各地元教育機関によって様々なメニュー（資料1参照）が用意されており、参加学生は、自分の得意分野や興味・関心のある分野に関連した活動を行うことができる。

こうした活動の中での子どもたちや教職員とのふれあいを通して、教育への認識や教職への一体感を深めていくことができる。

5. 成果

学生のアンケート調査結果によれば、「教育参加」の活動では、子どもや教師、施設職員とのふれあいがあり（資料2、3参照）、学生にとって有意義な授業科目であると回答している（資料4参照）。こうした活動を通して、学生は、子どもに対する意識や自らが目指す教職員に対する意識を変化させ（資料5、6参照）、教育に関しても理解を深めていると考えられる。

しかしながら、直に子どもと接してみてもわかることであるが、自信をつけることは難しい（資料7参照）。だがこれによって自分の力量不足を認識し、教師にとって大切な力とは何かを知る重要な機会となっている。また、今までにない経験をしたことによって、学生自身の魅力も開発しているといえよう。

6. 今後の課題

授業の特色から学生一人ひとりの意識によっ

て参加態度に開きがある。受入機関に迷惑をかけないように、学生との連絡が滞りなく行われるための情報連絡方法を整備し、学生の意識を高めていくことが課題である。

【参考文献】

- ・『地元教育機関と連携した「教育参加」の実践(第4集)』(2000年3月、信州大学)
- ・日本教育大学協会編『平成8年度日本教育大学協会研究集会発表論文・全体討議要旨』(1996年10月、福島大学)

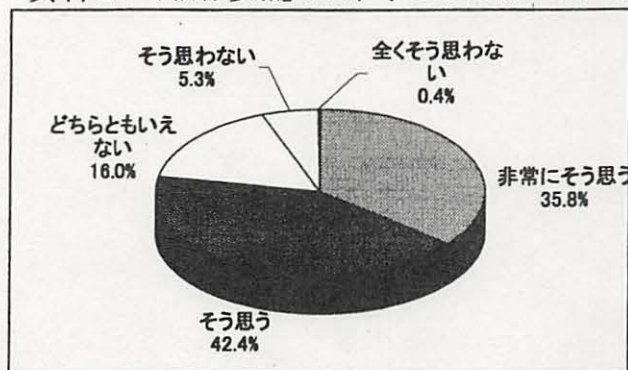
資料1 「教育参加」メニュー〔一部抜粋〕

地元教育機関名	メニュー
◆附属幼稚園	誕生会6月 砂場の整地・遊具のペンキ塗り
◆附属松本小学校	運動会 教育実習参観
◆附属松本中学校	男子バレー指導 秋の松本城清掃
◆国立信州高遠少年自然の家	冒険への旅立ち～仲間をつくる8泊9日 信州高遠フェスティバル
◆松本青年の家	自然体感ゲームのつどい ドラム缶で炭焼きに挑戦
◆小諸青年の家	キャンプだホイ サイエンス教室
◆松川青年の家	君はすてきな野生人 野外活動研修
◆須坂青年の家	根子岳・四阿山を縦走さわやか登山 チャレンジスノーボード
◆望月少年自然の家	ふれあい長期キャンプ 第7期青空そば大学
◆阿南少年自然の家	ふれあい自然体験・長期キャンプ アウトドアの達人シリーズ
◆長野県松本盲学校	小学部水泳【重複児童】 視覚障害教育講習
◆長野県寿台養護学校	全校運動会(体育館)前日準備と当日 (高等部)1日キャンプ
◆長野県安曇養護学校	(中等部)サイトウキネンコンサート (高等部)校外学習
◆長野県花田養護学校	プール清掃 クラブ

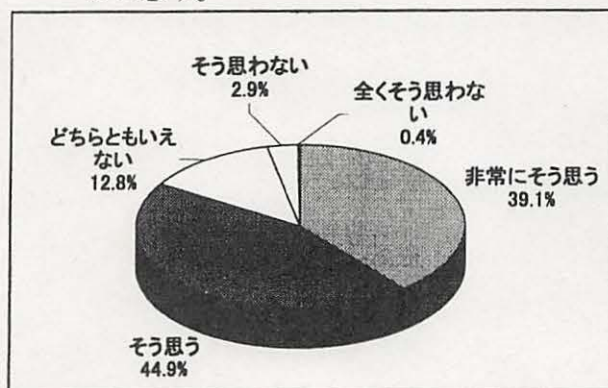
調査日：平成 11 年 12 月 3 日(金)

被調査者：平成 11 年度「教育参加」受講者 288 名中の 243 名の回答〔回収率 84.4%〕

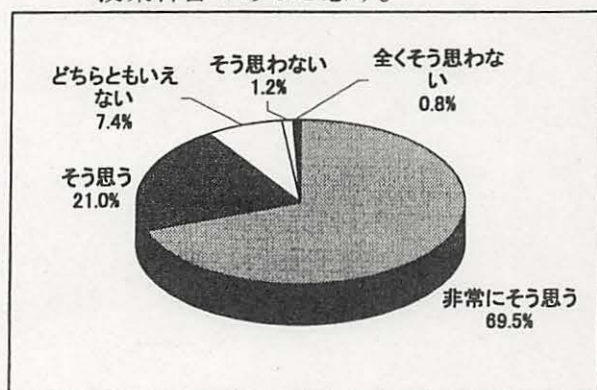
資料 2 「教育参加」では、子どもと心のふれあいがあったと思う。



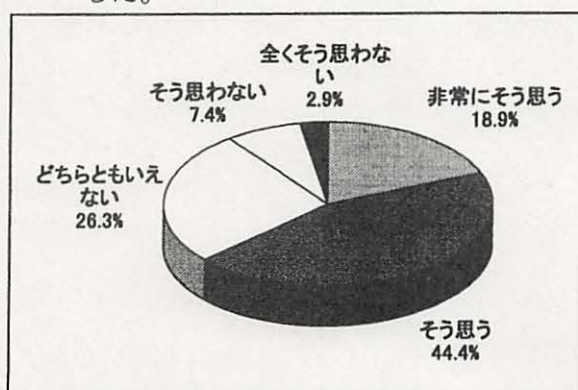
資料 3 「教育参加」では、教師や施設職員が行なう仕事の様子にふれることができたと思う。



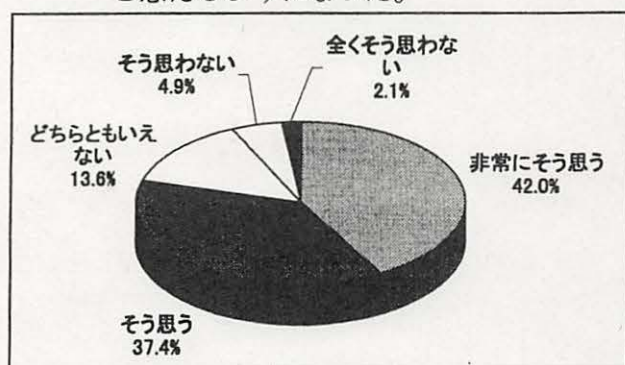
資料 4 「教育参加」は、学生にとって有意義な授業科目であると思う。



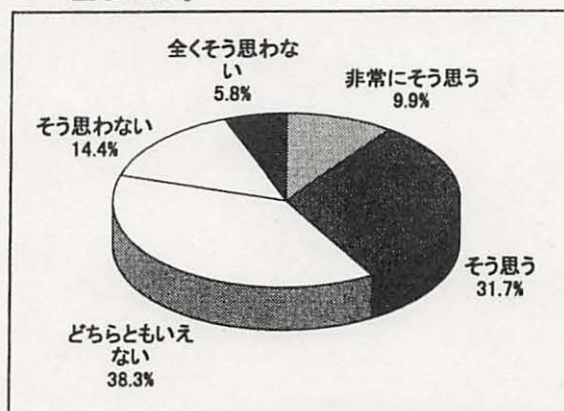
資料 5 子どもに対する見方・考え方が変化した。



資料 6 教師の仕事は大変だがやりがいがあると思えるようになった。



資料 7 子どもに関わっていくことに自信が生まれた。



資料 8 参加学生の感想

私は、「教育参加」のメニューの中で、阿南少年自然の家で行われた「ふれあい自然体験長期キャンプ」に参加させて頂きました。5泊6日という長いようで短い期間の中で、私は子供達と接しながら『協力』と『思いやり』ということから、子供達の成長を目の当たりにしました。

キャンプの最初、子供達は緊張と不安のためか、自分から何かをするのではなく、周囲の様子を見ながら行動していました。しかし、しだいに慣れてくるとその表情は、楽しそうであり、また生き生きとしてきました。夜間登山、野外炊飯、川遊びなどの様子を見てみると、思いっきりやっているという感じを受けました。またこれを通して子供達は、班で行動するには相手のことも考えなくてはいけないということをも自分自身で感じとっていました。

5日目の昼食後、夜のキャンドルの集いに向けて子供達が班の出し物を考えているとき、私達スタッフは黙って様子を見ていました。最初は皆がそれぞれの意見を言いあい、なかなか話がまとまりませんでした。しかし、自分が意見を言うばかりでなく、他の人の意見も聞き、そして皆でやらなければならないということに、途中で一人ひとり気が付いたのでしょう。それからは、スムーズにことが進みました。

子供達が一回り大きくなる一方で、私自身も子供達から様々なことを学び、考えさせられました。今、私が、いつまで経っても結論が出せないことは、「どこで、そしてどこまで子供達に手を貸せばよいのか」ということです。キャンプの間、私はその場毎、自分で判断してやっていました。しかし後でよく考えてみると、子供達にやらせたほうが良かったと思うことがいくつかありました。これは、まだ私の中で課題として残っています。

今回のキャンプで私を支えてくれたのは、他ならぬ子供達の笑顔でした。たとえ、自分が疲れていても子供達の笑顔が見たいから頑張るし、また、その笑顔は私に子供達に負けるなという気を起こさせてくれます。本当に子供達の笑顔は、私のエネルギー源であると実感しました。

このキャンプで子供達と一緒に体験したこと、自分自身で考えたことなどをこれからいかしていきたいと思っています。



信州大学フレンドシップ事業

地元教育機関の教育活動への参加 による心のふれあい

発表者: 花村尚美(理数科学専攻)
杉山雅幸(野外活動専攻)

活動の目的

- 子ども理解
- 教師理解
- 学校理解

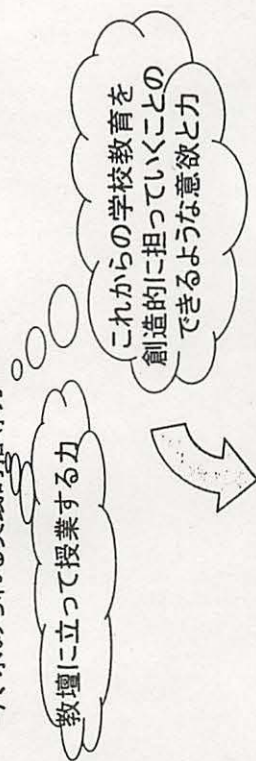


教職への関心・意識を高める



活動方針

今、求められる実践的指導力



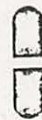
子どもの心と共感できるような
人間的資質を培う



長野県阿南少年自然の家 ふれあい自然体験・長期キャンプ

- 日時:
- 2000年8月2日(水)～7日(日)
【5泊6日】

- 参加者:
- 小学校2年生～中学校3年生
- 内容:
- 不登校児童、生徒を含む小・中学生
の自然体験キャンプ[子どもと過ごす
キャンプ生活]



「児童文化研究会での活動を教育現場でいかに生かすか」

発表者 藤田 賀史

鳴門教育大学学校教育学部国語科4年

E-mail (buzu11@tk3.nmt.ne.jp)

＜キーワード＞ 地域との交流 コミュニケーション 子ども理解

1. 活動の目的

鳴門教育大学附属図書館内に設置されている児童図書室において、紙芝居や絵本の読み聞かせ、季節に合わせた各種行事の準備・活動を通じて子どもたちとコミュニケーションを図ることが児童文化研究会の主な活動です。国立大学で唯一、大学関係者だけでなく、周辺地域の子どもたちや市民の方々にも開放された児童図書室において幼児から大学生まで幅広い年齢層と一緒に活動し、図書室という空間を通して心の交流を図ることを目的に活動しています。また、地域との交流を通じて、子どもたちを多角的に育てていこうというねらいもあります。

2. 発足の経緯

児童文化研究会は、徳島大学教育学部から独立した鳴門教育大学が設立されたときから活動しています。現在は開館日の増加（毎週水曜日、土曜日、日曜日の午後1時から午後4時まで）により、児童図書室での読み聞かせや折り紙遊びなどの活動が中心になっていますが、以前は地元の幼稚園から七夕やクリスマスのイベントの依頼を受けたり、鳴門市内の図書館に出かけて、紙芝居や絵本の読み聞かせを行ったりしていました。現在は、児童図書室で季節に合わせた行事を数多く実施して、活動の充実を図っています。

3. 活動方針と目標

児童文化研究会はボランティアサークルであり、学生本人の意思で自由に参加しています。従って、児童図書室が開館されている時間は、学生も子どもたちも出入り自由です。体育系のサークルとは異なり、あくまで本人

の意思に参加の有無は委ねられています。勧誘活動もほとんど行いませんが、口こみでボランティア学生の人数は年々増加しています。

児童図書室でも活動の大部分はボランティア学生ではなく、図書室に来た子どもたちの意思に任されます。本を読みたい子は本を読み、ボランティア学生と遊びたい子は遊ぶ、というように雰囲気はいたって自由です。しかし、図書室という空間であるから、走り回るような子どもにはきちんと注意するなり、外に遊びに連れていくなり、図書館としてのモラルを大切にしようという信念が図書室にはあります。

活動の最大の目標は、「子どもたち、地域の方々との交流」にあります。児童文化研究会の活動は子どもたちと地域の人々によって支えられている、という考えに基づき積極的にコミュニケーションを図るようにつとめています。教育学部ということで学生の大部分は教職を目指します。しかし、教育実習という限られた時間の中でしか、子どもたちの現状を知ることができません。机上の論理ばかりがふりかざされる現在の教育において、児童文化研究会の活動には生きた子どもたちと頻繁に接することができるというかけがえのない魅力があります。また、保護者の方々から教育についていろいろな話を聞く機会もあり、親の視点という別の角度から子どもについて考えることができます。

4. 内容と特色

児童文化研究会の活動内容は、主に児童図

書室の運営にあります。児童図書室の活動計画や図書館本館との連絡などは、学生たちにとっていわば「児童図書室のおかあさん」である事務員補佐の方が中心になってくださいます。カウンターでの貸し出しの仕事や新着図書のコンピューター管理、利用状況の報告などボランティア学生にも事務的な活動はありますが、活動の中心はやはり、「子どもたちと遊ぶこと」です。

具体的には、本の読み聞かせや紙芝居、人形劇、パネルシアターなど子どもたちに絵本というものを通して豊かな感性を育むための活動が中心となりますが、折り紙を教えたり、絵を描いたりなどの表現活動も積極的に行うようにしています。

また、七夕やクリスマスなど季節に合わせた行事を行います。読み聞かせの時間に、いつもとは違った、七夕のお話やサンタクロースを題材にして作られたお話などを讀んだり、徳島県内で活動をされている「お話の会」の方々をゲストとして迎えたりして、ただ楽しいだけではなく、子どもたちの心に残る行事になるようにつとめています。毎年恒例となっている七夕大会では、実際に笹の木を図書室に持ち込み、子どもたちも学生も短冊に願いを書きます。お金をかけた大仕掛けなことはあまりせず、鳴門という豊かな自然の中にある大学の児童図書室という考え方を大切にしています。また、人形劇で使う人形も学生が作り、素朴な材料を使ってどれだけ子どもたちの心に何かを残せるか、ということを考えながら全員で協力して計画・実行しています。

5. 成果

児童文化研究会の活動の成果がもっとも顕著にあらわれるのは、子どもたちの何気ない態度の変化です。つまり、最初は人見知りをして、一人遊びをしていた子が「一緒に遊ぼう」と言ってくるとき、児童図書室に来ていても本にほとんど興味を示さなかった子

どもが、読み聞かせを続けていくことで、いつの間にか「これを読んで」と言ってくる、そうした何気ない変化が私達の活動にとって一番大きな成果です。

子どもは日々成長している、と言いますが、大人にとっては何気ない変化でも子どもにとっては非常に大きな進歩です。それを目の当たりにした瞬間が児童文化研究会の長年の活動の成果ではないでしょうか。

6. 今後の課題

現在、児童文化研究会の活動は児童図書室を中心に行われていますが、これからはかつて先輩方がされていたように私達の方から幼稚園や図書館に出向いて行って、より多くの子どもたちに絵本や紙芝居を通した感動体験をしてもらいたいと思います。

現在、無感動、無気力の子どもが増えていると言われます。これから、より大勢の大人が子どもを多方面から育てていくという社会が実現されなければなりません。「開かれた学校」の第一歩の取り組みとして、地域と一体となって子どもを教育していく姿勢のもと、より多くの感動体験を共有していくことができるように活動の幅を広げていきたいです。

その具体的な提案の一つとして、「総合的な学習の時間」や国語の時間に児童図書室を利用してもらい、本を選ぶ楽しさや、本から得ることのできる感動の大きさを体験して欲しいと思います。また、児童図書室をもっと上の年齢層の方々にも利用してもらえ、より開かれた児童図書室を目指して活動していきたいです。

鳴門教育大学理科コースにおけるフレンドシップ事業について

発表者 大門 政憲

鳴門教育大学学校教育学部理科～年

E-mail:buzu11@tk3.nmt.ne.jp

<キーワード> 理科実験, 授業枠内と授業枠外の活動

1. はじめに

鳴門教育大学では平成9年度よりフレンドシップ事業を行っている。活動の目的は大学と地域の小中学校・教育委員会が協力し、大学の授業の一環として、あるいはその成果のもとに地域における教育に参加し、子どもたちとのふれあいを通して、学生の実践的教育能力を高めることである。また、本学での特徴としては、フレンドシップ事業独自の授業科目を設定せず、授業枠の中で展開していることである。本年度理科コースでは、化学実験Ⅰ・Ⅱ及び地学実験において行われた。しかし、昨年度の全国学生シンポジウム(信州大学)において、フレンドシップ事業の単位化について議論があった。そこで本年度は、授業枠から外した活動を取り入れた。名づけて「どろんこサイエンス2000」である。

2. 内容と成果

①化学実験Ⅰ・Ⅱ

徳島県の特産物である藍の原料であるスクモを用いた化学実験を行った。スクモから、色素であるインジゴの単離や同定、また型紙を用いての藍染めを行った。子どもたちは「染まる」という原理を科学的視点から考えることが出来た。また、中学校理科で学習する「酸化・還元」について、実際に体験することができた。

中学生4人に対して学生2人という形態で行ったので、生徒と学生のコミュニケーションを十分にとることができたのではないだろうか。そして、フレンドシップ事業が終わった2週間後にディスカッシ

ョンを行い、藍について分かったことや、質問など、積極的な意見交換ができた。

②どろんこサイエンス2000

本年度初めて、授業枠から外して行われたものである。募集によって集まった参加者の内訳3年生4人、2年生3人、1年生3人の合計10人である。「土」をテーマに子どもたちと土の吸着性や土の呼吸速度など、簡単な実験装置を用いて行った。使用した土は、当日の朝、子どもたちと一緒に採集した。

この活動では、事前に子どもたちと対面式を行い、「土」に関するアンケートを実施した。これによって、子どもたちの土に対する興味・関心を知ることができ、当日の活動に役立てることができた。また、企画・運営など学生が自ら行ったので、戸惑いもあったが、充実感・達成感はより大きなものとなった。

③地学実験

地層の観察を12月9日に行う予定である。

3. 課題

フレンドシップ事業そのものを知っている学生が、依然少ないように思う。広報活動等を通じて浸透させる必要があるだろう。また、授業枠内で参加した学生がリピーターとして活動できるように基盤を作る必要があるのではないだろうか。そうすることで、学内にフレンドシップ事業がもっと浸透すると思う。

土は生きている
FS2K

どろんこサイエンス2000

土についてのアンケート

このアンケートは、7月1日の「どろんこサイエンス2000」を行うために、みなさんが土についてどれだけ知識をもっているのか私たちが知りたくて行うものです。ここにある問いに気持ちを楽にして答えて下さい。どうかよろしくお願いします。

問い：ここにある11の文のうち、正しいと思うものに○，まちがっていると思うものに×，そして正しいか、まちがっているかわからないものには△を、それぞれの文の先頭についている（ ）の中に書いて下さい。

- ①（ ） 地球には土があるが、月には土はない。
- ②（ ） 植物や動物のはたらきがあって、はじめて土はできる。
- ③（ ） 土がないと私たち人類は生きてゆけない。
- ④（ ） 土には空気がふくまれている。
- ⑤（ ） 土には水がふくまれている。
- ⑥（ ） 土には植物の栄養分がふくまれている。
- ⑦（ ） 土にはいろいろな生きものがいる。
- ⑧（ ） 土はいろいろなものを吸収できる。
- ⑨（ ） 土はいろいろなものを分解できる。
- ⑩（ ） 土は私たちと同じように「息（いき）」をしている。
- ⑪（ ） 土は「おちゃわん」など陶器（とうき）の原料である。

ご協力ありがとうございました。

これらの文の中に書かれていることがらのうちのいくつかは7月1日に実験をして実際に確かめてみたいと思っています。楽しみにしていて下さい。

平成12年6月17日

FRIENDSHIP IN SATOURA 2000 企画・実施グループ

（資料1）事前に行われた土のアンケート

アンケート集計 (表)

平成12年6月17日 (土) 鳴門市里裏小学校にて6年生51名を対象に実施

設 問	○ (実数)	△ (実数)	× (実数)	合計 (実数)	○ (割合)	△ (割合)	× (割合)	合計 (割合)
①地球には土があるが、月には土はない。	23	12	16	51	45.1	23.5	31.4	100
②植物や動物のはたらきがあって、はじめて土ができる	14	14	23	51	27.4	27.4	45.2	100
③土がないと私たち人類は生きてゆけない。	40	6	5	51	78.4	11.8	9.8	100
④土には空気がふくまれている	37	7	7	51	72.6	13.7	13.7	100
⑤土には水がふくまれている	39	5	7	51	76.5	9.8	13.7	100
⑥土には植物の栄養分がふくまれている。	39	3	9	51	76.5	5.9	17.6	100
⑦土にはいろいろな生きものがいる	44	3	4	51	86.3	5.9	7.8	100
⑧土はいろいろなものを吸収できる	30	10	11	51	58.8	19.6	21.6	100
⑨土はいろいろなものを分解できる	30	9	12	51	58.8	17.6	23.6	100
⑩土は私たちと同じように「息 (いき)」をしている	24	19	8	51	47.1	37.3	15.6	100
⑪土は「おちゃわん」など陶器の原料である	40	9	2	51	78.5	17.6	3.9	100

○：正しいと思う △：どちらかわからない ×：まちがっていると思う

(資料2) アンケートの結果

中学生による天然色素（インジゴ）を用いた

総合化学実験の試み

指導者 今倉康宏先生（鳴門教育大学）、森義雄先生（北灘中学校教諭）、
指導アシスタント 博士 2 年 早藤幸隆

1. 趣旨 教師を目指す学生の総合学習の実戦教育指導
2. 日時 平成 11 年 6 月 19 日（土） 8:40～12:00
3. 場所 鳴門市北灘中学校
4. 対象 鳴門市北灘中学校 3 学年 33 名
5. 実施者 鳴門教育大学自然系理科教育コース 3 回生 19 名
本学大学院学生 3 名：岡田朋之（2 年）、吉阪保徳（1 年）、
堀内健太郎（1 年）
4 回生 3 名：鈴木亜寿華、高橋香織、増井健人
6. フレンドシップ当日の日程

（前日に実験器具，試薬等荷物の搬送）

7:30	鳴門教育大学を出発
8:00	北灘中学校到着
8:00～8:30	実験の準備（試薬等の調整）
8:40～8:50	今倉先生による実験の総括
8:50～9:00	9 班に分かれ学生による実験操作等の説明
9:00～10:10	実験操作（スクモからインジゴの単離）
10:10～10:20	休憩（自由時間）
	→コンピューターグラフィックスによるインジゴの 立体的な構造および発色と構造の関係について
10:20～11:30	型紙を用いた染色
11:30～11:50	6/21 のディスカッションの打ち合わせ（各班）
11:50～12:00	アンケート調査
12:00～13:00	片づけ

天然色素（インジゴ）を用いた総合化学実験

化学実験Ⅰでは、中学校での実践の際に、化学実験Ⅰでの経験を生かす事の出来る、図1に示す総合化学実験を重視して行った。

即ち、染色として徳島と関係が深く、身近な天然色素であるインジゴを多く含有するスクモを実験試料とし、実験・実習において探求活動の過程を経験する中で、各教科（生物・社会・科学・物理・美術）を横断的・総合的に理解・習得する事を目的とした

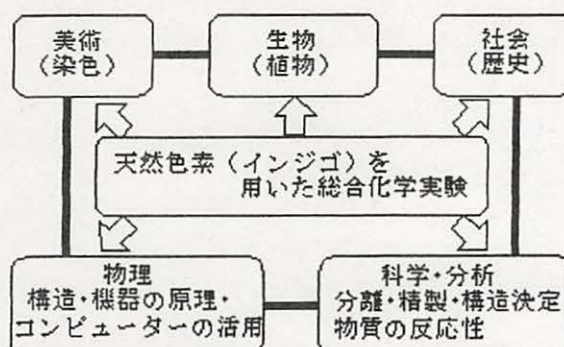


図1 インジゴを用いた総合化学実験

（1）藍と徳島の歴史

学生自らが歴史資料館「藍の館」に出かけ、阿波藍の栽培・スクモの加工・藍の流通・藍染めの流れを学ぶ中で、教師になった時にどのように情報を収集・調査し、まとめるのかを自主的に経験した。

（2）スクモの含有成分の検討

スクモをクロロホルムにより抽出したエキスをTLCで検討し、分取薄層クロマトグラフィーによりクロロホルムエキスからインジゴを単離・同定すると共に、その性質・構造の調査を行った。

（3）スクモから天然色素成分「インジゴ」の単離

小・中・高の教育現場での実験操作としてできる形に重点をおき、「参加と還元」「酸とアルカリ」の染色の原理を応用しスクモからインジゴのみを効率よく単離し、TLCにより標品と同定した。

（4）インジゴの構造決定

（2）（3）により単離したインジゴを赤外吸収スペクトル（IR）、核磁気共鳴スペクトル（NMR）、紫外・可視吸収スペクトル（UV）の測定を学生自身がを行い、解析し構造決定法について学んだ。

（5）コンピューターグラフィックによる構造と発色の関係

分子軌道計算用ソフト Cache によりインジゴの立体的な構造を考察し、又、酸化と還元によるインジゴとインジゴホワイトの構造変化に伴う発色の変化と共に、補色の関係を理論的に学んだ。

（6）インジゴによる染色

「藍の館」でのスクモによる体験染めとインジゴによる染まり方の違いを経験すると共に、本学美術コースとの共同により実験室スケールでのインジゴによる型紙を用いた染色と逆染めを経験した。

実習終了後に総合ディスカッションを行い、化学実験Ⅰの経験を基に学生は中学校での実践には、染色についての工夫、環境問題、構造についての考察、安全教育等の問題点を考え、

- ・「藍の館」での情報を活用したポスター
- ・実験操作などを中学生に対して解説したビデオ
- ・理解度を確かめる「探求カード」を盛り込んだテキスト

の作成等が重要であることを見出した。次に学生は、これらの点の考慮して実際に中学校で実践するプランニングを想定し、3時間の枠の中での実験を行い、さらに北灘中学校理科教諭森先生の指導の下で改良したプログラムを作成し、フレンドシップの実施に臨んだ。

『Make Friends の新しい船出』

発表者 藤田 勝一

熊本大学教育学部小学校教員養成課程(数学専攻)3年

canadakatz@mb5.seikyou.ne.jp

〈キーワード〉学生主体 企画・立案・運営

1. 活動の目的

熊本大学教育学部で行われているフレンドシップ事業。これをきっかけに発足したサークル、Make Friends は学生自ら企画を立案し、運営する力を身につけることを一番の目的としています。また、フレンドシップ事業でも目的としている子どもの実態把握、地域との関わり、人々と関わりあう力を養うことを目的としています。

2. 発足の経緯

熊本大学ではフレンドシップ事業は後期に開講されており、対象学生は教育学部の2, 3, 4年生のみでした。以前は活動の内容は実践センターの先生方が企画、立案されており学生はその活動に参加するだけでした。しかし、学生自らが企画、立案して活動に臨むほうが活動の時もっと楽しいものになるだろうと思い、このサークルをフレンドシップ事業に参加した学生で発足しました。そのほかにも後期だけではなく1年間を通して活動したい、1年生の中にもこのような活動をしたいと思っている人がいるはずだという思いもありました。そのために学生が動きやすいようにフレンドシップ事業をサークル化したものがMake Friends、メイフレです。

3. 活動方針と目標

活動方針としては、Make Friends の主旨を十分に理解したうえで協力してくださる協力機関(公民館・小学校等)があり、まず始めにメイフレのメンバーを10人から15人のグループに分けます。それから各グループごとに立てた企画を協力機関と打ち合わせを密にしていながら運営し、活動を行うという学生主体の企画、立案、運営をすることです。また、目標は上述しましたが、企画、立案、運営をする力を身につけること。子どもの実態を把握すること。地域との関わり、人々と関わりあう力を養うことを目的

として、学生の社会性を高めていくことです。

4. 内容と特色

〈内容〉今年から発足したメイフレではこの1年間で大きく7つの実践計画を立てています。現在、メイフレに協力していただいている機関は託麻公民館、清水公民館、たぬき文庫、上北小学校、熊本大学附属小学校の6つです。

今までに行われた実践としては託麻公民館での「はじめてのおかいもの」「阿蘇で遊ぼう」、上北小学校校区での「上北祭り・ホームステイ」、その他にグランメッセで行われた「青少年のための科学の祭典」にも参加しました。

また、今後実践予定の清水公民館での「ジャンボカルタ大会」、たぬき文庫での「もちつき大会」、附属小学校での総合学習を念頭においた授業への参加があります。

〈特色〉サークルとはいうものの熊本大学教育実践センターの支援のもと、活動をしていること。また、教育学部学生だけではなく、他学部生も参加できる点がメイフレの特色です。

5. 成果

メイフレは1年生が半分以上を占めるサークルです。しかしこのおよそ8ヶ月の活動を通して以前に比べ、物事全体と考えることができるようになっていきます。他にレクリエーションやネイチャーゲームなど子どもをひきつける技を身に付けてきたことです。

6. 今後の課題

企画にばかりとらわれすぎてメンバー同士のつながりが薄くなってしまったことを反省し、それを強化すること。活動の場を増やすこと。協力機関に頼らず学生の企画に子どもを呼び込むような仕組みを作ることが今後の課題です。

はじめてのおかいもの

みんなで、おいしいカレーライスをつくりませんか？^{だいがくせい}大学生のおにいさん、おねえさんと

いっしょ
一緒におかいものやりようりをしてみましょう。

- ◎ ひにち:7月8日(土) こんだて・・・カレーライス・白玉^{しらたま}だんご
- ◎ じかん:9:00～15:00 もってくるもの
- ◎ ばしよ:^{なへまきこうふくかん}託麻公民館 エプロン・^{まんかひ}参加費50円(当日徴収いたします)
- ◎ 定員:^{さいいん}先着^{せんちゃく}30人(2年生) ちかくのおみせのちらし
- (かいものに行くときにあるとべんり)

◎ 内 容

しゅうごう 9:00				かいさん 15:00
せつめい	かいもの・りょうり	ごはん	かたづけ	

◆お申し込み方法

下記の申込書に必要事項を記入の上、託麻公民館にお持ちいただくか、郵送でお申し込みください。

託麻公民館 住所：熊本市長嶺東7丁目11-15

電話: 3 8 0 - 8 1 1 8

締め切り 6月23日(金)

◆保護者の方へ

公民館が校区外にあるため、特に家が遠い方は、お子様の送り迎えをお願いします。
また、保護者の皆様は送り迎えのみで結構です。

主 催

熊本市教育委員会託麻公民館

Make Friends (熊本大学サークル)

キリトリ

申込書

託麻西小学校	年	組	電話	性別	男・女
名前			保護者氏名		印
住所 〒					

信大YOU遊サタデー7年間の実践と成果

発表者 中村 祐介

信州大学教育学部理科専攻4年

第7期信大YOU遊サタデー実行委員長

(E971321@mail.shinshu-u.ac.jp)

〈キーワード〉心をともに 学生主体 地域貢献 大学開放 他大学との交流

1. 活動の目的

信大YOU遊サタデー（以下YOUサタとする）の目的として、①地域社会への貢献 ②大学開放 ③実践的指導力を身につける ④学生生活の充実の4点が挙げられる。

2. 発足の経緯

平成5年現在、本学部には子どもたちと触れ合う機会は教育実習の6週間しかなかった。このような現状の中で、「もっと子どもと触れ合いたい」という学生の強い願いがあった。そして平成6年6月6日、この願いを実現するために「実行委員会」が結成され、9月に第1回目のYOUサタが開催された。以来、1.で示したような教育学部の活動としての目的を持ち、毎回反省会を設け、反省を活かしながら更なるYOUサタの発展を求め7年間活動してきた。

第7期は、平成12年2月末に発足した。実行委員長と副実行委員長4名を中心に、約1ヶ月かけて、第6期の反省から、今期の目標、年間活動計画（資料1）、活動するために必要な仕事を明確化し組織を確立していった（資料2、3）。

3. 活動方針と目標

〈活動方針〉

「楽しく」を基本に、学生それぞれが1.で示したような目的を持ち、学生主体で企画・運営をしていくことがYOUサタの活動方針である。また、子どもとの触れ合いにおいて、安全を第一に考え、キャンパス内の案内や駐車場整備に始まり、けが人等緊急事態が起きた場合に備え、対処方法の徹底や保険に加入していることも重要な活動方針である。

〈目標〉

第7期の目標は、「心をともに」である。Y

Oサタは世代を超えた、人と人との出会いの場であり、集団活動である。お互いに理解し合い、共に考えたり、共に悩んだり、共に楽しんだりすることを大切にしていきたいと感じてこの目標を定めた。

4. 内容と特色

はじめに、YOUサタ当日までの活動内容と特色を示す（資料4）。

次に、当日の内容と特色を示す。

①第20回信大YOU遊サタデー

5/27（土）に松本キャンパスで開催した。教育学部キャンパスと離れているため、午前中に準備をし、午後から講座を開始した。大学の外に出て行く遠足講座、ペットボトルを活用して田んぼを作る講座等、全12講座を通して子どもたちと触れ合った（資料5-1）。

②牟礼YOU遊サタデー（出張）

9/23（土）に長野市の隣の牟礼村で開催した。今までの地域から依頼が来た出張YOUサタとは異なり学生からの発案であった。牟礼東小と西小から参加者を募り、ネイチャーゲーム等、牟礼村の特徴を活かした4つの講座を通して子どもたちと触れ合った（資料5-2）。

③第21回信大YOU遊サタデー

11/11（土）に長野市教育学部キャンパスで開催した。民族楽器を作って演奏する講座や、保護者のための教官による講演講座等、全13講座を通して子どもたちや保護者の方と触れ合った（資料5-3）。

④第2回フレンドシップ事業

全国学生シンポジウム

12/9（土）に長野市教育学部キャンパスで開催。

上記の活動は学生主体で行われているが、附属教育総合実践センターをはじめとする大学の全面的な支援のほか、何でも手づくり吉澤学校の吉澤さん、J Aながのや牟礼村ふるさと振興公社等の、地域の協力を得て活動をしてきたことも特徴である。

5. 成果

第7期の活動における大きな成果は、資料4からもわかるように、学生だけの活動のとはならず、J Aながのや牟礼村ふるさと振興公社の方々の協力を得て、「信大茂菅ふるさと農場」と「信大牟礼ふるさと農場」を開設し、より専門的でオリジナリティーのある活動を展開して子どもたちと触れ合えたことである。

また、学生の「やりたい」という気持ちで実現した牟礼Y O U遊サタデーが無事成功に終わったことも、来年度の活動へ向けての大きな成果であった。

次に、学生自身の成果についてだが、他専攻の人や色々な人と出会えた、人間として成長できた、子どもへの接し方や考え方が変わった等が挙げられる(資料6)。

最後に、7年間における信大Y O U遊サタデーの活動の成果を述べる。

①学校週5日制の試験的導入に伴い、7年間で信大キャンパス内において21回のY O Uサタを開催するとともに、長野県各地域において13回の出張Y O Uサタを行った。約4000人の子どもたち(出張は除く)が約300の講座に参加してくれた。②休業日となった土曜日の子どもの受け皿として、また教官や学生の優れた教育力を活かして土曜日の過ごし方を提示してきたことで、地域社会へ貢献することができ、教育学部と地域社会のつながりを深めることができた。

③学生主体で企画・運営し、様々な講座を通して子どもたちと触れ合うことで、学生生活が充実し、教師となるための実践的指導力を養う場となった。

さらに、④フレンドシップ事業の先駆けとなったことや他大学と交流ができたことも大き

な成果である。

以上、成果について述べてきたが、Y O Uサタにとって、また我々学生にとっての一番の贈り物は、子どもたちの「楽しかったよ、また来るね!」という言葉であった。

6. 今後の課題

第1に、企画・運営面の問題である。Y O Uサタは子どもと触れ合う当日だけではなく、みんなでやろうD A Y Sに象徴されるように学生が協力し合い準備をしていかなければならない。学生によってその準備期間における関わり方に差が生じている。また、スタッフ数が100名を超え、毎週木曜日に行われる定例会だけでは情報が伝わりにくくなった。各自がY O Uサタの一員であるという自覚を持ち、スタッフ全員でY O Uサタをつくっていくという意識を持って活動していくことが必要である。

第2に、参加者年齢層の問題である。Y O Uサタの参加者年齢層は小学生が最も多い(資料7)。地域社会への更なる貢献のためには、中・高校生、大人を対象とした活動もしていくことが必要である。

第3に、執行部とキャプテン・スタッフの間に壁があるという問題である。この問題を解決していくためには、定例会や反省会に代表される活動期間だけでなく、1年間を通してお互いが顔を合わせる場を数多く設け、話し合い、相手のことを理解していくことが大切であると感じる。

以上、今期の問題点と今後の課題を述べたが、我々が現在直面している更に大きな課題は、来年度からどのような新しい活動をしていくかということである。学生のニーズに合った、また地域のニーズに合った新たな活動を展開していくことができるかどうかは21世紀に向けての最大の課題であろう(資料8)。

全国から信州大学で教育を学ぼうと集まってきた学生の英知を結集して、新しいプロジェクトを立ち上げていただきたいと願っている。

《資料 1》

年間活動計画

企画名	開催地	日程
第 20 回信大 Y O U 遊サタデー	信州大学松本キャンパス	5 月 27 日 (土)
牟礼 Y O U 遊サタデー	牟礼村天狗広場等	9 月 23 日 (土)
第 21 回信大 Y O U 遊サタデー	信州大学長野キャンパス	11 月 11 日 (土)
第 2 回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム	信州大学長野キャンパス	12 月 9 日 (土)
実践記録 (Y O U サタ・シンポジウム) の編集・配布	信州大学長野キャンパス	シンポジウム終了後から

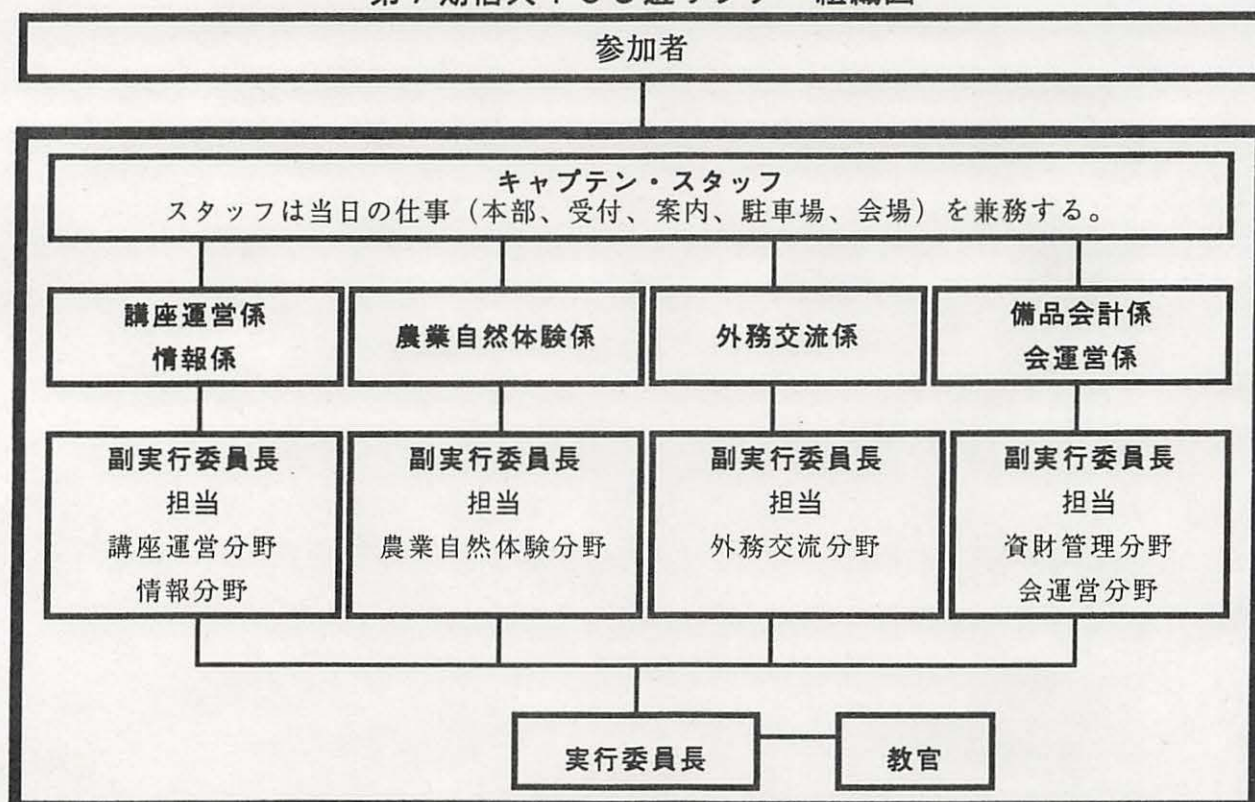
《資料 2》

活動するために必要な仕事の明確化

分野	主な内容
実行委員長	マスコミまわり、全体把握など、Y O U サタ代表者としての仕事。
講座運営分野	講座のキャプテンがスタッフと共に、先を見通してより良い講座を作り上げることができるよう補佐をする仕事。
情報分野	スタッフ登録システムから名簿作成にあたる情報処理、ホームページを通しての情報発信、作成した資料、写真の情報管理をする仕事。
農業自然体験分野	自然体験研究特講とのパイプ役。J A ながのや牟礼村ふるさと振興公社の協力を得て、学生が田畑を耕し、自然体験活動を促進する仕事。
外務交流分野	参加者・スタッフアンケート作成や全国の学生と交流する場の設定・運営をする仕事。
資財管理分野	講座に必要な備品の発注、準備、管理や参加費の検討、金銭の管理をする仕事。
会運営分野	定例会の運営。Y O U サタ通信作成や、定例会の司会進行などをする仕事。

《資料 3》

第 7 期信大 Y O U 遊サタデー組織図



《資料 4》

第 21 回信大 Y O U 遊サタデーに向けて

10月		全体	
1日	(日)	休日	
2日	(月)	執行部会 講座運営係会	
3日	(火)	執行部会 講座運営係会	
4日	(水)		
5日	(木)	定例会 (講座募集・係募集・本部アンケート)	
6日	(金)	キャプテンオリエンテーション 1年生スタッフ募集	
7日	(土)	休日 キャプテンオリエンテーション	
8日	(日)	休日	
9日	(月)	休日	
10日	(火)	休日	
11日	(水)	マスコミまわり 執行部会	
12日	(木)	定例会 (スタッフ募集・説明) 情報係会 備品会計係会	スタッフ募集
13日	(金)	O B 案内状送信 備品会計係会	
14日	(土)	休日	
15日	(日)	休日	
16日	(月)	第1回キャプテン会議 遊学プラン・絵と文章提出 (13:00)	
17日	(火)	第1回キャプテン会議 執行部会 講座運営係会 外務交流係会	
18日	(水)	D M 発送日 小学校まわり	
19日	(木)	定例会 (キャプテン・スタッフ顔合わせ)	↓
20日	(金)	備品会計係会	スタッフ募集
21日	(土)	休日	
22日	(日)	休日	
23日	(月)	信毎掲載日 参加者受付開始	
24日	(火)	執行部会 講座運営係会	
25日	(水)	本部会	
26日	(木)	定例会 (当日の仕事決め)	みんなでやろう D A Y S
27日	(金)	情報係会	
28日	(土)	休日	
29日	(日)	休日	
30日	(月)	第2回キャプテン会議 遊学プラン提出 (13:00) 外務交流係会	
31日	(火)	第2回キャプテン会議 執行部会	
11月			
1日	(水)	本部会	
2日	(木)	定例会 (当日の仕事の打ち合わせ・「心とともに」配布) 備品会計係会	
3日	(金)	ゆうゆうカード消印有効日 (参加者受付メ切)	
4日	(土)	休日	
5日	(日)	休日	
6日	(月)	H O W T O サタデーメ切 (13:00) 執行部会 備品ふりわけ	
7日	(火)	定例会 (当日の仕事について) 執行部会	
8日	(水)	本部会	
9日	(木)	定例会 (前日・当日について) 参加者・スタッフアンケート完成	↓
10日	(金)	前日準備 (全体会)	
11日	(土)	第21回信大 Y O U 遊サタデー	
12日	(日)	休日	
13日	(月)	備品庫の整理	
14日	(火)		
15日	(水)		
16日	(木)	定例会	
17日	(金)	反省会	

《資料 5》

5-1

講座一覧

第20回 Y O U サタ講座 名	講座のねがい
大人気！ぶよぶるスライム	簡単な実験によってスライムが作れる楽しさを知ってもらいたい。スライムで遊ぶ楽しさを味わってもらいたい。
君だけの田んぼ作り	自分が食べている食物（米）はどのように出来るのかを知り、食べ物大切さ、命のすばらしさを感じてほしい。土作りの楽しさを知ってほしい。
まほうのアイスクリーム	氷と塩を混ぜることによって、氷だけの温度よりも低くなり、アイスクリームが冷凍庫を使わなくても固まるという不思議さを体験してほしい。
シャボン玉で遊ぼう	大きいシャボン玉や小さいシャボン玉、工夫したシャボン玉といった通常とは違う遊び方をするによって、面白さを発見してほしい。
見つけよう！出かけよう！ ～みんなでミニ遠足～	初めて会った子ども達にグループ内で仲間としての一体感を感じてほしい。また、スタッフには、それと同時にこのような活動を促すような支援が出来る力を身につけてほしい。
ケナフで紙を作ろう	最近注目されるようになったケナフから、自分自信で紙を漉くという楽しさを通して、さらに環境へも関心を向けてもらいたい。
世界で1個の手づくりキャンドル	手作りの楽しさをわかってほしい。電気とは違った、ろうそくのかたまりのある光を感じてほしい。
かさランラン ～どうぶつがさをつくろう～	身近なものを自分で工夫、アレンジして、自分だけのかさをつくり、楽しんでもらいたい。
フリスビろう！？	フライングディスクを通して、運動を習得する喜びにふれ、ニュースポーツに親しんでほしい。
親子でチャレンジ！ 溶かしてつくるオリジナル 合金キーホルダー	ものづくりのおもしろさを体験するとともに、親子で一緒に作り上げる喜びを得てほしい。
ただいま紅茶の時間です	コミュニケーションの手段としての紅茶を知ってもらうのと、それに役立つ知識や技術を身につけてほしい。
竹とんぼ	刃物に慣れ親しんでほしい。

5-2

牟礼 Y O U 遊サタデー

オリエンテーリング、野外クッキング、ネイチャーゲーム、クラフト作り

5-3

第21回 Y O U サタ講座 名	講座のねがい
秋の味覚 干柿をつくろう	木に実がなっても、そのままにされてしまうことの多い渋柿を、昔ながらの方法で干し柿にすることを通して、ナイフの使い方や自然そのものの甘さや手作りの良さを伝えたい。
みんなで飛ばそう！ おもしろ飛行機大集合！	身近にあるものを使って、自分たちで飛行機やブーメランをつくり、飛ばして遊ぶ楽しさを伝えたい。
S O B A ～ソバ～	そばについての知識を広げ、そば粉の利用法や食べ方を体験によって学ぶ。
竹で遊ぼう！	子どもたちが竹馬を自分の手で作り、遊ぶことを通して、自分の手で遊び道具を作り出すきっかけになってほしい。
スーパー弾ける！！ ミラクルボール	ミラクルボールを作り、ゲームを楽しむことを通して、ミラクルボールの特性やそれを使って遊ぶことのおもしろさを伝えたい。
みんなでつくろう！ わらのおうち	わらという素材に出会い触れ合う中で、自分たちで遊びを発見し、みんなと楽しく遊んでほしい。
めざせチャンピオン！！ 簡単「チョコマカ」ロボット コンテスト！！	身近にあるものの工夫、改良を加えることを通して、自由に動くロボットが作れることを知ってほしい。 モーターを取りつける位置などの技術的な解決と、共同作業の楽しさを知ってほしい。
ランチョンマットを染めよう	染色の技法（型おき染め・かき染めなど）を使って、布地に図柄を染め付けることを通して、染色に親しみながら自分らしい作品を仕上げてほしい。
色砂カレンダー	筆のりと色砂を使ってデザインしていくことを通して、筆を操る楽しさとデザインすることの楽しさを伝えたい。
おもしろ！学校探検隊	友達と協力して、何かをやりとげることのおもしろさ、充実感を伝えたい。
ハロウィン大行進！	普段の生活の中で希薄となりつつある地域の人とのふれあいや、異文化というものを体験する中で、自己のありのままを表現し、それを認め合うことの大切さ、表現することのすばらしさを体験することができる。
音を楽しむシリーズ①ビャンベをつくろう②ディジュリドゥをつくろう③シュケレをつくろう 音を楽しむこと。	

《資料 6》

参加して得たこと

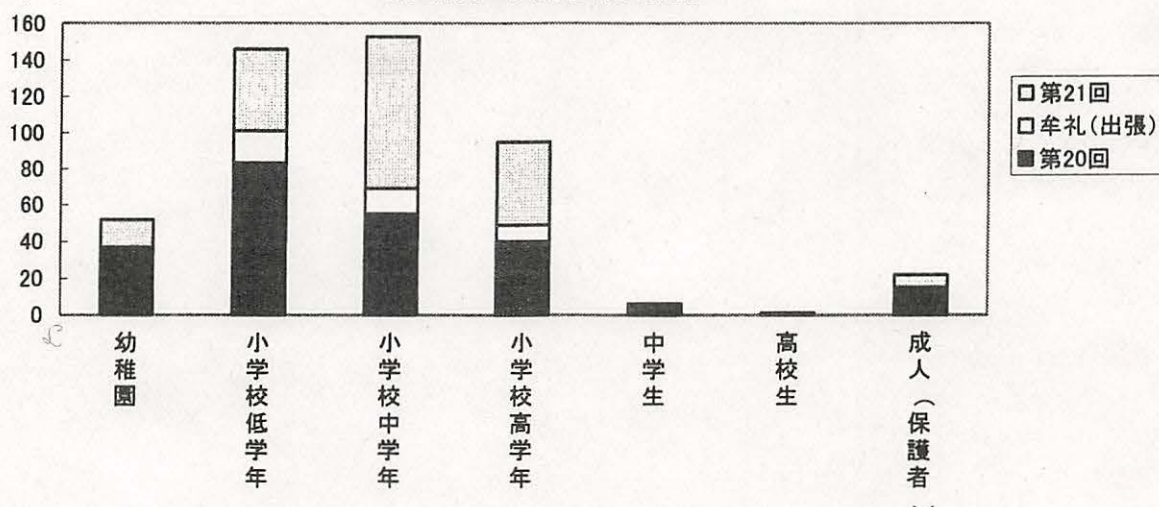
学生	参加者
<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな子どもと触れ合えた ・いろいろなことを学べた、経験できた ・成功した喜びが味わえた ・実践的な指導力になった ・子どもと楽しさを共有できた ・教材研究ができるようになった ・自分のやりたいことができた ・学生同士で協力できた ・普段にはない達成感、充実感を味わえた 	<ul style="list-style-type: none"> ・普段の生活では体験できないことが体験できた ・子どもの生き生きとしているところを見ることができた ・学校区域外の友達や知らない人と一緒に活動することで幅広い社会を見ることができた ・先生ではなく、学生と触れ合えた ・特技を持った人たちと触れ合えた

※第 21 回 Y O U サタスタッフ・参加者アンケートより

《資料 7》

(人)

第 7 期学年別参加者数



《資料 8》

学生・地域（参加者）が 21 世紀に求める活動

学生が求める活動	地域（参加者）が求める活動
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども、学生がお互いに楽しめる活動 ・物作りの楽しさや面白さを伝えられるような活動 ・学生主体の活動 ・地域に根ざした活動 ・学生自身の専門性を活かした活動 ・長期的に子どもと触れ合える活動 ・地区の育成会と連携して子どもと触れ合う活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな人、物、場所と出会い、自分と違うものを受け入れられる活動 ・自分の考えを言えることや協力し合って遊びを見つける活動 ・学生や地域の人と話し合いをする活動 ・障害を持った子どもと触れ合う活動 ・長期的に学生と触れ合える活動 ・地域の良さや伝統を子どもなりに学ぶことができる活動

※第 21 回 Y O U サタスタッフ・参加者アンケートより

パネルディスカッション

「フレンドシップ事業での自然体験や社会体験から私たちが学んだこと」

山田（信州大）：本日コーディネーターを務めさせていただきます信州大学4年の山田理恵と申します。司会はちょっと不慣れでうまく進まないところもあると思いますが、頑張りますのでよろしくお願いします。各大学みなさん、先程は実践報告の発表ご苦労さまでした。各大学とも去年より飛躍的な活動をしているなというのが私の感想でした。さてこれから私たち、21世紀、未来に向けてのフレンドシップ事業を、学生である私たちがどのように考え、どのように発展をさせていったらよいのか、ということを中心に今日はみなさんと考えていきたいと思っています。今までみなさんがやってきた活動をふまえて、これからの私たち学生がやっていく活動の課題と発展について話をしていきたいと思っています。信州大学のYOU遊サタデーが今年で閉幕して新たな活動を創っていく、ひとつのきっかけにこのシンポジウムをしていきたいと思っていますので、各大学の方々これからの前進的な活動についてのお話をお聞きする場にしていければいいと思います。で、今回シンポジウム2回目ですので学生同士本音で現在の悩みや課題について自由討論という形でやっていきたいと思っています。パネラーの方々もそうなんですけれども、一般参加者の方々、学生の方々からも、いろいろな意見をいただきたいと思いますので、どうぞ挙手をして参加してください。先生方もよろしくお願いします。今日の実践報告を聞いていて私が感じたことなんですけれども、授業科目として教官中心でやったフレンドシップ事業が、学生の力によって、学生主体のほうへ移行するという大学がすごく増えてきていると思います。そんな中で、課題やこれからの発展についてちょっとご意見のある方はお願いします。じゃあ、藤原さん。

1. フレンドシップ事業における学生主体の意義

藤原（横浜国立大）：僕たちの横浜国立大学のほうは、発足当時から学生主体ということでやってきました。ただ問題なのは、あまりにも教官の方が謙虚な態度のせいなのか、教官の方が、どこまで学生に対してやっているというのが見えない状況です。例えば川崎市と横浜市での校長会への依頼など、大事なところ要所要所はちゃんと教官が出向いているのですが、そういうところが一般の学生には伝わってません。なので、運営がきりきりまわっているということも、全体会などで見ているせいか、どうしても教官は上でひだりうちわかなんかで見ている感じがするということです。それで顕著な例が、全体会で教官がまあ、これから明日、あさってあるぞっていう時に学生のみんなに呼びかけるときに起こる現象なんですよ。なぜか僕たち運営学生が発表しているときはしーんとしているんです、学生のほうが。だけど教官がしゃべりだすと急に学生がよそ向いたり、しゃべり出したり、どうしてか分からないんですが、運営が前に立っている時は、聞くんだという、こうなんかの犬みたいにしつけられているような感じがするんですが、教官に対する、その先生であるということに対する尊敬心とかいろいろあると思うんですが、何かがちょっと学生には欠けているんじゃないか、ということで堪りかねたOBの方が前に出てきて、お前たちの態度はたるんだとか、そういうことまで、一幕まで出てきてしまいました。だからある程度教官が学生主体ということをやっているのはいいことなんです、その分運営学生がすごい負担がかかりますし、運営学生は神様なのか、っていうまるで何か一般学生が反発をして、それを意識付けとかいろいろ出てると思うんですが、そういうことを上から押し付けようということを、同じ立場の学生同士でやるっていうジレンマがあったり、やっている運営側でもすごく心苦しいときがあります。なので学生主体というのはすごい良いことなんです、要所要所で教官の方がきちんと締めていくというのが学生主体から始まった大学のほうでは課題だと思うので、それ以前に学生主体じゃなくて教官からやってきて、これから学生主体に移るっていう大学のほうはすごく何か希望が見えてくる

というか、今まで教官がやられていた分、いろんなところで締めることができると思うんですよ。だから僕たちの学生主体から始まってしまったのは、それはすごく課題だと思うんで、さっき山本からも反省をどうするのかというのもやはり、学生のほうからの訴えかけをしなければならないので、なかなか出ません。なのでそういうことも兼ねて今日はいろいろ聞きたいと思います。

山田：今、横浜国立大学から、学生主体で始まった大学の課題と、今から移行する場合の課題が挙げられました。最初に学生主体の活動について何か…。それでは信州大学の中村くん。

中村（信州大）：信州大学の YOU 遊サタデーでは、学生主体で始まったわけですけど、さっき発表で言い忘れてしまったんですけど、学生主体であるんですけど、学生だけが活動しているというわけではなくて、土井先生とか、あとは JA の方や、牟礼のふるさと振興公社の方や、なんでも手作り吉沢学校の吉沢さんとか、地域の方がとても協力をしてくれています。だから学生主体というのはとても、学生の中から何かが出てきて、学生が活動していくっていうのは、先ほど発表したように、学生生活の充実、という面につながり、学生が自分で考え、自分で活動し、自分で結果を出すわけだから、実践的な指導力になるという面でも学生主体でやっていくということはとても良いことと考えています。

山田：上から押さえこんでしまう、上の組織と下の学生の間の問題についてどなたか…。

藤田（熊本大学）：熊本大学の藤田です。僕はちょうど昨年から今年にかけて学生主体ということで移り変わってきたサークルなんですけれど、やはり今年サークル化して、去年まではフレンドシップに参加している学生も 10 名程度という少ないものだったんですよ。で、それがいきなり 4 月、5 月の段階で一時期 70 名くらいまで増えた時期があったんですよ。で、そこまで増えるとは正直思っていなかったんで、どうしたものか、ということをや昨年からフレンドシップに参加している学生と、あと教官のほうで話し合いをいろいろしてきたんですけども、やはり僕らの頭の中では組織化して縦の関係をしっかりと作る、するとみんなうまい具合に機能していくんじゃないか、というようなことをやろうとしていたんですよ。で、その結果どうなったかっていうと、結局縦の役割を、縦の組織を作ったとしても、参加しようという意識が強い学生と弱い学生に別れてしまって、で、隣にいる北崎なんかはすごく強くて、メイクフレンズ大好きみたいに参加してくれてるんですけど、現在 45 名まで減ってしまいました。正直、夏過ぎ、最近までですね、僕のほうもメイクフレンズのメンバーの個人的なことはあまり知らないというのが現状でした。で、僕の中で意識改革があって、メイクフレンズというサークルの名前があって、みんな企画を立てて楽しく活動しようというのに、船長である僕がみんなのことをよく知らないというのはちょっと問題じゃないかな、ということで最近はみんなのことをよく知ろうと思って縦のつながりよりも横のつながりを重視するようにしたんですよ。横のつながりさえしっかり固まれば、縦の組織的なものは自然とできてくるんじゃないかと思ってんですよ。だから学生主体で横のつながりをすごく重要視して、一人ひとりがお互いの本音をぶつけあっていけば、縦とかそういうのを作らなくても全員が全員で企画に、運営とかそういうふうにならなくても、うまい具合になっていくんじゃないかというふうに今思っているところです。

山田：ありがとうございました。藤田くんお願いします。

藤田（鳴門教育大）：鳴門教育大学の藤田です。みなさんが今、学生主体か授業科目かっていうような話があったんですけど、私先ほどの実践報告で私のやっている児童文化研究会の活動っていうのは単位に一切関与しないということを報告させていただいたんですが、実際に私が 4 年間活動してきて、みなさんが抱えているような上からの押さえつけですとか、横同士のトラブルというのは、ほとんど発生したことがないんです。それはやはり、最初に設立された当時に、設立者の佐々木先生がおそらく小さな規模でいいから、横のつながりのほうを採られたんだと思うんです。やはり本当に大学の組織の中で授

業科目となったら、まあぶっちゃけた話ですけど、おりてくるお金の額も大きくなるでしょうし、本当に知名度も低くて、勧誘活動もほとんどしていないサークルですから、小さな額ですけど、それは零細経営と引き換えに得たものというのを、みなさんの話を聞いて私はすごく感じました。そういうトラブルを経験したことのない人間がここに座っているのもおかしい話なのかもしれないですけど、学生主体で小規模であるから、イベントのときでも学年関係なしにいろんな意見が出ます。だから中心になっていくのは私みたいに4年間ずっと継続して活動している人間が、こうせえへん？ああせえへん？というような形で下級生のことを引っ張っていくという形にするんですけど、下級生のほうも私に堂々とそれはしたくない、あれはいいアイデア持ってるから、というのがやっぱり出てくるんです。その雰囲気というのは学生主体で、根っこの段階から学生主体でやってきたということの成果なんじゃないかなというふうに思います。ですから私の本音から言えば、こういうフレンドシップ事業というのは、学生が自分の本当の気持ちで自分がやりたい、こうやりたいというのが根本になきゃ、役に立つものも役に立たないんじゃないかな、というふうに思います。やっぱり教育実習行って私が感じることもんですけど、実習で授業やります。指導案は担当教官の先生に見せます。これはいけません、これはやりません、直してきなさい。というふうにされるのと、子どもがどういう反応するか分からないけれど、君実習生だからやってみよう。と言われる方が、すごく得られるものっていうのは大きいんじゃないかなと思います。だからフレンドシップ事業のこともそうですし、私教育実習行って感じることもそうなんです、自分がどう、自分にとってどうなんだ、この活動が自分にとって何を残してくれるんだということを第一に考えていかないと、やっぱりフレンドシップ事業というのは名ばかりのものになっていってしまって、上からの圧力につぶされてしまったらもったいないことだと思います。以上です。

山田：はい、ありがとうございます。お願いします。

北崎（熊本大）：熊本大学の北崎です。先程藤原さんのほうから先生の話が出たんですけど、もしかしたら関係ないというか、先生の話が出たので、俺が活動して先生、教官に対してどんなふうに思ったかというところで意見があるので、ちょっと言いたいと思います。さっき、前期で青少年のための科学の祭典というのに出た、と言ったんですけど、行ける最終段階になってポスターとか作るときに、出展ブースの代表者の名前を書くんですね。どこどこ大学の理学部の何とか書くんですけど、うちのサークルがまだ1年目で全然力がないんですね。力がないからいきなりメイクフレンズがやります、っていうのができなくて、うちの班が企画してやってきたことなのに最終的にチラシとかパンフレットに載った名前っていうのは、教育学部の先生の名前が載ったんです。で、俺たちの班にその先生が関わってたかっていったら、全くゼロなんですよね。で、大体分かっているやつはそういうことをしなきゃいけないんですけど、例えば途中から入ってくれた人とかが、いきなり何も知らずにパンフレットとかを見て、なんでこの先生なんだ、っていう、その俺らが企画してきたブースの店のはずなのに、なんで全く関係のない先生の名前が載ってるんだ、という。で、俺も1年だし、そういうこともよく分からない面もあるんですけど、正直に言ってですね、フレンドシップ事業をやって自分たち学生主体でやる、学生主体でやると言ってやってみるんです。実際やってみるんですけど、どこか何か、どこかの部分でそういうのがあったりして、すごい先生の名前を載せなきゃいけないっていうのも分かる気がするし、載るっていう事実もあるんだし、何か、そこでやっぱりちょっと悔しかったりするんですよね。その科学の祭典自体もメイフレ担当の先生が何人かいらっちゃって、中学校の理科の先生がいらっやるんですけど、その先生からいろいろ企画を没にされたり、っていうか、ほんとうに没があるんですけど、これはダメだ、というのを言われるんですけど、確かにそれも本当にダメなんですけど、冷静に1番最後の段階で考えたら、自分たちが100%企画した中にも、でもやっぱり先生が言って、筋が通ってる部分があって、

そこを採りいれてる部分があるんですよ。だって向こうはプロなんですよ。理科の先生なんですよ。プロだからここはこういうふうにした方がいいって言われたらさすがに言い返せないんですよ。正しいからですね。だからその分何ていうんだらう、企画を地道に進めていくとしたら、もし 1 ずつ進めていくとしたら、そこで先生から、プロからアドバイスが出たら、僕らとんでしまうんですね。だからその部分っていうのは先生の力なんです。で、10 できたものの中でも、何か気が付けば僕らの力って言うより先生の力だったりするんですよ。そういうところで、自分たちが力不足っていうのも分かるし、企画もおかしいのも分かるんだけど、でも僕も先生に疑問を思ったのも本当ですし、そうなってきたら何か、さっき言った先生に対する尊敬の念ですか、その先生がしゃべるときに話すとかいうのも、言い方悪いですけど、普通にリーダーとかがしゃべる時みたいに真剣に聞くんっていうのができない気がするんですよ。すいません、ちょっとよくまとまらないんですけど。そんな感じです。

山田：今、教官と学生の関わり方について出てきたんですけど、会場みなさんもどうでしょうか…。

2. 大学教育における学級崩壊、タテとヨコの人間関係づくり

高山（佛教大学）：私、京都の佛教大学の社会学部の 6 回生をしております高山と申します。こちらの信大さんとは 6 年ほど、こちらの土井先生のもとでいろいろご指導、ご鞭撻いただいているんですけど、確かに私も…私は今 29 です。短大を出て佛教のほうに入り直したという経緯なんです。昔短大にいて、今大学にいて変わった点があるとしたら、みなさん方にちょっと想像していただきたいんですが、この学部の授業でみなさん方が小学生の考え方を持って、先生が小学校の先生という立場で考えていただきたいんですが、それがまさしく学級崩壊なんです。ちょっと言ってることが分かりづらいかもしれませんが、先生たちが教壇で説明されていらっしゃる。かたや学生たちはあーだこーだしゃべってる。それがそのまま小学校、中学校に投影されると考えていただきたいんです。その時にしゃべっている側に対する礼儀っていうのは当然考えられるべきなんですけど、やっぱり我々自身、子どもに接するときもそうですけど、その時に一体何を重視してしゃべられてるかっていうのに基点をおかないと、いくらその現場にいたとしても得るものは何もないと思います。もっと言うと、大学っていうところの存在に関わってくるかもしれないんですが、私の個人的な考え方を述べさせていただくと、大学の学生っていうのは、先生たちに学びに行くものだと思ってるんです。教えを授かりに行くんだと私は思います。授かりに行くっていうのは一方通行で小学校みたいにどんどん卒業をして、一方的に教えを請うのみならず、まあそここのところはみなさん 18、19 の年齢ですからおわかりだと思うんですけど、大学っていうところは本来、我々が先生のところへこれこれはどうしたらいいでしょうという様に、教えを請う場だと思うんです。確かに先生たちと学生の間に考え方の溝があるのはこれは経験の差で、どうしてもないです。それこそ人間の限界っていうのがありますから。ただ、そここのところを付き合っていく勇気が我々学生に欠けているんじゃないかと思うんです。確かに上意下達という言葉には賛否両論あるんですが、やっぱりお互いが原点を見つめ直していかなければ、こういう事業を進めていく上でも、障害っていうのはこれから多岐にわたっていろいろ出てくると思います。

山田：ありがとうございます。じゃあ、お願いします…。

森下（信州大）：先程、一番最初に横国の藤原くんのほうから参加している学生の方に教官が何をしているのかよく見えなくて、結果的に活動のときに、教官がお話されてる時に学生の方ではなんだか、本当に先程言われたように学級崩壊のような状態に話を聞かないとかそういうふうになるということ。更に熊本のほうでは人数が増えて、組織化しようとしても参加意識が高い人と低い人というふうになって、結局動かなくなってしまう、という話が出て、更に横のつながりがいいのか、縦のつながりはどうなのかという検討が出ていたんですけど、私は、結果的に縦でも横でもなくて相互に組み合わさること

によって学生の意識が高まっていくのではないかというふうに思います。で、縦のように組織化して動かすっていうのは、やはり参加する学生の人数が多いときにはとても有効だと思いますね。参加している学生が少なければ、自ずからその人たちだけでやることで、その中で縦のランキングがあるわけでもないし、その中でも一つの机の中でみんなで話し合えばその中で横のつながりはできてるわけですから。だけれども、そういうことがあると人数が多くなれば、不可能なわけで、そうするとやはり運営をスムーズにするためには置いていかなければならないということがあります。で、縦に置いたところで、その縦の組織の中に参加している学生を入れていくことによって、組織の中で横のつながりというものができるのではないかと思います。たぶん今言っていることはよく分からないと思うんですけど（笑）。この資料集のほうで 33 ページに組織図があるんですけど、これは中村くんが考えていたのとは違うのかもかもしれないんですけど、私はこれは結局一見見たところ組織的になっていると思われますよね。だけれどもこの係、講座運営係だとか情報係とかこういうところに、YOU サタに参加している学生が、2 年生でも執行部に入っていなくてもこういう係に入って活動しています。そうすると、私は今講座運営係というところに所属してしまして加藤くんの部下ということで働いているんですけど（笑）、加藤くんは本部の執行部というところでやっているんですけども、私と一緒に働いてる人たちっていうのは 2 年生であったり、3 年生であったり。で、彼女たちの中には YOU サタに初めて参加したという子もいると思うんですけど、一緒に係の作業をすることで加藤さんや私やその他、小さいながら横のつながりができていて、更に係の仕事をまっとうすることによって参加している、YOU サタを創っているという意識が高まっているんですね。で、そうすると彼女たちは自分たちの仕事をまっとうしようと真剣に YOU サタに参加することができているんですね。私はそう思っております。なので、そうすると最初のほうに戻りますが、縦と横を組み合わせることで参加意識の強い人、低い人というものがだんだん緩和されていくのではないかと思います。さらに係の中で活動することによって信大で言えば土井先生になりますけど、土井先生がいかにいろいろな、裏で活動されているのかっていう様子とかが見えてきます。そうすることによって土井先生のありがたさというものが感じられていくのではないかと思います。結局、活動組織の企画とか組織運営とかそういうところに、どれだけ参加している学生を居混ぜてやるか、それによって教官に対する尊敬であるとか活動に対する熱心さとかが生まれてくるんじゃないかと私は思っています。

山田：はい、ありがとうございます。杉山くんお願いします。

杉山（信州大）：横国大の方からいろいろな話とか熊大の方からもいろいろな話を聞いて、教官と学生にしても、学生同士の中のつながりにしても、先程会場の方が言っておられたように、これは一つの学級崩壊なのかもしれないと僕も思ったんですが、そういうことが起こってしまう背景には一つ、信頼が足りているのかなって。それは当たり前のことだと思うんですけど、信頼を作るためにはコミュニケーションが必要かと思います。その策を奪回するにはまず、土鍋を買ってください。（笑）僕はそういう組織の運営に関わりたい人なので、コミュニケーションをとろうとすると、まず何をしようと思うかというと、食べ物でつる。鍋をします。で、みんなが輪になって鍋を囲んで話をして、色んなことを話して個人個人のことを知ったりとかしてきてます。7 期の YOU サタもそのようにして集まりました。そういう信頼とかコミュニケーションをとることによって、感謝っていう気持ちが生まれてくるかなあ、と僕は思ってます。農業を主にやってきて、僕ら林部さんの家にりんごを手伝ったりして色んなことを学んだり、それから林部さんの家に行ったら、ご飯が出てきちゃうから困っちゃうんですよ（笑）。ありがたください、そういうふうにコミュニケーションをとって信頼関係を築いてます。自然と感謝の気持ちが出てくるんじゃないかなと。土井先生とも YOU サタで集まって飲むこともあります。土井先生

も僕たちのカラオケに付き合ってくれることもあります。僕はフレンドシップ事業をやって、それを通して一つの社会の中でやってる組織ですから、社会体験かなあと思ってるんですよね。その中から学んだのはコミュニケーションの方法を学びました。

山田：今、社会体験でコミュニケーションを学んだと言っていたいたんですけれども…

藤原：すいません、マイクを持つとしゃべりたくなるので…。またしゃべらせてもらいます。すごく失礼なことを言わせていただきます。信州大学は僕が1年生のときからお邪魔させていただいて、いろいろ勉強させていただいたんです。で、1番すごいなと思ったのがやっぱり、土井先生を始めとする教官と学生の方々がアットホームな関係であるということです。ただ、ここで問題かなと思ったのが、もし土井先生が突然いなくなったら、YOUサタはどうなっちゃうんだろう、っていうのをすごく感じました。ある意味すごく土井先生が、ちょっと失礼な言い方なんですけど、カリスマみたいな感じなので、土井先生が微笑んでくれるから学生もやる気が出る。で、どっちかという、運営の学生が頑張ってるっていうより、土井先生の一つひとつの言葉や励ましで学生が頑張ってYOUサタがここまで大きくなった、というふうに部外者ながら思いました。横浜国大のほうは、その学級崩壊って思われるかもしれないんですが、確かに発足して3年経ってます。ただ、委員会というのがありまして、一人の先生が全部持ってずーっとやるのではなくて、任期を決めて2年スパンでやっております。なので、昨年までやっていた教官と今年度から始まった教官は全く違います。なので、去年のリピーターの人が知らない先生が出てきてるっていう感じになってます。なので、ある意味またこれから次の年にその先生が信頼関係を築いていくっていうのはあると思います。あと、学級崩壊っていうのもあったんですが、基本的に学生はアットホームな感じではあります。ただ、運営の学生がしゃべるときと、まあみなさんがこう、しーんとしているのが運営の学生がしゃべっているときです。で、先程の休み時間にみんなが和やかに話しているのが教官が話しているときだと思っていいと思います。全く違う話をしているわけではないんですが、やはり出る機会が少なかったりするんでどうしてもそうになってしまうのかな、っていうのがあります。

山田：ありがとうございました。じゃあ、上教大の方お願いします。

川上（上越教育大）：上越教育大学3年の川上と申します。先程からいろいろみなさんの意見を聞いていたんですけれども、やっぱり学生主体という言葉にある意味とらわれすぎているんじゃないかな、という考えがちょっとしました。主体というと、どうしても学生が中心となって計画して考えて運営していく、っていうふうに捉えがちになると思うんですけど、学生主体っていうのはやっぱり学生が委員となってやっていくだけであって、別に教官を全く排除するとか、中心となって活動していく学生だけが頑張るということではなくて、教官に対しても、ちょっと言い方が悪いかもしれないですけど、利用できるものは利用するというで、先生方はやっぱり経験の面からも知識的な面からも、私たちの知らないことをたくさん教えてくださったり、新たなものの見方を教えてくださったりするので、やっぱりそういう良い点っていうのは聞くことも非常に大切じゃないかなと思います。それで主体という面にこだわりすぎると、運営していくメンバーだけが中心となってやっていかなきゃ、となってしまうて、結局一般参加の学生たちとの隔たりがそういうところから生まれてくるんじゃないかな、という気が僕はします。なので、教官だけではなくて大学の中の学生全体としてやっていくというか、全体の輪を作っていくっていうのが必要じゃないかな、と思います。で、何よりも言いたいことが何でも、あれは気に入らないとかそれは違うと思うとか、そういう意見がどんどん中心となる学生だけじゃなくて一般参加として関わってくる学生でも言えるような雰囲気作りが大事じゃないかと思います。ただ、そういう方向に行き過ぎると、砕けすぎてななあになってしまう面もあるので、そういうところはピシッと締める

っていうのもすごく大事で、そういうところで教官の先生に締めてもらえるところはやってもらっていうのも時には大切じゃないかなと思います。で、フレンドシップっていうのは何が大事ですかっていうと、学生は子どもたちと関わる中でいろいろ学ぶこともあるし、それがやっぱり目的だし、何より参加してくれる子どもたちにすごく楽しんでもらえるっていうのが大事なんじゃないかなと思います。なので、あまり細かいことに捉われすぎずに、大きなものの見方でいいものを創っていいものを作りたいんじゃないかな、と思いました。以上です。

山田：はい、ありがとうございました。吉原さん、お願いします。

3. 社会人の立場から見たフレンドシップ事業

吉原（JA ながの）：地元の JA ながのの青年部で理事をやっております吉原と申します。先程からよく、学級崩壊とかいろいろ問題になっていることが出てくるので参考になるかわからないですけど、そちら側の人間がまあちょっと過去を話しますと、自分は今 30 を越したところなんですけど、いわゆるワルでした。まだ学級崩壊なんていう言葉がない時代に、授業中に机並べて麻雀やってました。で、暴走族の集会に出たり、夜走ったり、爆竹投げたりしてました。まあ、そんなこともあったりして謹慎、無期停学、退学なんていうものも経験しました。で、いずれそういう扱いにくい子どもをみなさんこれから担当しなくちゃいけない場面が出てくるかと思うんですけど、じゃあどうしてそんなことをしてしまったかっていうと、自分でもわからない部分ってあるんですよね。で、一つ言えるのは昔からあったことをかっこよくまとめ過ぎちゃうんですよね。よく売春行為を援交と言ったりね。で、大人は分別がつくから使い分けられるんですけど、子どもって感受性が豊かだから、それがメディアで出ちゃうとそれが流行りだと思って追いつこうとするんですよね。で、自分もそうでした。学校行っても勉強できないし、家じゃ勉強しなさい。学校じゃ何やってるかわからない。ついていけない。いわゆる劣等生ですよ。そうすると自分の中で焦りがあるんですよ。みなさん子どもさんと付き合ったことがある方は分かると思うんですけど、どうしても自己表現したいんですよね。認めてもらいたい。自分を見てもらいたい。赤ちゃんがえりだと思うんですよ。で、その結果としてじゃあどうやったら目立つか、頑張れるかっていったら、良いことしても目立つのは難しい。結局悪いことするんです。そっちの方が簡単なんですよ。手っ取り早いんですよ。良いことした方がよっぽどいいんですけども、そういう思考自体が無いんですよ。頭悪かったもんで。で、結局そういう方へ走っちゃって。直接的なところ。で、よく自分が学生時代に友達と話し合ったのは、どうやったら有名になれるか。どうやったら新聞に出れるか。マスコミが家に来るか、学校に来るか、自分の名前が実名報道されるか、という話をしたんですよ。そうすると単純に悪いことなんですよ。で、大物になってやろう＝悪いことが大物になっちゃうんですよ。そういうことでしか自分のアイデンティティを表現できなかったんですよ。それが今やっと 30 過ぎて気付いてきたんですけども、どうしてそういうことをしたかっていうと、一つ言えることは、やっぱり大人をナメちゃうんですよ。先程も言っていたように尊敬できない。言ってることとやってることが違う。もちろんしょうがないっていうのは分かるんですけど、ご都合主義ですよ。みなさんも経験あると思うんですけど、都合が悪いときは子どもなんだから。都合のいいときはもう大人なんだから。使い分けられちゃってね。じゃあ俺どっちなんだ。で、一方的に怒られて。そうすると家に居たくない。外にでる。同じ様な仲間が集まる。悪循環なんですよ。で、それが小さいときなら家庭内で親父のかみなり一発で直ったかもしれないんだけど、ある程度心と体が成長しちゃうと、やっぱり暴れちゃうと力があるし、今は。先生たちも見て分かると思うんですけど、昔と違って今はすごく体格がいいですよ。逆にこんな人たちに向かってこられたらやられちゃうっていう感じがするんですよ。実際怖いんです。で、そういうのを子どもって見て感じると受け取っちゃうから、ああこいつ俺がやっても勝てるなって思う

から余計ナメちゃうんですよね。僕らが学校で歩いていると先生、帰っていきましたからね。避けるし、関わりたくないって。目線合わせると逃げますしね。そうするとおもしろいから余計こうやって目線合わせるんですよ。(笑) 喧嘩売るんですよ。でも向こう出さないから、まあ出しちゃいけないんですけどね。それに余計自分たちで面白がってからかう感じでつかかっていくんです。そんなことをしました。で、自分は今農業をやっているんですけど、杉山さんと一緒に信大の茂菅の農場のほうで農業指導という形でほんのちょっとだけなんですけど、お邪魔してやってます。で、その時にちょっと生意気な言い方なんですけど気付いたことと、今回発表していただいた方、子どもさんに関わっているっていうのを聞いて感じたことなんですけども、あまりにもみなさん、子どもに主体性をあずけ過ぎちゃっていますね。簡単に言うと、子どもに気を使いすぎちゃっているんですよ。いかに好かれよう、どうしたらこっち向いてくれるか、どうやったら興味をひくか、どうやったら集まるか。もちろんそれも大切なことなんですけれども、そうすると子どもを持ち上げているとしか僕には受け止められなくて仕方ないんですよ。確かにそうすれば喜ぶますよ、子どもは。なんだけれども、じゃあ本当のふれあいって何？っていったら、僕もその辺はよく分からないんですけど、ちょっと違うんじゃないかっていうのは何となく思ってたんですよ。具体的な例で言いますと、この発表の中でも、子どもさんのミーティングの中であったことなんですけれども、一番気になさるのが、ケガ対策ですね。事故対策。それは分かるんですけども、子どものケガなんて大したことないんですよ。よく、そんなのつば付けとけば治るみたいなこと言われてませんでした？自分が子どもの時。やっぱりそれはあずかっているからそういう対応になるんですけど、一つお聞きしたいんですけど、自分がそういった活動していて子どもさんあずかりました。自分のあずかっている範囲の中でケガをしました。先程おっしゃったように、手を切った、縫った、ちょっと鼻血を出した、指切った。そうなった時に、一番困るのって誰ですか？一番の被害者は誰ですか？子どもですよ。ケガされちゃった、どうしようじゃないんですよ。ケガした子どもが一番痛いですし、切ないですよ。それを、けがされちゃった、親に何て言おう、これが表に出たらこのプランは失敗。そういうイメージを持ってしまうのはもちろん分かるんですけど、理想と現実がありますから。もしそうなった時に教育委員会やPTAが出てきて、ケガするようなところにはあずけません。って言われたらどうしよう。もちろん想像するのは自由ですからかまわないんですけど、そうなった時に自分がどう対処できるかっていうのを本当に考えてやっているのかどうかっていうのは、もちろん考えている方もいると思うんですよ。なんだけれども、本当の意味でね、そういうアクシデントが困るのか、ケガが困るのか、自分の立場が困るのか、子どもがかわいそうなのか、それとも小さいケガはそれも経験の一つだと受け止めるのか、それはいろいろあると思うんですが、あまりに過敏すぎるような気がします。ちょっと乱暴かもしれませんが。まあ、自分にはまだ子どもはいないんですけども、そこまで考えてくれるのはありがたいことなんですけれども、あんまりマニュアル化、細分化しすぎるのも自分の首を締めるような気がしてちょっと気にはなってたんですけどね。だからもうちょっと大ざっぱでもいいんじゃないかと。子どもなんだから。自分も手癖悪かったから、小学校のとき悪さして彫刻刀で蹴って、いまだに肉えぐっちゃって陥没してるところあります。でも五体満足で生きてます。苦労したことありません。逆にその痛みがあったからこそ、次からは刃物の使い方に気をつけるようになりました。どんな職業でも言えるんですけども、危険が伴う職業の人ってね、ちょくちょくケガした方が、大きい事故しないんですよ。気をつけるから。で、何にも事故起こさない普通の人の方がいきなりでっかい事故おこすんですよ。車の運転もそうです。慣れた頃一番事故起こすんです。だから小さい事故、鼻血出た、ちょっと指切ったぐらいだったら、別に報告なんかしなくても、まあした方がいいと思う方もいるかもしれませんが、あまり過敏に反応しすぎて重大事件のこのように受け止めるのはどうか

なっているのは若干感じてました。いろんな考え方があるのは分かるんですけど、一つ汲んでいただけたら子どもももっと大らかに、自由に遊べるんじゃないかと思います。ちょっと長くなってとりとめなくて申し訳ないです。

山田：大変貴重なお話、ありがとうございました。今、私たちのようにフレンドシップをやっている側ではなくて、外側からの率直な意見をいただいたと思います。私たちがこれから考えていかなければならないのは、この先、どんなフレンドシップをやっていったらいいのか。今まで体験したことを踏まえて、どのようなフレンドシップを私たちはやっていきたいのか、ということをみんなで考えていくことは、すごく重要な部分だと思うんです。その辺に関して、これから私たちがどんな想いでやっていきたいかというのを、みなさんにお聞きしたいなと思うんですけど、どうでしょうか…。

4. フレンドシップ事業への保護者の参加について

伴（上越教育大）：上教大の伴です。上教大では、子どもたちともふれあい活動として学びの広場があるんですけども、これは完全に保護者を切り離して子どもと学生の関わりなんですけれども、発表の中で横国と信州ですかね、保護者を入れてやっている。で、今お話いただいたようにフレンドシップをやっている学生からではなく、外の意見が聞けるってということなんですけども、その他に子どもだけでなく、保護者が入ったことによって得られるものってというのは、メリットってというのは何ですかね？別にデメリットについてもお聞かせ願いたいんですけど…。

山田：ありがとうございます。藤田さん。

藤田（鳴門教育大）：今のお話なんですけれども、保護者がいることのメリット、デメリットなんですけれども、やっぱり今ずっとお話してくださったように、私たちは何を言ってもまだ所詮は大学生なんですよ。だから経験もなければ、確かに機動力と実行力はあると思うんですよ。先生とお話をしたときにそうなんですけど、どこから出てきたん？っていうアイディアを出せるのはたぶん若いからなんですよ。それでどうなるかっていうのは考えてない部分が多少あるから若いアイディアって出てくると思うんですよ。けど、それっていのが果たして子どもに何を与えられるかっていうのを考えたときにやっぱり親の視点の方が強いわけです。保護者の視点の方が。ですからメリットというのは、その子どもを知ってるのは親なんですから親に対して、親と話すこと、その子の親と話すことによって、今度自分とその子との距離っていうのはすごく縮まると思う。それが保護者の方と話すメリットだと思います。で、デメリットっていうのはやっぱり先程もお話があったように、子ども主体でなくなるとか、過保護になりすぎるって部分が多少あると思うんですけど、やっぱり子どもが、最初にうちの図書室に来る子どももそうなんですけど、最初一人になれない子どもがいるんです。入ってきても。カウンターで貸し出しの手続きとかするんですけど、名前は？って聞いても何も言えない子どももいますし、一緒に遊ぼうかって声かけても、お母さんのところ行ってしまう子もいるんです。やっぱりあえてデメリット挙げるとしたら、親離れのできてない子ども、っていうのは相変わらず図書館っていう場ですが、フレンドシップという場でも継続させてしまうというようなデメリットだと思うんですけど、やっぱり、保護者も参加し、子どもも参加し、学生も保護者から何かを得、っていうようなお互いが相互に学びあうっていう姿勢がそこにあれば、保護者の方が来てくれる方がメリットの方が断然大きいんじゃないかと私は思います。以上です。

山田：ありがとうございました。保護者に関してメリットの方が大きいというお話でしたけど、はい、横浜国立大学の山本さんお願いします。

山本（横浜国立大）：親子、保護者が講座に参加するっていうのはわくサタでは今年は、先程も言いましたが2回目のほうで保護者も参加させて欲しいというのがありました。で、なんやかんやっていうのがあっ

たんですが、最初の方に小学校側から言われたのがものづくりとかの講座で親子、お父さんとか参加して、子どもにいいところを見せて欲しいっていう要望がありまして、何言っただ、汚いなってちょっとと思ったんですけど、うちら利用されてるよとかぶつぶつ言ってたんですけど。で、材料とか余裕のあるところは参加してもらってという感じで、余裕がないところは手伝いをしてもらう程度で外から、脳から見てもらうって感じだったんですけど。先程も後ろの方でやったんですけど、木の食器を作ろうっていう講座はお父さんたちがもう子どもほったらかしで夢中になって木を削ってるんですね、彫刻刀で。子どもはもう学生側に任せっきりで。ひたすら自分の作業に没頭してて。で、いいところを見せるとかそういうのは全然関係なくて。それはメリットでもデメリットでもなんでもないんですが。メリットはやっぱり学生は大体一班 7、8 人いるんですけど、子どもは多い講座になると 30 人くらいになってしまって、学生が子どもを見る人数が多くなってしまうと、どうしても目が届かなくなってしまうところがあって、保護者の方が入ってもらって、学生の目の届かないところでケガをしたりっていうのの防止になるんじゃないかなと思います。で、デメリット。これは学生側が一番ちょっとイメージしてたんですけど、親を入れるとしゃしゃり出てきて口出しをして、自分たちが企画したように講座が進まないんじゃないか、それがデメリットだと思うんですが。それを非常に心配してたんですが、我々の場合そこらへんは非常に理解があったのか、それとも自分の作業に没頭していたのか知らないんですが、口出しはあまりうるさくなかったということで、それは非常に良かったと思います。で、何が言いたいかっていうと、保護者の方に事前にそういう意識付けを、あんまり口出ししないでくれっていう、脳で見ていてくれっていうぐらいの勢いで、そういう意識を最初から持っていれば保護者が入ってきてメリットの方が大きいと思います。で、学生側の意識なんですけれども、学生側の一番の目的っていうのは子どもとふれあうことです。こちらの資料にも書いてあるんですが、子どもとふれあうことを目的にこの授業、我々の場合授業なんですけど、やってきて、何で親とか小学校とかの対応とかにも気にしなくちゃいけないんだっていう不満も出てます。だからその点、実際に小学校とかの教師になった場合に、子どもだけの面倒を見ていればいいわけではなくて、親、保護者とか PTA、それから地域の方々との関係に非常につながりが必要になってくると思うんで、その辺を経験するには非常にいい機会だと思っています。以上です。

山田：はい、ありがとうございました。じゃあ…

岡部（信州大）：信州大学 2 年の岡部です。今、親を取り入れたプログラムに効果があるとかデメリットとか、そういう話で、私はそのイベントの目的によって微妙に違うことになると思います。そのイベントで家族とか子どもと大人との交流を目的として、スタッフはサブ主役、脇役的で、子どもと大人とのふれあいを重視したものであったら、親が参加したり地域の人が参加しているのはとてもいいことだと思います。でも、私と花村さんがさっき言ってくれた阿南の自然体験キャンプの 1 泊キャンプでは、不登校児の子どもと保護者と私たちスタッフでキャンプを行うんですけど、それは子どもの自立とか子ども同士の仲間関係を目的としているキャンプなんです。でもそこに親、保護者の方が入ってきてしまったことによって子どもが保護者にとっても頼りきってしまって、自分から何かに挑戦しようっていう勇気を出さなくなってしまうんです。親がいるとやっぱり頼ってしまったことがあって、スタッフが呼びかけてもお母さんの後ろに隠れてしまったり、子ども同士だったらしょうがないから友だちを作るしかないから一人で頑張れるところも、お母さんの陰に隠れて他の人との関わりを断ってしまって、チャンスを送るっていうことができってしまうんです。だから私たちが何かやる時に、保護者の方を参加させるか参加させないかは、まずそのイベントをやる目的をしっかりと立てて、スタッフと子どもの交流を目的にしたいのか、子どもと地域の人、親との交流を目的にしたいのかをよく考えてから、それが保護者の

方が参加することがメリットにもなるしデメリットにもなると思います。

山田：ありがとうございます。イベントによって、目的によって変わってくるという話が出ましたけど花村さんお願いします。

花村（信州大）：信州大学教育学部 1 年の花村です。桂子さんが言ったのと似たか寄ったかのことなんですけれど、私は阿南のキャンプで短期と長期とあって、短期は保護者も一緒、長期は子どもたちだけとスタッフという形のものをとっているので参加して、運営っていうのはやっぱり上の方がやってる、で、そこに 1 年として参加するという形。だから 1 年からの感想をちょっと言わせてもらおうと、短期では一人不登校の子に私は付きっきりだったんですよ。その子は親もいて、親も寝泊まりしてます。その時に子どもたちの中に全然入れないんですよ。親がいるから親と一緒に寝る。で、知り合いのいともいるから、いとこの親もいて、そのいとこと一緒にしか遊べない。だから子どもたちの中に輪に入っていけないし、自分から何かをやらうとしないんですよ。全て親が何かをしてくれるとか全て親のつながりになっちゃって、子どもたちの中に入ってくれないんです。その子が長期にも来て、さあどうするかな、と思って見ていたんですけど、でも始めは交わりたくない。逆に子ども、その騒いでる音がうるさいっていう、最初はそうだったんですけど、でも 5 泊 6 日っていう長い中で 1 日経ち、2 日経ってみると、中に入っていきたいっていうか、本当に自分から何かをしようとし始めるんですよ。だからそういうところに親が、保護者が入ってくるっていうのは、こういうキャンプ、その子の自立とか、勇気を出して自分から何かをしようと言うような、こっちがそういうことを意図でやってるときに親が入ってくるということに私はいない方がいいと思います。さっき桂子さんがおっしゃいましたけど、地域とかとつながりをもつときに保護者は多分入っていった方が、こういう信州だと土着というか地続きだからこういう教育参加もいっぱいできるわけで、本当にそういうところで地域とのつながりをもつ時には入っても別にいいと思います。しかし、阿南キャンプとか、不登校の子どもをどうやって自立させていくか、そういうところに親は要りません。はっきり言って。ただ、そういう子どもが例えば持病を持ってるとか、こういう癖があるとかそういうことは事前に聞いておけばよいことであって、キャンプの中で起こることは私たちの対処対処で、じゃあこの場はどうすればいいとか、その場で自分たちで考えていけることであるから、もうそれはいらないと私は思います。うまくまとまらなくてすいません。

山田：今、保護者の方もそういう体験の時にいたほうがいいのか、いないほうがいいのか、という話があったんですけども…どうぞ白井さんお願いします。

白井（信州大）：僕は第 7 期の Y O U サタで干し柿作りのスタッフをやったんですが、その干し柿作りに高校生の方とそのお母さんが来てて、一緒に干し柿を作ったんですけど、そこでいろいろ親と子の話を聞いてたら、こんなこと初めてやったねとかそういういろんな話が親と子の間で出来ててすごい良かったなと思ってんですよ。それで、何で親が来てよかったなと思ったかと言うと、家に帰った後も干し柿をつるしたのを見て、「いつ頃になったら食べられるのかな」とかそういう話が出来るんで、一回の Y O U サタでも、それが家族の中ではずっと続いていくというか、みんなで関心を持てることになるんじゃないかなって思って、親が参加した方がいいと思います。参加しなくてもいいっていう意見もありましたが、参加したらいいようなそういう行事もあるんじゃないかと思います。

山田：はい、ありがとうございます。

高山：先程の阿南のことにちょっと突っ込ませていただきたいんですけど、不登校にもいろいろありますよね。私の体験なんですけども、15、16 年前いじめと不登校経験しました。当時はいじめとか不登校とかが、かつては登校拒否とも言いましたが、まだ世にも出てなくて、それどころか一種の病気なんじゃないかって思われた時期もあって、かつて私もその立場だったんですが、そういう心情になった時っ

ていうのは、親にさえも拒否することがあります。私もそんな時期がありました。ですから他のお子さんと交わるっていうのが、確かにいい面もありますよ。いい面もありますけれども、その程度によってすごい恐怖になると思うんです。なぜならば、心の病んでる時に、おまえバカじゃない、何やってんの、って言われるその一言がナイフにもなればオノにもなる。という捉え方を私はさせてもらうんですけど、確かにそういう授業の中で、お父さんとお母さんが参加されていることの善し悪しっていうのは微妙なことであると思うんですが、不登校のことになってしまうと、その子の状況っていうのを事前につかんでおかないと、余計ひきこもってしまうことになりかねないと思うんです。ですからそのところを我々が目線を上からあててしまうのではなくて、いじめの対応にしても私個人的にはそうだと思うんですけど、同じ目線にたつ、気持ち的に同じ、常に下がる若しくは我々が下から彼らを見てあげないと、とんでもない結果を招いてしまう恐れがあると思うんで、その点はこれから私も学んでいかなければならないことですし、みなさんも学んでいかなければならないと思うんですけども、一つ心の片隅に置いていただければ幸いに思います。

山田：はい、ありがとうございました。

山本：今親の参加についての話をしていると思うんですが、どうも親の参加とかでは、自分が親の立場になってみないと分からないと思うんで、今実際に親の立場にある方々、教官の方々は子どもさんもしらっしゃって親の立場が分かると思うんで、もし自分が自分の子どもが学生が主催するイベントなり旅行なりに参加するにあたって、どんな感じなのか、やっぱりそんな年も小さい、まだ成長しきってない大人になりかけてないような学生たちに、子どもをあずけるのはやっぱり不安なのか、というところの意見をちょっと聞かせていただきたいんですが。

林部：私、現在2人孫がおります。小学2年と年長の男の子。田植え、稲刈りに参加した。地域の育成会の皆さん20人と学生の皆さん一緒に。やってみて感じたことは「土に親しむ」「農業に親しむ」ということ、親の参加は、企画の段階で「これは親と一緒に」「これは親と別」という風にやっていただくと思います。したがってこれから新たに1年間やっていかれると思いますが、その中では農業だけでなく色々やっていただきたいと思います。もう一つ農業について。学生の皆さんがどのように農業を体験するか。これは、ただ農業で物を作るというだけで専門というのではなく、幅広く知識をもたないとならないわけです。たとえば米一つ作るにしても、土壌を知らないとだめ、天気も、肥料も知らないと（窒素、リン酸、カリ）がどう働くのかという勉強もしなくてはできません。水も硬質、軟質がある。農薬も除草剤もあるし、殺虫剤もあり、これを知らないと米はできない。最近無農薬というのもよくあるが、これは病害虫が出たらどうするかという、鳥害をどういうふうにやっていくか、総合的に（ま、深くも無いですが）持っていないとできない。それぞれの専門分野は1つ根っことして持っていて、そのぐるわに1つの知識を持っていてやれば非常に子どもも喜んでくれるのではないかな。もう一つは、教える立場ではなくて、子どもが何を求めているか、子どもたちは何を求めて学校に来ているか、私たちは勤めていても感じたのだけれど説明も、小学生にもわかるように説明できるのが本当のプロです。私は思います。プロでない人は、大人に説明するのはある程度判断力がありますから、自分のものにしていきます。ところが小学生の低学年は人のまねをして覚えるのだから、是非、幅広く色々勉強していただきたい。それについては農業をやれば季節感、今、野菜がいつできるのか知らない人がいっぱいいる。温室栽培が増えてきて、自然の中でいつどうやって育つのかを知らない人がいっぱいいる。そういう面では農業の季節感、春夏秋冬の季節感を知るためにも、情操教育というかそういうものを自分が覚えながら、覚えたものを人に教えていく、体験したことは忘れない。知識で頭に勉強で覚えたものはなかなかすぐ忘れてしまうのが体で覚えたものは、怪我して、自分で怪我の体験をしたのは次

の怪我の無いことを覚える。それが説得力もあるものでして、私も学生の皆さんと色々新しい知識を教
えていただく。それが長生きの秘訣だというふうに思っておりますので、今後もよろしくお願いします。

山田：一般の方からのお話ありがとうございました。保護者の方々の参加というものにも目を向けてフ
レンドシップ事業をやっていかななくてはならないんだなあ実感しました。

農業の話が出たところで、上教大の妙高自然の家での体験や「まなびのひろば」のお話をお願いします。

5. フレンドシップ事業における自然体験

細井：僕は、ぶな林探検隊をやって、1つ子どもたちに伝えたい、ねらい、自然の中でおかしいな。な
んだらうな。というものを持って活動して欲しい。実際活動してみたら、これは何なの？って（答えら
れなかったけれど）木の実や、おもしろい形の葉っぱを持って来る子がいっぱいいました。自然の中で
子どもたちの好奇心を深めたことができた。これからの子どもたちの学び方というところにつながって
いけたらいいと思います。

伴：つけたしです。ぶな探検隊。彼らが担当したのですけれども、その他に、サバイバルキャンプ隊と
言って、森の中に子どもを連れて入って行って鉋で木を切ってくることから始めて、一晩で小屋を作る
んです。僕は、去年やったのですが、その前の大学の体験学習で鉋で足を切ったとたくさん血が出てきて
しまった。貧血になった。その経験から子どもたちが鉋を使うときにとても気を使った。足を切ってし
まう体験をしていなければそこまで注意しなかったかな、と思います。先ほど、子どもたちが少し怪我
してもつばつけておけば何とかなるっておっしゃられましたが、鉋だと足一本飛んでしまう恐ろしいも
のですから、まさに一緒にいかれている濁川先生に「すいません。子ども、足飛んじゃいました。」なん
て言おうものなら、ついでに先生の首まで飛んでしまうんで、子どもたちに注意するときには、「お兄さ
ん、首飛んじゃったー。」なんて言わないでよっていうことをいっつも言うんですけれども、このように
自分が体験したことを、子どもたち親がいないのだから余計にどうしても自分がやらなくてははいけない。
僕はどちらかというと、放任というわけではないが、何でも自分がやってあげるよって言ういいお兄さ
んではありません。自分でやりな。これは自分の家なんだから自分で作りな。それでもし、手伝って欲
しかったら呼んでくれって言い方をするんですが、全部が全部大人がいいって言うわけではないと
思う。縄の縛り方、草の刈り方、子どもたちなりに、いい屋根になる皮を取って来て、「これいいんじ
ゃない？」って僕の方が「ああ、これすごくいいね。」って、1つのサバイバルキャンプで自分の中で知
っている、この木を使ったらいいとかいう知識を伝えるだけでは、何も子どもたちに残らないと思うん
です。知識を伝えるだけでは、何も子どもたちに残らないと思うんです。知識を伝えるだけでは、何も子
どもたちに残らないと思うんです。子どもたちは、もってきた葉っぱを「これいいねー」なんてほめら
れたら、嬉しくてどんどん頑張っちゃうんじゃないか。自然の中で知識を教えるのではなくて、こんな
風にしたらという機会を与えるときで、自分達のほうから何も助けてくれないんだと分かったと、なんだ
かんだでやってしまうので、どうしてもこう、僕自身子どもたちから学ぶということがありました。キ
ャンプ行かれた方にもあると思うんですけど、2回も3回も行っていると、今度子どもたちをマニユ
アル化、こういう反応をしたらこういう対応したらいいというマニュアル化ができちゃうと思うんですよ、
そういうのを気を付けるためにも、子どもたちの動き、子どもたちがすることをよく見て自分自身も学
ぶという事が一番子どもたちへの反応としていいんじゃないかと思うのですが、皆さんどうでしょうか。

藤原：自然体験のことなんですけれども、ロケーション的に無理なところありません。本学ではまっ
たく自然がありません。周りを見渡せば国道一号線が走っており、電車が走ってて、近くにはすごく頼
りになる農家の方もおりません。なので、自然体験を聞いていて本当に羨ましく思いました。しかし、
ただ、実体験という面では、僕達は僕達なりにできる実体験をやっていけばいいのかなと思いました。

あと地域交流というのもあるのですが、これは学生がやりたいと志望している授業なので、小学校からの制約や子どもたち親たちとの連絡もあるのですが、本当に学生が自然体験をわざわざ横浜から鎌倉にまで行ってやりたいというのであれば、あれなのですが、全然自然の無いところで、あの自然体験は無理だと思います。逆にそれがバーチャルな世界になってしまう。子どもが自然体験をしたところで、じゃあそれを生かせる機会がいつ来るのかといえどUターンをするしかないと思います。なので、学生がまずその地域のことを考えるのだったら、地域で今何を子どもがしたいのかなっていうのをそれぞれの大学で、どこの大学がこれをやっているからじゃあうちでもこれを入れようというのでは、なかなか出来ないこと、又、まあシンポジウムで皆さんいろいろ熱がこもっていて、あれやろうとかこれやろうとか持ち帰っても、周りは割と冷ややかな目で見ていると思うんですね。ある程度客観的になって、自分達の大学で出来ることは何かなって考えた方がいいのかなとか、聞いていて思いました。

山本：先ほどの自然体験というのは、わくわくサタデーの方ではできないと思っているのですが、フレンドシップ活動Aというのが、わくわくサタデーで、AというからにはBもあって、Bというのは、そういう自然体験をボランティアの補助員っていう、そういうのに参加するプログラムも一応あります。けど、僕もフレンドシップBに参加してて、自然体験のほうには参加してないんですが、受講生の立場から見て、あんまり機能してなくて、その辺横国大の生徒はもったいないことしてるんじゃないかなって。先ほどの上教の話聞いてて、僕はわくわくサタデー班のメンバーとして水鉄砲をやったのですが、難しいんですね、水鉄砲竹で作るの。それで、今考えると、子どもたちは所々やっただけで、仕上げの重要な部分は全部僕がやったんですよ。子どもたちにとっては、失敗することもすごい経験になると思うんですよ。でも学生の立場があって、ある程度長い時間をかけて、わくわくサタデーの講座っていうのを企画してって、学制的には、絶対成功させたいんですよ。失敗もいい経験になると思うんですけど、計画してきた学生としてはどうしても成功させたい、満足して帰ってもらいたいからっていう気持ちが強くて、できなさそうなところはやってしまうんです。

那須：委員長ではなく、みんなと同じ立場で話します。自然体験のことについて皆さん話し合っていると、思うんですけど、さっき横国大の方が言われたように、やっぱり環境というのはでかいと思うんです。農業のほうも農地が無いとできないとか。でも私たちは学生で、大学のキャンパスを開放してやるっていう活動もあるし、いろいろと条件は違いますけど、僕が体験した中では、それをいろいろと応用して、学生の力でそれを变えることができたというのも多くあると思うんです。簡単に述べさせてもらって、僕は一年のころ教育参加で高遠少年自然の家にお世話になりました。そのときに、「冒険への旅立ち」というキャンプがあって、その後10月に高遠少年フェスティバルに、YOU遊サタデーとして派遣してもらい、高遠にしかない自然を十分利用してプログラムさせていただきました。それがもとになって、僕らも高遠の地で活動ができることになりました。それから、今年になって、牟礼のYOU遊サタデーをやったんですけど、牟礼は農業関係で、それほど山ではないんですけど、その土地を利用させていただきました。それから11月に山田さんがキャプテンのおもしろ学校探検隊という講座を、そのエッセンスが含まれているんですけど、山でしかできないことでも、ほかの場所でも応用できる。ほんの些細なことなんですけど、それを考えてみると、僕の個人的な意見としては、やっぱり大学生がやっていることに関しては、ほんとにプロの方とか関係機関の方の力を借りれば、そこにいかなくてはできないこともあるんですけど、何もそのオリジナルを追求するだけではなく、学生の身分として、それを応用力を学んでいくということが、このフレンドシップ事業の中にもあると思う。その応用力をつけていって、できる限りでやるっていうのも一つの道だと思うんです。YOU遊サタデーも、組織の方の関係もあって役割を果たしたということから、今年で終わることになったんですけど、また新しく考えて

いくプロジェクトというのも、要は小さくから始めるんですけど、私たちの場合は、信大では教育参加で、フレンドシップ事業として学んだことから結果的に応用力をつけて、それを発信していくという形になると思うので、環境がどうだからできないというよりか、こちらの力をつけた上で、自分たちで作った土壌をここで応用してみるっていう、これからのチャレンジの方向性としてはいいんじゃないかと僕は個人的に思います。

山田：ありがとうございます。今自然体験のことで話していただいたんですけども、今日、高遠少年自然の家の方がいらしているので、お話を伺いたいと思います。

上島先生（高遠少年自然の家）：まず、今日参加させていただいて、フレンドシップ事業というのは信大のことしか知らなかったのですが、各大学でこういう取り組みがあるのかと、大学生、高校生を持つ親の一人として非常に勉強させていただきました。さて、自然体験ですけれども、実は私も高校の教員で、後数ヶ月でまた高校のほうへ戻るのですが、この3年間派遣されてきて、高校の教員のときは自然体験なんてやったことがありませんでした。ほとんど生徒指導のことしかやってきませんでしたが、大変な生徒を抱えながら四苦八苦の毎日でした。この3年間、自然のある高遠少年自然の家に行って、本当に人間を変えてくれるんだなと思います。優しい気持ちになるし、1ヶ月もすると、本当に大らかな気持ちになる。そんな中で、子どもが変わっていく様子を見て、「この制度を取り入れれば、どんなによかったかなー」という風に今は思っています。今日は所長にどうしても来たいと言ったのは、委員長の那須君と、コーディネーターの山田さんのお二人が高遠でがんばってくれて、本当に助かったからです。成長していく二人を見て、うれしく思って、発言なんかしなくても、満足して帰っていくところなんですけど、内情を話しますと、先ほどの杉山さんと花村さんのように、高遠ではなく、県立の施設の事業のですね、長野県教育委員会もそうなんですけど、力を入れるというのはですね、不登校をテーマにした事業で、やっぱり自然の中だから変わっていくんだろうなという風に思います。県立の二つの施設がやらなければ、高遠もやりたいところなんですけども、そういった中でそれを希望した彼らはですね、それとは知らずに希望したかは分かりませんが、結果的にはものすごいものを得て、幸せだと思います。それから、私のところの事業に来てくれたお二人も、やはり8泊9日の間、子どもたちと自然の中で、けんかをしながら、泣かれながら、けんかをどう仲裁しようかと考えながら、一晩中眠れずにテントの中で過ごしたことも多分あると思います。やはり、そういった経験が子どもたちとのつながり、そして教えることの難しさ、強いては親の立場、先生の立場、そして自分を取り巻いてくれる、助けてくれる人々にたいする感謝の気持ちというふうに芽生えていくんだろうなと、このフレンドシップを通して、いい先生ができていけば、それにこしたことはないと思っています。とても長く話しましたが、やはり、自然のよさを本当に感じました。是非横国大の学生さんも、我々の施設には学生ボランティアというものがありますので、是非来ていただいて、自然を取り込んだ教育みたいな、自然の中で子どもたちをのびのび解放させながら、教育の一つの方法として取り入れていくようなことを是非考えていただきたいです。私もこの春から高校ですから、それがどう結びつくか、一つの課題ですけども、やってみたいと思います。是非皆さんも挑戦して、この自然のよさというものを子どもたちに植え付けながら教育して欲しいなと思います。意見のようだなんだかわかりませんが、お二人の活躍する姿を見せていただいてうれしかったです。ありがとうございます。

山田：ありがとうございます。自然体験と農業の話が出ましたので、JAの大木島さんお願いします。

6. 人と人がつながることを実体験から学ぶこと

大木島（JA長野中央会）：茂菅の田んぼを始めたのがちょうど昨年の9月ごろ。土井先生が何とか土地をとということで、私のところに来ていただきました。実を言うところまで来るのに何回も何回も挫折し

ました。そこを何とかこらえながら、どうしてもやりたいう気持ちの中で、ここまでこぎつけることができたんだろうと、こんな風に思っています。せっかく立ちましたんで、ちょっと他のことにも触れさせてもらいます。一番最初に話していた部分、組織をどういう風にしようかということ、実を言うと私たちの社会というのがまさにそうなんです。企業の活動なり、私たちの周りの生活、みんなそれで悩んでるんです。だから、それはここだけの話じゃなくて、実世界そのものだと思うのですから、どういう風にそのところを作っていくのかというのが、まさに自分たちが学ぶべきことだなという風に思いました。で、やはりそのところが、目的をどういう風にしてやるかっていうのを明確にするかが重要と、私たちの企業そのものも思ってるんですね。だから、もう一つ、今与えられた課題、子どもを持っていて、預けられるかっていったら、四年生以上なら十分に預けられるとおもいます。その中で、子どもたちが、自分たちで生きる力を持っていると思います。これは、ちょっとここから話が違ってしまいうんですけど、私たちが今思っているのは、教育をする教材作りとして、やはり植物というのはすばらしいんだなということです。例えば、山の中に種が落ちます。ほとんどは枯れてしまって芽が出ません。たまたま木が枯れて、そこに光が当たったところの芽だけが育ちます。それが自然界なんですね。でも、私たちの教育というのは違うんです。生まれてきた人たちをみんな育てるんです。だから、自然に手を加えることなんです。ちょうど私たちの農業も同じなんで、私たち百姓が、植物なり稲なりに手を加えて、実りを作っていくという仕事なんです。だから、手を出しすぎてもいけない、手を出さなくてもいけない。それは稲が育っていく過程で、小さい時大きい時、みんな違うと思うんですね。この辺のところは、まさに今こうして悩んでいる部分の、パーチャルではなく、本当に生きているものを扱う部分、本当に真剣じゃないと育たないというのが分かるんじゃないかということが出てくるんじゃないかと思ったんですね。で、私たちは植物を殺さなきゃいけないときがある。その為には刃物が必要なんですね。真剣勝負をしなきゃ生きていけないっていうのが、やはりそのところでだんだん子どもたちが分かってくるかなと思うんです。でも、赤ちゃんにはなかなか刃物は持たせられない。どこで子どもに刃物を待たせることができるかっていうことが、教育の真利だと思うんですね。いろいろ喋りましたが、いずれにしろ思ったことは、パーチャルな世界に対してどういう風にしなきゃいけないかということが教育の課題だということ。それは、現実に戻すことなんだろうと思いました。そういったときに、現実に戻す上で私たちが忘れがちなのは、やはり、人と人とがつながらなきゃ生きていけないっていうこと、機械文明であればあるほど、パソコンが大きくなればなるほど、人と人とが手を組まなきゃ仕事ができないって言う体制をどうしていくのか、ここのところが今、教育の中でも一番重要だし、先ほど佐島先生がおっしゃられた、やはり人と人とがつながらないと生きていけないっていうことを実体験から学んだ、そういう教育ができたならあと、ずっと初めから久しぶりに勉強させていただきながら、感じました。農業なり植物というのは、子どもたちが育つ上で一番いい教材なのかもしれない。大いに使っていただきたい、そういうふうに宣伝したいと思いますし、私たちJAとしても、大いに教材を提供したいと思っています。

山田：全体をまとめていただきどうもありがとうございました。今日は学生だけではなく、いろいろな方々の意見が聞けたと思います。私たちがこれからフレンドシップでやっていかなくてはならないこと、やっていきたいと思うことというのが、両方の視点からとらえられたと思います。自然体験にせよ、社会体験にせよ、やはりこれからの教育って、いろいろなものを含めながら、私たちは考えていかなくてはいけないと思います。私たちが大学生の立場でやれること、やっていかなければいけないことを皆さん考えて、各大学がフレンドシップ事業を進めていっていただければいいんじゃないかと、私は今日感じました。これでディスカッションを終わります。皆さん、ご協力ありがとうございました。

講評

鳴門教育大学助教授 近森憲助

発表の時に熊本大学の北崎さんが「いろんなことがあったけど、自分達が企画してやったことで子ども達が笑ってくれた」とおっしゃった。私がフレンドシップ事業に関わる最も大きな理由はここにあります。自分のした事を最初から最後まで見ていくという事が、このフレンドシップ事業では一番の要だと私は思っています。そのために、活動の場を確保するために自分は何をするべきかをいつも考えながら学生との距離をはかっている。しかし、活動を進めていくと様々な問題が出てきます。例えば昨年11年度には理科の中に生物、地学、化学の3分野がありまして、その担当の先生が「こんなこと起こったらどうする?」と結構聞きに来られる。その時に私が言ったことは二つあります。一つは、「何が起ころうとも失敗はありません。何かとってくればそれは失敗ではなくて成功なんです」ということ。もう一つは、「何が起ころうともこっちが引き受けるという覚悟でやるしかありません。ひょっとしたら首が飛ぶかもしれないという覚悟をしなくちゃいいものは貰えないんです」ということ。基本的に教育というものはリスクの大きいもので、自分の言った一言がその人の人生を変えてしまうかもしれない。いい方に行けばいいんですけど、「おまえがこういうことを言ったから俺の人生がめちゃくちゃになったんだ」といわれても責任は取れないわけです。そんな時に痛みというのを引き受ける覚悟があればまだ何とかなると腹をくくらせてくれたのがこのフレンドシップ事業なんです。

パネルディスカッションの時に花村さんがおっしゃったように、子どもとの関わりを如何に取るかというのはものすごく大変です。それと同じように、教官の方は如何に学生と距離を測るかということも大変なんです。そういうこと全部を悩んだり、腹をくくったと思ったり、何か起ころうたらどうしよう、首も飛んだらどうしようと思ったりします。そういうことを考えたり、今回のようなディスカッションで、ああでもないこうでもない議論すること、そのことを経験することそのこと自体がフレンドシップ事業の最大の意義だと私は思うんです。これはまさに大学における総合的な学習なんです。私たちも勉強させてもらっているし、学生も様々な意見を出し合って悩んだり怒ったり悲しんだりしている。そういう体験がフレンドシップ事業最大の魅力ではないかと思っています。土井先生が「濡れたわらの中に入れられた微々たる炭火にすぎない」と仰っておられましたが、今はもうその火がどんと燃え上がり、大きくなっているんじゃないかと思うんです。教官、学生、子ども達、地域の方々、誰が師になり誰が弟子になるかは分かりませんが、それぞれが師になり弟子になりながら、フレンドシップは進んでいって欲しい。まさに土井先生の仰る師弟同行ですが、これをスローガンにして、フレンドシップも総合的な学習の時間も進んでいけたらいいと思います。

これからも様々な形で活動が行われていくと思いますが、その中で全ての人々が心も体も良く動く体験をし、良く生きながら皆さんの間で幸いというものが生まれてくる、そういう事業として発展していけばという私の希望をもって講評に変えさせていただきます。

実践センター事業「評価シート」に関する調査書

事業名：フレンドシップ事業「全国学生シンポジウム」

実行日：平成12年12月9日

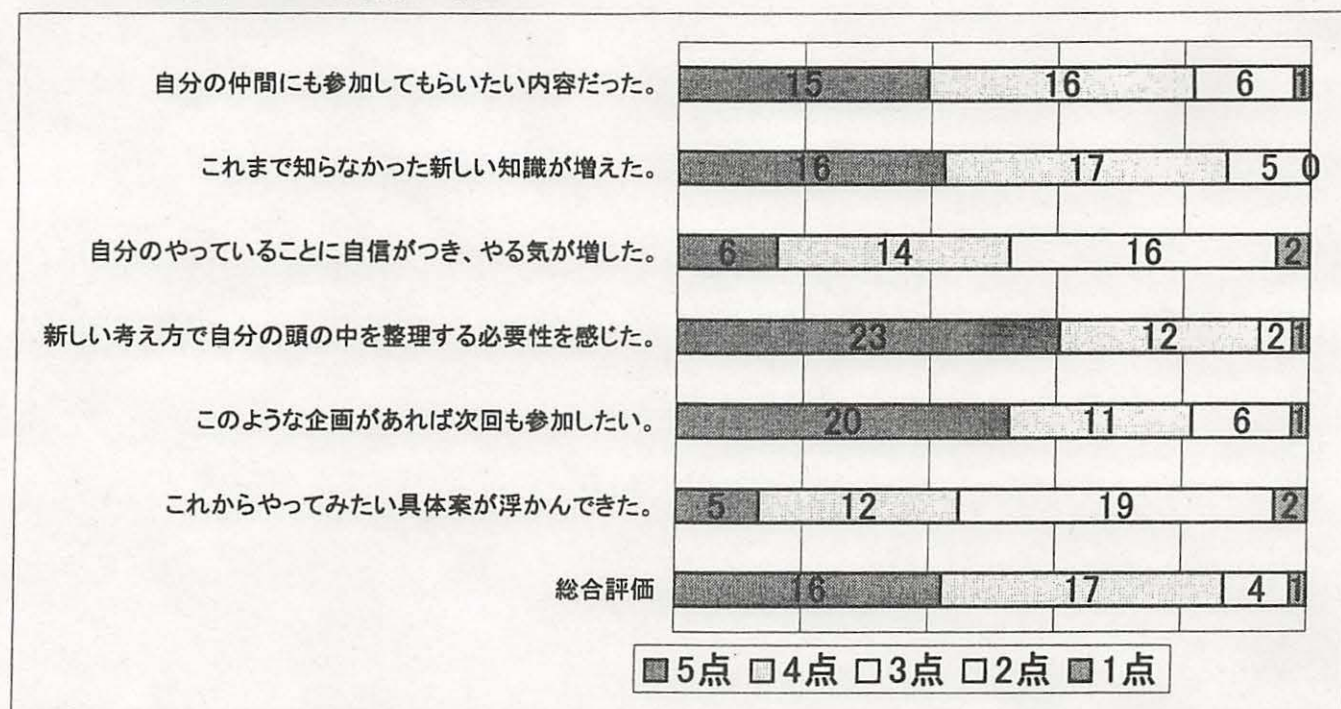
実行場所：信州大学教育学部

実行者：信州大学教育学部附属教育実践総合センター

実行方法：全国学生シンポジウムに参加した学生、教員等にアンケートに答えてもらった。

実行内容：今回のシンポジウムを5段階で評価する欄と、自由に書いてもらう欄を設けた。

アンケートの結果－五段階評価の欄より－



項目1から7までの結果から得られる考察

項目1：仲間にも聞いてもらいたかったという評価が多いことから、この会が成功したことがわかる。

また、参加者がもっと多くの人と話し合いたかったということも読み取れる。

項目2：他校のフレンドシップ事業の発表やシンポジウムでの意見が個々の刺激になったと読み取れる。

項目3：様々な課題が指摘され、それらの解決方が見い出されないまま終わったことが原因であろう。

項目4：多様な意見が出されたが、それらを自分なりに整理して今後活かそうとする姿勢が見える。

項目5：この会が成功した事と、まだ話し足りない人がいたことの二通りの見方ができる。

項目6：参加者の頭の中が整理されていなく、課題も多く残っていることが原因であろう。

項目7：総合評価は高くつけられた。このことから、有意義な会になったことが読み取れる。

	5点	4点	3点	2点	1点
自分の仲間にも参加してもらいたい内容だった。	15	16	6	0	1
これまで知らなかった新しい知識が増えた。	16	17	5	0	0
自分のやっていることに自信がつき、やる気が増した。	6	14	16	0	2
新しい考え方で自分の頭の中を整理する必要性を感じた。	23	12	2	0	1
このような企画があれば次回も参加したい。	20	11	6	0	1
これからやってみたい具体案が浮かんできた。	5	12	19	0	2
総合評価	16	17	4	0	1

文責 数学専攻3年 大場 浩幸

実践センター事業「評価シート」の項目8「自由投書欄のまとめ」

教諭・来賓の方々と JA の方々のご意見

- ・学生のきらきらとした目を見、教育もまだまだすてたものではないなと思いました。
- ・この実践的なフレンドシップ事業は、他大学との交流を通して、実戦的知性を共有できることで極めて意義深いものがある。
- ・悩み、迷いながらやっていくことが教師、今回のシンポジウムも関わっている人は悩み、考えていく姿勢を持っています。あきらめずつき進む気持ち、周りから学ぶありがたさを大切にして、明日からも温かい気持ちで子供に接したいなあと感じました。

学生の意見

- ・パネルディスカッションでは色々言いたいことがあったが、あまり発言できず、少々心残りがある。
- ・準備、運営について努力された全ての方々、本当にお疲れ様でした。自分の考えを見つめなおすきっかけとなっただけでなく、ものすごく感銘を受けた意見がたくさんありました。自分はまだ1年です。また、こんな素晴らしい機会があるのなら、どうかよろしくお願いします。フレンドシップ、がんばって行きましょう。
- ・様々な大学の考えが聞け、とてもうれしく思い、これからの進歩が楽しみになりました。
- ・各地域の先達のお話をお聴きする事ができ、大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。この種がさらに広がって多くの新たな芽が出されることを望みます。
- ・各大学の発表を聞き、課題改善方法や、また新たな課題も見つかった。パネルディスカッションでは、様々な立場の意見を聞くことができ、教育問題にまで発展できたことをうれしく思う。
- ・各大学の発表では、新しい知識やアイデア、又、各大学の取り組み方など本学に取り入れていきたいものをたくさん吸収できました。ディスカッションでは、フレンドシップ事業の枠を超えた問題にまで発展しました。本来フレンドシップ事業は、そういった経験や知識を得るためのものだと思いますので、大変有意義なものでした。
- ・他大学の方、また一般の方の意見も聞くことができ、非常に勉強になりました。貴重なお時間をどうもありがとうございました
- ・狭い考えじゃなく、広い視野で物事が見られるようになりました。企画を立てたり、準備をするのが大変でも、子供の笑顔のためにがんばりましょう。
- ・信大の皆さん、本当にお疲れ様でした。すごくやる気が出てきました。信大に負けないようにがんばります。ディスカッションで発言したかった。
- ・新たな案が頭をめぐっています。来年度を期待してください。
- ・YOU 遊サタデーが終わってしまうのは悲しいですが、それでもなお新しく何かを見つきたい、という目の輝きをもった他大学の人々一緒に学ぼうという姿勢に感動しました。
- ・心が痛くなるような話ばかりで、参加している価値がありました。パネルディスカッションは本当に時間が短くて残念でした。
- ・もっと広い視野を持って事業を展開するべきだ。何かに限定せずに。

- ・一言でフレンドシップ事業といっても、大学によって取り組み方や組織の構成、子供と接する場所が違うので、とても参考になりました。
- ・フレンドシップをする上で、僕は一番子供が大事だと思う。子供のニーズに合わせるためにみんなが手を取り合うことと、実践力をつけることが大切だと思った。
- ・ディスカッションで論点がずれたことがあった。
- ・学生は何かを盗むこと、応用です。
- ・世の中には色々な人がいる。物事を多面的に見ることが大切だと思う。
- ・来年、新しくがんばろうというやる気ができました。
- ・時間に関する認識が甘いと思う。再考の価値あり。
- ・このシンポジウムが、改めて自分の大学の事業に対して考える機会となった。
- ・上っ面の話だったら、僕は来たくなかった、と思っていましたが、今日の5時間半はきっと僕のこれから先の人生に大きな実を結んでくれるはずです。

「またシンポジウムが開かれるのなら是非参加したい」という意見が多く、そして改善しなければならない点も挙がったことから、今回よりも更によい話し合いの場を作っていこうという思いが感じられる。特に、パネルディスカッションの時間を多くして欲しいという要望があるため、時間の配分を熟考する必要があるだろう。

各大学との交流によって、実践例から得られる知識を共有でき、フレンドシップ事業の様々な可能性が示された事は大きな成果だ。新世紀のフレンドシップ事業の更なる発展を期待する。

文責 数学専攻3年 大場 浩幸



【第21回信大YOU遊サタデー 図書館2階での閉会式】

シンポジウム実行委員長

那須 良寛（教育実践科学専攻4年）

第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウムは、全国各地から4大学（上越教育大学、横浜国立大学、鳴門教育大学、熊本大学）の学生の参加と、信州大学の活動を支援してくださっている各関係機関の方々の参加、また一般公募の参加により行われました。

前回、第1回の全国学生シンポジウムと比較すると、参加大学数は減少しているかもしれませんが、フレンドシップ事業に特に意欲的に取り組んでいる学生達が集まったと感じています。

今回のテーマには、『21世紀の実践に向けて—フレンドシップ事業の課題と発展—』をあげました。私たち、信州大学の「信大YOU遊サタデー」の活動が閉幕することを機に、新たな活動を進めていくための指針をこの場で得ようという思いや、各大学のこれまでの活動の中での問題点や特徴的な点などを知り、より良い活動を目指すために皆で議論を行う事が目的でした。

各大学に実践報告を行っていただき、この活動の概要を踏まえた上でパネルディスカッションへと突入しました。ディスカッションのテーマは『フレンドシップ事業での自然体験や社会体験から私たちが学んだこと』で、主にフレンドシップ事業について根本を問い掛けるような話から、自分達の活動の思いなどが述べられていきました。

今回特に目立った点は、学生の意欲がフレンドシップの活動の制約に押さえ込まれて、活動に支障をきたしているということでした。私たちの「信大YOU遊サタデー」も授業科目ではないのに、ここまで支えられてきたことには大変な苦勞があったと思われます。このような事を他大学の学生同士が話し合えるということに価値があり、また話し合いの中から新たな考えが見出していけることも大切だと感じました。

また、一般参加の方や、関係機関の方々からも多くの意見をいただきました。私たち学生に対し、本気の言葉が投げかけられたことも普段は考えられないことで大変意味のあることであったと思います。

この多くの言葉や気持ちが、私たち学生の新たな世代に向けての活動の『起爆剤』となったことは言うまでもありません。

今回私は、実行委員長という大役を任されることとなりましたが、本当に十分に役目を果たしたとは言えないかもしれません。しかし、私のフレンドシップ事業に対する思い、学生の気持ちをこのシンポジウムで思い切りぶつける事ができたと考えています。それは何よりも、私たち実行委員会のメンバーや、ゲストとして参加していただいた他大学の学生達もそう感じてくれたことにあると思います。

「気持ちが一つになった」と言い切るには及びませんが、『みんなの気持ちが近づいた』シンポジウムであったのではないかと思います。これからもより一層、自分達の活動に切磋琢磨しながら躍進できると思います。

最後に今回のシンポジウムに参加して下さった全ての皆さんにあつくお礼を申し上げます。ありがとうございました。またいつか、学生のための意味のあるシンポジウムが行われることを祈ります。

副実行委員長・議事進行・会場

小池 悠介（国語3年）

いろいろと得るものが大きかったように思います。他大学の学生と話をした中で、今まで自分には見えていなかった部分や再確認する必要がある部分などを見ることができ、いい刺激になりました。また、シンポジウムを運営していく過程の中でも、何に注意しなければならないのか、何をしておかなければならないのか、何が必要なのか、そういったことも学ぶことができ、社会勉強と言う程ではないかも知れないが、ためになった。シンポジウム本番では議事進行役だったので、実践報告やディスカッションの時に発言できなかったのが残念だが、茶話会などの折に自分これからのことや、今行き詰まっている問題に関する意見交換、おかれている環境の違う同年代の学生としての考え方など、会うのはその日が初めてのような仲なのに、今まで友人立ったような気になるほど話が弾み、親交が深められたのが非常に嬉しかった。現時点では私事に終わってフレンドシップの活動にあまり参加できていないけれども、今回のような活動に触れ、機会があればフレンドシップの活動をずっと続けられればと思う。

ここからは、どんな仕事があったのか、どんな反省があるのかを書こうと思います。

私の肩書きはいろいろあるけれど、要するに雑用です。反省点はたくさんあります。次に繋がるようにこれから書く反省点や仕事内容などを生かしていってもらえたらと思います。

○副実行委員長

これはまさに雑用。委員長の補佐をするのが基本だけど、あまり委員長の役には立っていませんでした。当日までのスケジュール調整、マイクや水差しプレゼン用機材など必要備品のチェック、茶話会などのセッティング、委員会運営時の文書作成、名簿作成、当日の資料原本作成などがほとんど。当日のプログラム作成、他大学との発表原稿などについての情報交換や関係機関との連絡の取り合いなどももっとするべきだったけどあまりできなかった。残念。活動開始は月単位で早いほうがいい。後は、シンポジウムの委員をもっと集める必要があった。人が足りなさ過ぎて委員のみんなに大変苦勞をかけてしまった。前日迄声を掛けているんな人に手伝ってもらったけれど、余裕を持って運営していくためにも委員はたくさんいたほうがいい。

○議事進行

公の場なので、会進行時の台詞・発言などをもっと考えておかなければいけなかった。途中何度かおかしいところがあり、きちっとしなかった部分が悔やまれる。大変だったのは実践報告の時の発表時間の扱い方。質問や報告内容などで時間が押してしまうので、時間経過を知らせるベルをどの様に活用すればよいのか考えておくべき。

○会場

やることは場所の確保と使用可能機材の確認・準備、会場設営。どんなセッティングをしたからシンポジウムに参加して下さった方々が気持ちよく発表できたり意見を交わしたり耳を傾けたりできるのか、そんなことを重点的に考える。大変なのは設営のための人集め。今回は図書館F2だったので、会場設営はとても大掛かりになって、大変だった。

コーディネーター

山田 理恵（教育実践科学4年）

今回コーディネーターとして、パネルディスカッションの準備と計画を立てさせていただきました。シンポジウム自体、初めての経験であったので、手探り状態の中、自分自身で仕事を考えて進めていきました。事前準備と言ったものはほとんどなくとにかく集まってきた原稿を読み、各大学がどのような活動をし、どのような課題や問題点を持っているのかを頭の中で整理しておくことから始めました。皆が働きまわっている間、一人で原稿を読み込んでいるのが少し孤立した感じがしましたが、当日勝負の役割でしたので万全の態勢で臨む準備をしていました。今回第2回学生シンポジウムということで、「前回で各大学の状況はわかっているし今回は、今の状況や考えを本音でぶつけ合い、良いディスカッションにしていこう」と事前顔合わせが一部の大学の方々とできたことが、ディスカッションがよりよいものになった一番の要因だったと思います。私自身今回のディスカッションはテーマがあるものの、フリートークの形をとり、コーディネーターがあまり途中で方向を修正することなく、皆さんの本音が聞きたいと言う願いを持っていましたので、今現在の学生の厚い気持ち、教授の方、一般参加の方々から見た学生に対する気持ちをぶつけ合えるように会場全体の参加を求めて司会して行くことに決めました。

当日、各大学の実践報告を聞きながら最終のメモを作り、どの大学から話を振っていくかなどを休み時間などの間にまとめ本番に臨みました。テーマが自然体験でしたので、自然体験の活動を行っている大学から話が進みました。最初はこちらが意見を求めましたが、前日の声かけの成果もあり、皆さん進んで意見や考えを述べてくれました。自分で思っていたより、パネラーだけではなく学生や一般参加の方々も積極的な参加をしていただき、時間があっという間に過ぎていきました。うまくまとめられず、意見を言いたかったけど言うことができなかった方が多くいたことが今でも反省点として残っています。そして話が流れからずれそうになったときやつまってしまったとき、必死に助けてくれた仲間にすごく感謝し、感動しました。一緒に何かを作り上げていく仲間の大切さ心強さをひしひしと感じました。

今回の話し合いで何か結果が出たわけではありません。しかし会場に残っていたあの熱い思いや雰囲気味わえ、全国に仲間たち、何かをやろうと頑張っている人たちがいることを実感できたことが一番の収穫ではないでしょうか。そして狭い範囲ではあるかもしれませんが、一般の方々にもこんなに頑張っている学生がいるんだと言うことが示せたのではないのでしょうか。私自身係りとしての反省点はたくさんありますが、人生に一度しかできない大切な経験をさせてもらいました。あの会場で一日過ごし語れたことだけでも本当の勉強になった気がします。最後に協力してくださった、スタッフの皆さん、各大学の参加者、教授、一般参加の方々本当にありがとうございました。

発表係

中村 祐介 (理科4年)

1. 仕事内容

- ①実践報告の原稿・資料作成
- ②発表の準備
- ③当日の発表

2. 発表の感想と反省

発表をする際に私が一番心がけていることは「聞いてくれている人たちにわかりやすい発表をする」ということである。聞いてくれている人たちがわからなければ、発表しても意味がない。はたして、私の発表は聞いてくれている人たちにとってわかりやすかっただろうか。たぶん、私が思うにわかりにくかったのではないかと感じる。それはなぜかという、発表するにあたって準備が足らず、また、私自身がYOUサタについてよくわかっていなかったからだ。教育実習で授業を行った時に自分が納得できるまで教材研究を行って準備をした授業というのは、自分に自信を持つことができ、そして自分の授業に自信を持って授業を行うことができた。自分の授業に自信を持つことができるということは、自分に余裕を持って授業を行うことができる。逆に自信がない時は自分に余裕がなく、自信のなさが言葉の端々にどうしても出てしまうものである。発表にも同じことがいえる。だから、聞いてくれている人たちにとってわかりやすい発表をするためには、自分の発表に自信を持つことが大切であると感じた。そのために、自分が納得できるまで準備をしなければならなかったと感じた。今回の発表において学んだことを今後に活かしていきたいと思う。

3. シンポジウムに参加しての感想

今回のシンポジウムに参加して強く感じたことがある。それは何かというと、このようなシンポジウムを行うことの意義についてである。私が考えるシンポジウムの意義は、フレンドシップ活動を行っている学生や先生方の生の声を聞くことができるということである。現代はとても便利になり、インターネットでその活動のホームページにアクセスすれば、大体の情報は入手することができる。しかし、活動している人たちの生の声は聞くことはできない。だから、このようにシンポジウムを行い生の声を聞くことで、その活動がリアルに伝わってくる。理科の授業においても、言葉だけで事象を説明するのと、その事象を実際に目で確認するのとでは、リアリティが全然違うし、子どもたちが感じることも全然違う。ここにこのシンポジウムを行う意義があるのだと私は強く感じた。

4. 最後に

私が、今回のシンポジウムを通して数々のことを学び経験できたのも、那須実行委員長をはじめとする実行委員会の皆さんのおかげだと思います。また、発表の準備においては、同専攻の加藤豊司君にとってもお世話になりました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

発表

花村 尚美（理数科学1年）

発表は、教育参加での体験の感想を言うということでした。体験でうまく言葉に表せないほどのものを得ても、それを確実に伝えるのは難しく、スライドの準備や説明が不十分だった気がしました。また、私の体験は『教育参加』という授業の一環の中で、あらかじめ決まっている内容のプログラムを選択し、参加させて頂いたという形の上での体験であり、自分自身で企画・運営したものではありませんでした。そのため、報告会で他の方々の発表を聞きながら、私は企画・運営する側の苦難が余り実感できなく、成功したときに味わう喜びも半分以下のような気がしました。と同時に、自分が企画・運営に関わってみたいという思いがいつそう強くなりました。

先日、国立信州高等少年自然の家で行われた主催授業に、教育参加として参加してきました。1日目の夜行われた親子レクで、私は1つのゲームの司会をやらせて頂きました。自分が考えたものではありませんでしたが、このゲームで説明するということがどんなに難しいか思い知らされました。ゲームの説明はポイントを過不足なく伝え、簡潔にし、その上で、自分も楽しんでやろうというわけです。私は、まだうまくできませんでしたが、とてもよい経験をしたと思います。

教育参加やこのシンポジウムを通じて、私はまだ視野が狭いと実感しました。子どもたちと接するとき私は自分の知識が先行してしまい、子どもたちに想像させたり、考えるように導くことができませんでした。また、自分の役割や仕事をやっているとき夢中になり、子供達の把握をおろそかにしてしまうことが何回かありました。もっと子供たちのことを第一に考えて行動などをし、より幅広い視野をもたなければならないと思いました。

シンポジウムで考えさせられたことを忘れることなく、いろいろな事に興味を持ち、挑戦していきたいと思います。そして、人と人の出会い、一期一会、を大切にしていきたいです。



接待係

鹿子木 愛（教育実践科学2年）

1. 係の仕事内容

- ・参加大学の交通手段、到着時間、宿泊人数の確認
- ・接待係全員のタイムテーブル作り
- ・参加大学の送迎
- ・参加者と市内観光
- ・前日と当日の夜の茶話会準備
- ・当日、参加者の誘導
- ・当日、参加者・先生方へお茶出し
- ・会場内にお茶コーナーの準備

2. 接待係としての反省・感想

- ・参加者との連絡が不十分で、接待係が長野駅に迎えに行ったが駅で会えないということが起こった。
- ・参加者を駅まで迎えに行く時に使う看板を事前に準備しておけば良かった。（お互い初対面なので）
- ・翌日の早朝、善光寺に行った。朝の善光寺はすがすがしく、参加大学の人達もとても喜んでくれて嬉しかった。
- ・当日のお茶出しは、しっかりできた。

3. シンポジウムに参加しての感想

シンポジウムに参加したことは、自分にとって大きなプラスになったと思う。

各大学の実践報告やパネルディスカッションでは多くの人の考えを知ることができたし、夜の食事会や茶話会では他大学の人といろいろな話ができた。子どもと接する中での悩み、何か行事を企画した時に起こる問題点など、私自身が普段から悩み、考えていたことと同じような事をみんなも悩み、考えているということがわかった。私はとても安心した。自分だけが悩んでいるのではなかった。みんなも同じように悩み、良い方法を見つけ出そうと苦労している。見つけ出した結果より、自分で苦労しながら考えるという過程が大切で、それが自分の力になるのだと思う。この過程の中では、人の考えを聞き、それを参考にするということがあっても良い。むしろその方が良いと思う。だから、今回のような意見交換の場としてのシンポジウムはとても貴重なものだった。

今回、他大学の人と話をしたことでもますますやる気が出てきた。シンポジウムで学んだことを、今後の自分達の活動に生かせるように頑張っていきたい。

受付・案内

林 美智子 (教育実践科学2年)

1. 係の仕事内容

準備

- ・参加者の名札作成
- ・宿泊者受付名簿、当日参加者受付名簿の作成
- ・宿泊費等の領収書作成
- ・しなのき会館の下見
- ・当日の仕事のマニュアル作成
- ・案内板の作成

シンポジウム前日、当日、翌日

- ・宿泊受付 (カードキーの説明、しなのき会館利用案内、宿泊費等の諸経費徴収)
- ・お茶出しの準備
- ・しなのき会館の鍵の管理
- ・当日参加者会場受付
(発表者、一般参加者、信大参加者のシンポジウム会場での受付・資料配布)
- ・宿泊者のお見送り
- ・忘れ物確認
- ・部屋の掃除・片付け

2. 反省・感想

受付・案内係としてシンポジウム前から当日、翌日と仕事をしてきました。「受付・案内」ということで当日の仕事だけが大変なのだろうと初めは考えていましたが、事前の準備が予想以上に多く重要であったと思われます。また、しなのき会館の管理も宿泊者がより気持ち良く過ごせるようにするための気づかいはとても大切なことでした。仕事内容は全体的に目立たないところでコツコツと、というものが多く苦労した点もありましたがこういった活動がシンポジウムの成功にも貢献できたのではないかという気持ちにもなることができ、とてもやりがいのある係活動であったと思います。

唯一残念だったことは、当日、受付の仕事をしていたため他大学の発表を聞いたりディスカッションに参加したりすることがほとんどできなかったということです。しかし、わずかに見ることでできた発表やディスカッションから強く感じるがありました。それは、私たちは普段、他の世代の人や他の環境・地域にいる人など外からの生の声を聞くことが本当に少ないということ、そしてそういった声を積極的に聞こうという意識が低いということです。だからこそ、今回シンポジウムで様々な人の話を聞いたり、語り合ったことはとても刺激的で貴重な時間となりました。

YOUサタは今年度で閉幕してしまいましたが、YOUサタでしてきたことやシンポジウムなどの活動を生かし、人と人との関わり大切さ、良さを感じていけるような活動を増やしていきたいです。

書係を終えて

小黒 あかり（教育実践科学専攻2年）

1. 仕事の内容

以下のものを当日までに筆書きした。（当日シンポジウム会場内に設置された。）

- ・シンポジウムのテーマ、シンポジウムのプログラム、パネリスト名とその大学名

2. 書係の反省

私は習字が好きなのであまり深く考えずにこの係を引き受けてしまいました。しかし、書の仕事は思っていた以上に時間がかかり大変でした。

これまでは使ったことのない大きな筆で（半紙ではなく）模造紙に書くので慣れるのに時間がかかるということを全く考えていず、慣れていないまま書くことになってしまいました。また、字の大きさをそろえるためには鉛筆で字を書く位置に印を付けておくべきだったのですが時間がなくてできず、会場に設置したとき、ずれているのが気になりました。もっと前もって準備をはじめるべきだったというのが一番の反省です。

反省点は多々ありますが、自分の書いた字が会場じゅうに貼られたのを見たときは、何だかうれしくて片付けのときに写真まで撮ってしまいました。良い経験になりました。

3. 接待係の反省

接待としての私の仕事は前日に到着した他大学の人を駅まで迎えに行き、一緒に観光に行ったり、夕食を食べに行ったりするというものです。準備はバッチリ！…だと思っていたのですが、当日に確認をとってみると…車がない！慌てていろんな人をお願いしたところ、シンポジウムには関わっていないクラスメイトが二人協力してくれました。瑞恵、涼子、本当にありがとう！実はトラブルはこれだけではありません。行く場所についてはいくつかの案を考え、地図も用意していたのですが、その道順を調べていなかったため温泉に行く途中で迷子になってしまい、結局近くの大きな銭湯“ぶらっと”へ行くことになりました。熊本大、鳴門教育大のみなさん、とんだ歓迎になってしまいすみませんでした。それにも関わらず怒らずに優しくふるまってくださって本当にありがとうございました！

いろんな人に迷惑をかけましたが、接待の仕事をしていたおかげで他大学の人とも早いうちに親しくなれ、いろんな話ができて本当に楽しかったです。

4. シンポジウムに参加して

シンポジウムは予想以上に面白く価値のあるものでした。日本各地でのいろんな活動を知れたこと、パネルディスカッションでの熱いトーク…。そして何より多くの人と出会えたことが何よりもうれしかったです。

夜の交流会での一言がきっかけで、3月には参加した5大学による鳴門での地引き網が実現します。自分から動き出せば何でもできてしまう、初めからできないと決めてしまうのではなく動き出すことが大切だと実感することができました。このシンポジウムで得たさまざまなことをこれから始まる“YOU 遊プラザ”につなげていこうと思います。

記録係

西澤 俊輔（理数科学教育2年）

記録係では前日までの仕事としては、記録機材の借用、その機材を会場のどこに設置するかを会場係と協力しながら決める事です。まず、今回のシンポジウムでは、テープレコーダーを3代、ビデオカメラを1台、デジカメをとアナログカメラを1台ずつ用意しました。その中で、ビデオカメラは発表者の前に三脚を使って設置し、各カメラは責任者を決めてその人にとってもらいました。困ったのはテープレコーダーでした。使用した部屋が、スピーカーがすべて天井近くの上の方にあり、スピーカーの近くでは録音できませんでした。リハーサルの時には周りが静かだった事もあり、それなりに上手く録音されていたのですが、当日は人も多くざわつきがどうしても放ってしまい、テーブルでは上手く聞き取れないところが出てしまいました。スピーカーをはじめ、会場の設備をしっかりと把握しておく事の大切さを思い知らされました。

当日の仕事は各発表をいかに上手く記録するかということです。当日、実際に発表が始まればこちらが予想もしていなかった事態はいくらでも起きます。今回のことで例を挙げれば、発表者は資料をうつすビッグモニターの前にはらずで、両方がうつせるようにビデオカメラを用意しても、発表者台から色々移動しながら話す人も多く、あっちを映したりこっちを映したりとまとまりの無い映像になってしまうなんて事もあります。また、用意しておいた機材の調子が突然悪くなって動かなくなることもありました。そのような時に、いかに臨機応変に対応するかが重要です。発表者中心で撮るのか、資料を撮るのか、その場その場での判断も要求されることもあります。

今回もうひとつ大変なことがありました。それはスタッフ不足です。この記録係においては世紀のスタッフが2人しか居らず、ほかの係りと兼任なんて当たり前の状態でした。そのせいもあって、みんなかなり急がしそうで、どたばたしながらもたくさんの仕事をこなすのはとても大変だったと思います。

また、私自身の反省としては、記録の長をやることが決まってからの活動への取り掛かりが遅かったと思います。機材の借用や、会場における設置場所の決定など、早め早めに動いていかなくてはいけないことをぎりぎりまでやらなかったり、自分が責任を持ってやるべきことをやらないせいで、とても多くの人に迷惑をかけてしまいました。ですが、大勢のスタッフに助けられて何とか今回のシンポジウムを終了することができ、大変うれしく思います。

また、今回の活動ではこの信州大学内や、他大学にたくさんの新しい友達もできました。これからこの仲間たちとはさまざまな活動を通してつながっていったらと思っています。

最後に、ある種暴露話になりますが、この編集作業というものは、今までだったら記録係がやるべきだったらしいのですが、諸々の事情により人に任せてしまいました。やはりこの辺など、自分の力不足を感じます。もっとうまく行動できるようになりたいと思います。協力してくださった方々、本当にありがとうございました。おかげでとても楽しむことができました。

会計係

相磯 素子 (幼児教育専攻 3年)

1. 係の仕事内容

- ・ 各係に見積りを立ててもらい、前金を渡す (買出しは各係ごとに行う)
- ・ シンポジウム当日の弁当発注
- ・ シンポジウム当日の受け付け手伝い
- ・ 夕食会の集金
- ・ 各係の収支をまとめる

2. シンポジウムを終えての感想

運営側の立場を経験するのは、私は今回のシンポジウムが初めてでした。慣れないことが多く、土井先生を始めたくさんの方々に助言や励ましの言葉などをかけていただき、無事に係の仕事を終えることができたと思います。

事前準備からシンポジウム当日、その後のまとめまで含めてもあっという間に終わってしまったように感じますが、その中でも今回のシンポジウムを振り返ってみて、学んだ点を2つ挙げたいと思います。まず1つ目は各係に見積りを出してもらった時点で、その代金を事前に渡しておくということです。各係で買出しに行ってもらう際に、個人でその代金を立て替えるとなると負担が大きくなってしまう、という配慮からでした。このことに、私は最初気付かず、土井先生からご指摘を受けました。些細なことのように思いますが、実際にその場で動いてみなければ分からないこと、気付かないことはたくさんあるものです。そして、こういうことを知って初めて相手への気遣いができるようになるのだということを、経験を通して学ぶことができました。

2つ目に、各係の連携のすばらしさがありました。準備段階から人手が足りない、とずっと言われていましたが、「人手が足りないからできない」ではなく「人手が足りない中でも何とかしよう」とする努力が至る所で見受けられました。各係の枠を越えた協力体制や、当日のシンポジウムには出席できないけれど他大学からの参加者のための朝食作りはぜひやらせてほしいという姿など、シンポジウムに向けてみんなの意識が1つになっていたからこそ成し遂げられたことだと思います。組織は小さいものの、それだからこそみんなで作り上げよう、という意識につながり、各係の連携も上手くいったのではないかと思います。また、この協力体制がその場になってばたばたと行われたのではなく、事前に時間表などを作り計画的に行われていたのも成功の要因であると思います。誰がどの時間に空いているかなど係ごとで調整しつつ、準備段階から連絡を密に取っていました。当日はそれでもあたふたとしてしまう場面がいくつかありましたが、互いに協力し合いシンポジウムを無事終えることができ本当に良かったと思います。

そして私もまた、この会を支える1本の柱になっていたのかと思うととても光栄です。このような機会を下さった全ての方々に感謝します。

Cooking 隊

桑山 知美 (家庭科3年)

私たちは当日に集中講義があったために、ディスカッションに参加することはできませんでしたが、クッキング隊として裏方でお手伝いをさせていただきました。他大学から来て下さった方々のために、「栄養満点で美味しくてみんなに喜んでもらえるような朝食」をつくろうとがんばりました(とは言っても私の場合、ほとんど趣味に走っていましたが...)。9日の朝食は「ご飯、豆腐とわかめのみそ汁、トマト・じゃこ・わかめのサラダ、ハムエッグ、にんじんのグラッセ」を、10日目の朝食は「ご飯、みそ汁、カボチャの煮物、筑前煮、ひじきの炒り煮」を作りました。2日目の朝は前夜の茶話会で飲み過ぎてしまい、胃もたれが...という方のためにお茶漬けやおにぎりも用意しました。

2日間とも朝早く起きて朝食の準備をしました。朝早く起きるのは大変でしたが、食事作りはとても楽しかったです。鼻歌混じりのるるん気分で作らせていただきました。私たちが作った食事を、大勢の方々が美味しいと言って下さり喜んで下さいました。「美味しくてつまみ食い止まらなかった。」と、夜中に煮物を皆でつまみ食いをした事実も聞きました。あんなに喜んでもらえると思いきやしなかったのが本当にうれしくて、「ありがとう。」といって下さる皆さんに、逆に私たちからお礼を述べたく、感謝の気持ちでいっぱいでした。

清水 さやか (英語科3年)

今回私は初めてクッキング隊のお手伝いをさせていただきました。打ち合わせには一度しか参加できなかったのですが、メンバーの方が参加者の場所移動の誘導や、お茶の準備など、細かいところまで打ち合わせをし、それぞれ役ごとに計画的に活動している姿に感心させられました。

発表を聞いたり、食事会に参加したりできなかったため、本当に食事を作るだけという形でしか参加できませんでした。しかしお話する機会があまりなかった他大学の皆さんにも、「ありがとう。おいしかったよ。」などと声をかけていただいて本当に嬉しかったですし、朝早くでも来て良かったな。と思いました。大きな鍋で大人数分の料理を作るのは初めてで、それだけでも新鮮でしたし、桑山さんと「給食のおばさんはこれよりももっと多い量を毎日作っているんだよね。」などと、お話をしながら楽しく料理をすることができたのです。1人で作るよりも、2人で作った方が楽しいし、自分一人のために作るよりも召し上がってくださる方たちのために作った方がずっと嬉しいな。と感じました。

食べる方の「ありがとう」の言葉に喜びを感じる。些細なことだけれども、何だか心がポッと温まる思いがする一時でした。

加藤 豊司 (理科4年)

信大YOU遊サタデーの実践報告を補助した立場で反省を述べると、発表することがたくさんありすぎて、ポイントを絞ることができなかつたように思えます。もっと伝えたいことを強調すべきでした。また、発表者の中村には、発表原稿の作成が遅れ、発表練習の機会が少なくなつてしまつた点から、余裕ある計画を立てて取り組むべきだと思ひました。

次に、シンポジウム全体を通して人それぞれの意見を聞き、それから、自分自信の考えを見つめなおすことができたと感じました。例えば今回、子どものけがを心配しすぎていて、それが過保護や、子ども自身の成長に影響を与えるという意見がでました。第7期信大YOU遊サタデーでは、病人、けが人が発生したときに、どのような処置を行えばよいのか、前日準備などを通して全員が把握するようにし、また、病院や本部の電話番号をスタッフマニュアル「心とともに」に掲載するなど、緊急時の対応について見直しを行いました。私は、それを行つたことに自信を持っていました。しかし、けがに敏感になりすぎているという意見を聞いたとき、そうかもしれない、と一瞬思ひました。が、本当にそうなのかと考へました。確かに、けがをすることで成長することもあります。しかし、けがは小さなものだけではなく、大きなものになつてしまつては、取り返しがつきません。当日、楽しく過ごすには、念には念を入れて安全対策に取り組むべきだという自分自信の結論にたどりつきました。相手の意見を聞き、それを取り入れ考へなおすことが重要だと改めて思ひました。そのことができる場の一つとして、シンポジウムは重要だと思ひます。

梅田 亜紀子 (社会科学教育2年)

私は今回初めて、フレンドシップ事業のシンポジウムに参加した。初参加にも関わらず、受付係をやることになつた。係をやることになつたのはいいが、私は肝心なことに気付いていなかった。受付係はシンポジウムの最中は、シンポジウムでの話を聴けないのだ。なぜなら、受付をしているからだ。私の性格上、物事の先を読んで行動することが出来ないせいか、シンポジウムが始まつてからそのことに気が付いた。もう、「時既に遅し」であつた。しかし、受付係を放棄するわけにはいかない。「寒いねえー」とか友達と言ひながら、時々耳に入ってくるシンポジウムの話を聴いていた。(実際は、交代制でやつていた為、とばしとばし話を聴くことが出来たが。)

シンポジウム前日の準備も何かと大変であつた。シンポジウム当日に参加される人に飲んでもらうお茶やコーヒーの準備、他大学が宿泊するしなのき会館の準備など、受付係は当日の仕事が多いかと思ひきや、前日の方が忙しかつたように思ふ。係の仕事をしていく中で、シンポジウムという華やかな舞台の裏には、沢山の人の努力や苦勞がたくさんあることがよく分かつた。それは、私にとってとても良い経験になつたと思ふ。またシンポジウムをする機会があれば、是非参加したいと思ふ。その時は、とばしとばしではなく、きちんと話を聴きたい。

清水 美香（教育実践科学2年）

今回のシンポジウムでは、受付・案内係として仕事をしました。正直言って、この係の仕事を甘く考えていました。当日に各参加大学の受付をすればいいのだろうと考えていたのですが、実際仕事を始めると当日までにやらなければいけない仕事がたくさんあることを知りました。名簿を作るだけでも、名前の読み方を確認しながら慎重にやらなければならないし、しなのき会館の鍵の管理や、当日のお茶出しの準備等、細かい部分でも大変な仕事が多くありました。当日は参加者の受付をしていたため、各大学の発表を見ることができず、また、シンポジウムも終盤にかかると、しなのき会館へ行って準備をするなど、シンポジウム自体はあまり見ることはできませんでした。

しかし、日程の合間には各大学の方といる時間が多く、その中でお互いの活動への想いや悩みなどを真剣に話すことができたことを、とてもうれしく思います。他大学の人や、同じ立場で同じような活動をしている仲間と語り合うということは普段ではなかなかできないことです。新たな活動をしようと考え、しかし悩んでいた私たちにとっては、とても心強く、これからの活動に大きく影響するものになったと思います。

今回シンポジウムに参加して、本当によかったと思っています。これはスタッフや参加者全員で創り上げたものだと思います。みなさんありがとうございました。

土田 みどり（社会科学教育2年）

私は、今年初めて全国学生シンポジウムに参加しました。南は熊本、北は上越と、実に広い範囲の大学が参加して開催されたシンポジウムでした。その中で一番印象に残ったのは実践報告です。信州大学では今年度Y O U遊サタデーが閉幕しました。そして、同時に新しい活動への第一歩を踏み出す時でもありました。そのような中、信州大学の発表も含め、参加大学それぞれの発表は実に興味深いものでした。それぞれの発表を聞き「こんなことをやってみたいな」という事がたくさんありました。そういったことを、これから実現していけたらと思います。また、この実践報告によって活動を進めていく上での課題も見えてきて、今後どの様にしていったらより良い活動にしていけるのか考える機会にもなりました。このように課題に正面から向かい合って乗り越えようとする事で、これからの新たな活動がより質の高いものになると思います。そして、そういった活動に対し無限の可能性を感じました。

今回のシンポジウムでは、自分達と同じ思いを持って活動している人たちが全国にいたんだと実感できました。自分たちと目標を同じくしている人たちが全国にたくさんいて、みんながそれぞれに頑張っているのだと思うと、嬉しく感じます。違った地域、違った年齢、違った立場、そんな人たちの話を聴くことができ、様々なことを考える事ができ、また、そのきっかけとなりました。これから頑張っていくためにも、シンポジウムに参加して本当に良かったと感じています。

岡部 桂子（教育実践科学2年）

シンポジウムで実践報告を聞き、その後の茶話会で各大学の人と話をすることにより、これからどういう活動をしていきたいという希望ができ、自分の中で活動の方向性を見出すことができました。大学によって、活動方法も内容も様々で、どんなことでもやりたいという気持ちがあるなら、それを実行しようと思えばできるのだということが分かりました。これからは、諦めずに何でも挑戦していきたいと思います。

接待係は他大学の人との接待という、その名の通りの仕事でしたが、他大学の人と一番仲良くなる機会があり、とても楽しかったです。仕事は、お迎えと観光という車を必要とすることがメインでしたが、接待係に車の所有者が1人しかおらず、他の係の人は仕事が忙しいので、車を集めるのになかなか苦労しました。観光はこちらの準備不足で、行けそうなところをいくつかリストアップしてはいたのですが、場所をきちんと把握していなかったもので、迷ってしまい、たどり着くことができず、変更することになってしまいました。前日に車を出せる人を常に2人ぐらい確保しておくことと、観光については詳しいところまで調べておくことを、しっかりやっておくべきだったと反省しています。茶話会の方は、ほとんど問題なく、和気藹々とした雰囲気のよいものになったと思います。仕事は大変で、不十分な点もたくさんありましたが、シンポジウムに来てくれた方々が、来てよかったと言ってくださったので、やってよかったと心から思います。みなさん おつかれさまでした。

井上 真裕子（理科4年）

昨年にひきつづき、今年もこのシンポジウムに参加しましたが、やはり同じ目的で活動している他大学の人と交流をもつことは、とても刺激的で自分にとってプラスになることが多いなと改めて実感しました。

全体の発表では各大学とも昨年から発展がみられ、特に鳴門教育大学は今年のシンポジウムでの大門君の爆弾発言（！？）から新たな活動がはじまったという報告があり、聞いていてとてもうれしくなりました。シンポジウムが大きな原動力となったこと、自分がその場にいられたことが不思議でもあり感動でもありました。

パネルディスカッションではあまり発展的な討論にならなかったことが非常に残念でした。ディスカッションはその場の流れの中でどれだけ濃い内容の話し合いがなされるか、ということが非常に難しいのですが、今回見てもっと学生同士の意見を戦わせるような形にしなければならないのでは、と感じました。外部の方や先生方の意見も大切だと思いますが、何より中心になっている学生が、どういう意見をもっているかを出し合うことが重要。誰かの助言を聞くことがディスカッションの目的ではないはずですから。

今回私は、全国学生シンポジウムが大きな力を持っていることを確信しました。一人一人の力は小さいけれど皆が集まれば何か活動ができる。一つ一つの大学でできることは少ないけれど全国の大学が集まれば大きなことができる。そんな可能性を感じさせてくれたシンポジウムでした。

大場 浩幸 (数学3年)

今回のシンポジウムで記録用に用意したものは、音声を録音するためのテープレコーダー3個と、普通のカメラとデジタルカメラをそれぞれ1台、デジタルビデオカメラを1台用意しました。ここで私が思うことは、普通のカメラを使うと現像代がかかりますし、パソコンで使うときにはスキャナで取り込まなければならないため、ここはデジタルカメラで統一したほうがいいのではないかと思います。

次に反省すべき点は、テープレコーダーの置く場所をもう少し考えればよかったということです。テープ起こしをする際に、声が聞き取れなかったりするところがあり、後で困ることになるので、スピーカーの近くに置くだけではなく、演題のそばに置いたり、ディスカッションの時には司会者のそばに置いたり工夫をする必要があるでしょう。また、会が予定した時間よりも延びる恐れもあるので、テープは余分に用意しておく必要があります。デジタルビデオを撮る事に関しては、各大学の発表の時にはカメラを固定させておく必要があります。そのため、一通り大学の発表が終わったあとに質疑応答ができれば、それまではずっと固定したままでいいことになり、あとで見やすいものとなるでしょうが、そこは進行の仕方に関わってくるため、話し合いが必要になるでしょう。

記録係は、シンポジウムが終わってからのこと、即ちどうすれば滞りなく報告書ができるかを考えて計画を立てることが大切であります。今回のシンポジウムで得た反省をどこかで活かせるようにしたいです。 以上。

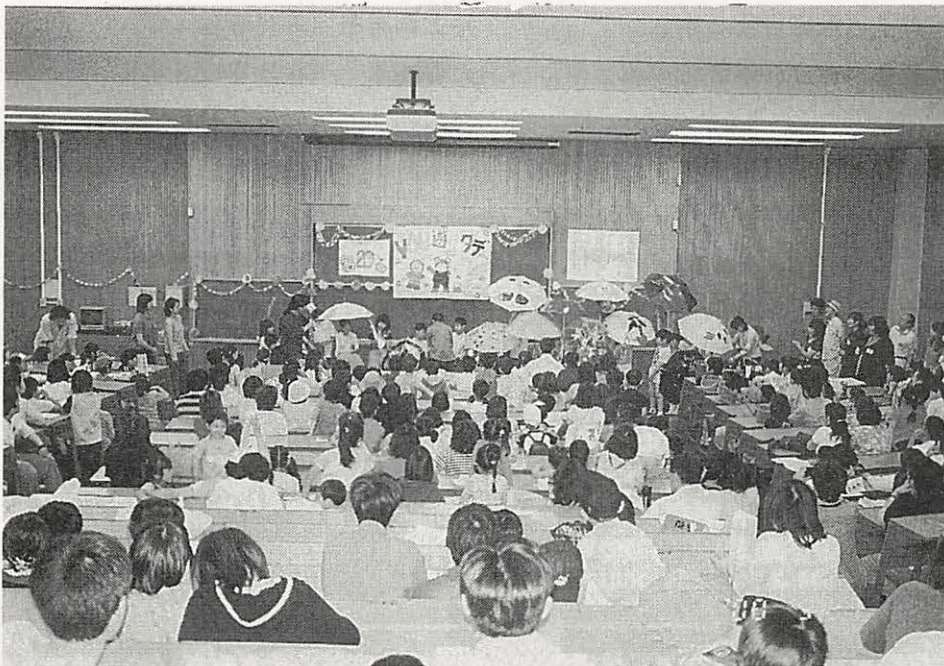
三輪 亜弥子 (幼児教育3年)

YOU遊サタデーに関わったことから、他の大学の皆さんはどのようなフレンドシップ事業を行なっているのか知りたいと思い、今回のシンポジウムに参加させていただきました。普段、他大学の様子を知る機会があまりないため、このように活動を発表し合い、討論する場を設けることは、非常に重要であると感じました。そして、どの大学の皆さんも、「子供たちのために」という共通の思いを抱え、活動に取り組んでいることもわかりました。

会計と受付の係りをさせていただいたのですが、シンポジウムの活動全体を通して、係りといった枠を越え、みんなで協力し合い、運営されており、非常にあたたかいシンポジウムだったと思います。

当日私はシンポジウムに参加することができませんでした。しかし、結果的に私自身は前日遅くまでの会場設営の準備や、会が終了した後の撤収作業などに意欲的に取り組むことができ、とても満足しています。今回私は、会場係長の小池氏や実行委員長的那須さんの期待に、はたしてどれほど沿える働きができていたのかと、それまでの自分の動きに疑問と不満を持ち続けていました。「前日の会場設営、マイク・水差しの用意、機材の操作確認等の仕事などには参加・協力してはいたけど、当日その場にいられないからきつと大した頼りにはなっていなかったのだろう」という申し訳無さから、小池氏の顔色をうかがい、那須さんとは自信を持って話すことができませんでした。しかし、シンポジウム終了後の仕上げの掃き掃除をしていると、「ありがとう、信ほんとにありがとう。」と那須さんから声をかけてもらいました。ひと仕事をやり終えた充実感にあふれるその表情は忘れられないものとなりました。側にいたマーボさんも目に涙を浮かべていました。

私は一労働力としてしか機能しなかったのかもしれませんが、そのときの那須さんの一言は、みんなへのねぎらいの気持ちであふれていたように感じます。こんな自分でも、中心になって必死で働いていた人たちの精神的な支えになれたのだとほっと一息つく思いでした。今回、会場というあまり表に出ない役割でしたが、運営の仲間に加えていただき、このように自分の想像を越える人の心の動きがあることを教えていただきました。関係された方々にささやかながらお礼を申し上げます。どうも、ありがとうございました。



【第20回信大YOU遊サテデー 松本キャンパス20番教室での閉会式】

シンポジウム実行委員会委員名簿

担当教員

土井 進 (附属教育実践総合センター長)

東原義訓 (附属教育実践総合センター助教授)

実行委員長

那須良寛 (教育実践科学専攻 4 年)

副実行委員長・議事進行

小池悠介 (国語専攻 3 年)

コーディネーター

山田理恵 (教育実践科学専攻 4 年)

発表

加藤豊司 (理科専攻 4 年)
杉山雅幸 (野外活動専攻 4 年)
中村祐介 (理科専攻 4 年)
花村尚美 (理数科学教育専攻 1 年)

接待

○鹿子木愛 (教育実践科学専攻 2 年)
井上真裕子 (理科専攻 4 年)
岡部桂子 (教育実践科学専攻 2 年)
小黒あかり (教育実践科学専攻 2 年)
千野加世子 (家庭専攻 3 年)
土田みどり (社会科学教育専攻 2 年)

会場

○小池悠介 (国語専攻 3 年)
中島信 (教育実践科学 3 年)

会計

○相磯素子 (幼児教育専攻 3 年)
三輪亜弥子 (幼児教育専攻 3 年)

書

○小黒あかり (教育実践科学専攻 2 年)

受付案内

○林美智子 (教育実践科学専攻 2 年)
相磯素子 (幼児教育専攻 3 年)
梅田亜紀子 (社会科学教育専攻 2 年)
清水美香 (教育実践科学専攻 2 年)
三輪亜弥子 (幼児教育専攻 3 年)

記録

○西澤俊輔 (理数科学教育専攻 2 年)
井上真裕子 (理科専攻 4 年)
大場浩幸 (数学専攻 3 年)
岡部桂子 (教育実践科学専攻 2 年)
小黒あかり (教育実践科学専攻 2 年)

Cooking 隊

○桑山知美 (家庭専攻 3 年)
清水さやか (英語専攻 3 年)

編集

○小池悠介 (国語専攻 3 年) 岡部桂子 (教育実践科学専攻 2 年)
小黒あかり (教育実践科学専攻 2 年) 鹿子木愛 (教育実践科学専攻 2 年)
清水美香 (教育実践科学専攻 2 年) 林美智子 (教育実践科学専攻 2 年)

補佐

森下房江 (大学院家政教育専修 2 年) 笹崎典子 (数学専攻 3 年) 中谷弥哲 (数学専攻 3 年)
尾川正峰 (技術専攻 4 年) 林一真 (家庭専攻 3 年) 保科幸子 (社会科学教育専攻 2 年)

あとがき

2000年11月11日(土)に行われた第21回「信大YOU遊サタデー」で、「干し柿を作ろう」という講座が開かれました。そこで作られた干し柿が12月9日(土)の第2回全国学生シンポジウムの日に、ちょうど良い具合においしく出来上がり、お茶の時間に用意されました。とても質素なものでしたが、参加された皆様の笑顔があふれ、干し柿講座の学生一同心温まる思いをしました。

フレンドシップ事業の主役である学生が5大学から集って、胸襟を開いて語り合った意義は大きく、今後、年月が経つにつれてふくらんでいくものと思います。このシンポジウムが可能になったのも一重に文部科学省のご理解と学生を派遣して下さった関係大学のご配慮のおかげです。ここに深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

土井 進(附属教育実践総合センター長)

【編集後記】

やっと第2回全国学生シンポジウムの報告書が出来上がりました。編集作業を振り返ると、投げ出したくなることもありましたが、こうして一つの冊子になったことを思うと感慨も一入です。2001年4月から信州大学では新たに「信大YOU遊^{プレイ}広場」が始まりますが、その中でも今回のシンポジウムから得られたものが生かされていくものと思います。

フレンドシップは人の輪です。私はこれまでに多くの輪に入れてもらってきました。これから教育に携わる方、地域で活動される方が、人の輪を作ろうとされる時にこの報告書が何かのお役にたてば、これに過ぎる喜びはありません。今回のシンポジウムに関係して下さった皆様に心からの感謝を捧げます。本当にありがとうございました。

編集委員長 小池悠介(国語専攻3年)

平成12年度
フレンドシップ事業報告書(その2)
第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム

平成13年3月31日 発行

発行 信州大学教育学部
附属教育実践総合センター

〒380-8544 長野市西長野6-10

TEL/FAX 026-238-4245

TEL/FAX 026-238-4246

TEL/FAX 026-238-4244

HomePage : <http://cert.shinshu-u.ac.jp/st/you/index.html>

E-Mail : doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp

higashi@gipnc.shinshu-u.ac.jp

rimada@gipnc.shinshu-u.ac.jp

